

CGS


Center for Gender Studies
International Christian University
Tokyo.....Asia



- CGSは、教育研究棟 (ERB) 3階301にあります。開室時間は平日12～16時です(大学暦に準じた休業日や臨時閉室日があります)。
- 図書・映像資料は一部を除いて貸し出し可能です(要登録)。
- CGS is located in Room 301 on the 3rd floor of the ERB building. It is open from 12:00 to 16:00, Monday to Friday, except when the university is closed.
- We provide books and audio-visual materials related to Gender and Sexuality Studies.

目次

パフォーマティヴィティを援用する男性／男性性研究の考察 ——理論から展望へ	小口藍子	1
「ノンケじゃない」 既婚男性による 「既婚者であること」の実践	白井望人	23
カミングアウトをめぐる可変的な交渉過程／ ある障害をもつ男性同性愛者の経験を事例に	欧陽珊珊	47
ベルサーニをトランスする ——ベルサーニのクィア理論における トランスリーディングの可能性	古怒田望人	69
女性専用車両：保護空間におけるジェンダー構築	小川幸姫	93
2022年度 ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞受賞論文		
2022年度ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞受賞論文に ついて	オリビエ・アムール＝マヤール 生駒夏美 カレン・ベヴァリー F. M.	121
『ノンバイナリーがわかる本』翻訳を通じた 日本へのノンバイナリー概念の導入	小野彩水	124
理想の人形——「型」として描かれる女性身体	中島遥	128



ジェンダー研究センター（CGS）2022～2023年度イベント報告

強制的（異）性愛に抗う：Aセクシュアルの視点から

コーディネーター：羽生有希 133

ジェンダー研究センター（CGS）2023年度活動報告 139

付記

執筆者紹介 152

CGS所員リスト 154

第20号投稿規程 158

編集後記 165

CONTENTS

A Consideration of Men and Masculinity Studies Applying Performativity: From Theory to Prospect	Aiko OGUCHI	1
Performance of “Being Married” by “Not Non-ke” Married Men	Mito SHIRAI	23
Negotiation Process of ‘Coming Out’ with Skilled / Flexible Acceptance: A Case Study of a Gay Man with Physical Disabilities	OUYANG Shanshan	47
Transcending Bersani : The Possibility of Transreading in Bersani’s Queer Theory	Asahi KONUTA	69
Women-Only Carriages: How Sites of “Protection” Construct Gender	Koki OGAWA	93
AY2022 Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies Recipient		
The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies in AY 2022	Olivier AMMOUR-MAYEUR Natsumi IKOMA Beverley F. M. CURRAN	121
<i>They/Them/Their</i> : The Introduction of the Concept of Nonbinary in Japan through Translation	Ayami ONO	124





An Ideal Doll: Female Body as a Mold

Haruka NAKAJIMA 128

CGS Events Reports

Against Compulsory (Hetero)Sexuality:
From Asexual Perspectives

Coordinator: Yuki HANYU 133

AY 2023 CGS Activity Reports

139

Notes

Author Profile 152

Members of the Center for Gender Studies 154

Journal Regulations for Vol. 20 158

Postscript from the Editor 165

研究論文

パフォーマティヴィティを援用する 男性／男性性研究の考察 ——理論から展望へ

小口藍子

要旨

本稿の問題意識は、男性／男性性研究において男性性概念を男性の実践や特性、アイデンティティとして措定することが、男性カテゴリーを自明視する作用をもたらすという点にある。そこで本稿は、本研究分野において中心的な存在であり続けるレイウイン・コンネルの男性性理論を上記の点から批判的に検討し、男性性理論にジュディス・バトラーのパフォーマティヴィティ概念を援用することが有効であることを論じる。パフォーマティヴィティ概念は、男性という一貫したジェンダーは主体内部に存在せず、男性性の反復行為によって達成されようとするプロセスであることを明らかにする。さらにその反復行為は常に失敗し得るものであり、別の再意味付けの可能性を持つ。つまり男性、男性性とは固定的なカテゴリーではなく、常に失敗に開かれた流動的なものである。しかしコンネルの分析では、男性性はあくまで男性たちによる集団的な実践として扱われる。男性たちの実践を何らかの男性性であるとして、コンネルは自ら実践を男性性／女性性の二元的なジェンダー関係に配置してしまう。さらに集団的な実践としての男性性は、常にその担い手である男性というカテゴリーを先立って措定するものである。実践はすでになされたものと認識され、パフォーマティブな男性性の反復行為が不完全かつ達成不可能であるということは看過される。男性性を複数化しつつも固定的に捉えるコンネルの理論枠組みは、どこまでも男性というカテゴリーをあらかじめ固定的に認識する。こうした理論的限界を克服するために、パフォーマティヴィティ概念を援用した男性性理論を展開し、男性・男性性を流動的なものとして捉え直すことが有効だと結論づけられる。最後に本稿は日本社会を対象とする男性／男性性研究を焦点に当て、パフォーマティヴィティを援用

する研究の展望を論じる。

キーワード：

男性、男性性、レイウイン・コンネル、ジュディス・バトラー、パフォーマティヴィティ

1 はじめに

本稿の問題意識は、男性／男性性研究（men and masculinity studies）において、男性性概念を男性の実践や特性、アイデンティティとして捉えることが、固定的な男性カテゴリーを自明視するのではないかという点にある。

男性／男性性研究は第二波フェミニズムを受けて誕生し、欧米圏を中心に着手された研究分野である。本研究分野で最も依拠されるのは、オーストラリアの社会学者Raewyn Connellの男性性理論である。1995年に初版が刊行された*Masculinities*は世界的に大きな影響を与え、Connell理論は本研究分野の中心的存在であり続けている。

他方でConnell理論の存在の大きさは、本研究分野がConnell以降の理論的進展に乏しいことを意味するといえよう。実際に、Connell理論を中心に据える既存の男性／男性性研究の理論的視座は、フェミニズム理論の立場から繰り返し批判を受けている。その主要な批判点は、男性／男性性研究がポスト構造主義フェミニズムの枠組みと距離を取るがゆえに、ジェンダーアイデンティティを前景化した議論に陥っていることである（Beasley, 2012; 2015）。

しかしこうした理論的乖離は、ポスト構造主義フェミニズムが男性性理論にとって無益であることを意味するわけではない。むしろポスト構造主義フェミニズムの枠組み、特にJudith Butlerのジェンダー・パフォーマティヴィティの議論は、男性／男性性の理論において重要な知見をもたらすと筆者は考える。

パフォーマティヴィティ概念は、ジェンダーアイデンティティが主体内部にあらかじめ存在するのではなく、パフォーマティヴな反復行為によって構築されようとするものであることを明らかにした。これが示唆するのは、男性性とは男性の内部に先立って存在するものでも、男性というカテゴリーを確実に成立させる

ものでもないということだ。男性性とは主体化のプロセスにおいて不完全ながら引用されるものである。その意味で「男性性」「男性」とは、決して固定的なカテゴリーではないはずだ。

他方でConnell理論をはじめとする既存の男性／男性性研究は、男性性を男性の実践（の配置）や特性、アイデンティティ意識、あるいは実際の男性の在り方として捉える傾向がある。パフォーマティヴィティの議論を踏まえるところとした理論枠組みは、男性性、そしてそれに紐づく男性カテゴリーを固定的なものとして自明視しているといえるのではないか。しかしながら、ジェンダー・パフォーマティヴィティの観点から男性性理論を批判的に検討する作業は、これまで積極的に行われてこなかった。

これを踏まえ本稿の目的を、Connell理論を批判的に検討し、パフォーマティヴィティ概念を援用する男性性理論の展望を提示することに定める。はじめにConnellの男性性理論が固定的な男性カテゴリーの自明視に帰結することを指摘し、男性性理論にパフォーマティヴィティを援用することが今日においても有効であることを論じる。次に筆者のフィールドである日本社会を対象にした男性／男性性研究に議論の焦点を絞り、パフォーマティヴィティを援用する男性性理論の具体的な展望を明らかにする。

2 男性性理論とパフォーマティヴィティ概念との関係

2-1 Connell理論の立ち位置

Connell理論の検討に入る前に、本章ではその理論的な立ち位置を確認する。フェミニズムに呼応して誕生した男性／男性性研究の理論は、フェミニズム理論から多くの影響を受ける。

Connell理論の枠組みもフェミニズム理論を大きく反映する。1980年代後半頃から展開されたConnell理論には、ポスト構造主義フェミニズムに基づくクイア理論も反映されるものの、その基盤には、家父長制支配を問題視した第二波ラディカル・フェミニズムや物質的不平等を重視するマルクス主義フェミニズムが強く意識されている（小口, 2023, p. 138-9）。Connellは一貫してポスト構造主義に対して懐疑的な態度を取る。*Masculinities* 第二版の序文では、ポストモダニズムの言説分析では経済的不平等などを捉えることができないという懸念を表

す (Connell, 2005, p. xix)。自身の理論への批判に応答したMesserschmidtとの共著論文でも、ジェンダー関係は非言説的な活動を通して構成されると主張する (Connell & Messerschmidt, 2005, p. 842)。このような立場から展開されるConnell理論はポスト構造主義フェミニズムの知見と距離を取るものであった。必然的に、Connell理論を中核的な存在とする男性／男性性研究分野全体がポスト構造主義フェミニズムと距離を置きがちになる。この理論的乖離は、Beasley (2012; 2015; 2023) が繰り返し指摘する通りである。

しかしながら、これはポスト構造主義フェミニズムが男性／男性性の議論にとって無益だということの意味するのではない。むしろポスト構造主義フェミニズムの理論枠組みは、本研究分野に重要な示唆をもたらすと考える。それどころか、それは本研究分野が採る理論的な前提について、根本的な再考を促すものだといえる。ポスト構造主義フェミニズムの理論において最も大きな影響を持つもののひとつはJudith Butlerによるジェンダー・パフォーマティヴィティの議論である。2-2では、Butlerのジェンダー・パフォーマティヴィティが男性性理論にもたらす重要な論点を明らかにする。

2-2 パフォーマティヴィティ概念が男性性理論にもたらすもの

Butler (1990/2018) が『ジェンダー・トラブル』で明らかにしたのは、ジェンダーアイデンティティが予め安定したものとして自己の内側に存在するのではない、ということだ。むしろそれは、常にパフォーマティヴな実践の反復・引用によって外的空間へ生み出されるものである。首尾一貫したジェンダーアイデンティティとは幻想にすぎないと、Butlerは看破する。ジェンダーアイデンティティという幻想は、身体的な意味付けを通じて産出される。その意味でジェンダーは、常にパフォーマティヴなものである。

さらにButlerは、反復によって作り出されるジェンダーが、常にトラブルに開かれていることを論じる。ジェンダー化された永続的な自己とは反復行為によって構造化されたものであることが判明するが、他方でその反復行為は、ときおり起こる不整合のために、この「基盤」が暫定的で偶発的な〈基盤ナシ〉であることも明らかにするのである (Butler, 1990/2018, pp. 247-248, 強調原文)。「起源なき模倣」 (Butler, 1990/2018, pp. 243) であるジェンダーのパフォーマティヴな実

践は、常に別の再意味付け（resignification）の可能性を内包する。つまり、パフォーマティブな反復行為を通じたジェンダーアイデンティティへの自己同一化は、常に失敗の可能性に開かれているのだ。

このようなジェンダー・パフォーマティヴィティの議論は、男性／男性性研究の観点において下記のように理解できるだろう。男性というアイデンティティは、あらかじめ自明のものとして主体の内部に存在するものではない。ゆえにジェンダーカテゴリーとしての男性は、すでに成立済みの存在ではない。むしろそれは、不断の反復行為によって達成されようとするものなのだ。

さらにパフォーマティヴィティ概念は、男性性概念についても重要な認識の転換をもたらす。男性／男性性研究分野において、男性性は男性の実践や男性の特性、あるいは男性のアイデンティティとして主に理解されてきた。しかしパフォーマティヴィティ概念が暴き出すのは、男性性とは、男性の特性や実践であれアイデンティティであれ、決してすでに確立されたものではないという点である。男性性は先立って存在するのではなく、男性としての同一化が試みられる際に反復され引用される。そしてそれは、決して完全なものではあり得ない。男性性の反復実践、そしてそれを通じた男性アイデンティティへの同一化は、常に別の再意味付けへと開かれている。

パフォーマティヴィティ概念は、このようにして男性と男性性が決して達成されないプロセスであることを明らかにする。ここで突きつけられるのは、「男性」や「男性性」というカテゴリーを所与のものとするような認識への根本的な疑義である。男性性とは、男性の内部にあらかじめ存在するアイデンティティでもなければ、男性によって完璧に実践されるものでもない。Howson & Hearn (2020, p. 49) が指摘するように、男性性とは未達成なもの（has not been achieved）というより、常に達成不可能（unachievable）なのだ。そして、達成不可能な男性性の引用の繰り返しを通して試みられる男性への同一化もまた、達成不可能なものである。

前節では、ポスト構造主義フェミニズムの枠組みがConnell理論では積極的に採用されてこなかったことを確認した。次の3章ではConnell理論を批判的に検討し、ジェンダー・パフォーマティヴィティの観点を踏まえてもなお、本理論が有用だといえるかを検討する。言い換えれば、パフォーマティヴィティ概念なし

に男性／男性性を理論化することの妥当性を検証していく。

3 Connell理論の批判的検討

3-1 男性性の理論

本章では*Masculinities* 第二版の議論を中心に、Connell理論を検討する。本稿の問題意識に従い、ここではConnell理論を「男性性」と「男性」カテゴリーの2点から批判的に検討する。

*Masculinities*は三部から構成される。第一部では本書の理論的視座が示される。続く第二部では実証的な分析が行われる。最後の第三部では男性性の歴史的分析を経て、政治的な実践の方向性が明らかにされる。まず本節3-1では、第一部で男性性がどのように理論化されているかを検討する。

第一部ではこれまでの男性性の分析方法が精神分析と性役割理論の2点から批判的に検討され、社会学的な視点の必要性が主張される。男性性を理解するうえでの精神分析の価値は、パーソナリティの構築や欲望の複雑性と同時に、矛盾を孕みながら動的に構築される社会的関係をも把握できるかにかかると、社会科学が必要である (Connell, 2005, pp. 20-21)。一方で性役割理論は概して論理的に曖昧で、権力に関する問題を把握することに根本的な課題を抱えている (Connell, 2005, pp. 26-27)。ジェンダーの近代社会学で重要なのは、ジェンダーは社会的な相互作用に先立って固定されているのではなく、相互作用において構築されるということである (Connell, 2005, p. 35)。ここでConnellは、ジェンダーが社会的な実践を通して構築される様に着目する。

さらにConnellは、ジェンダーとは生物学的性差、社会的に構築される性差、あるいはその双方、のいずれでもないとする (Connell, 2005, p. 45-46)。自然な性差が存在するという生物学的決定論は完全にフィクションの領域である一方で、身体を文化的な意味が書き込まれる対象として捉えるアプローチは身体そのものの存在を軽視する (Connell, 2005, pp. 46-51)。さらに両者の混合もまた適切ではない。それは生物学的性差をより重視し前提とする議論に陥り、社会的なプロセスが二元的な性差を様々に操作する側面は見落とされる (Connell, 2005, p. 52)。

そこで男性性を理論化するためにConnellが着目するのは、身体と実践の議論

である。そこでは「身体－再帰的な実践 (body-reflexive practice)」概念が提唱される。こうした身体と実践への着目が、Connellの男性性理論の展開のうえて重要な鍵となっている。

Connellは、ジェンダーの文化的な解釈の中心となるのは男／女であることの身体的な感覚であるとした (Connell, 2005, p. 52)。ジェンダーの社会的な関係は、身体的なパフォーマンスにおいて知覚され象徴される (Connell, 2005, p. 54)。身体は対象 (objects) と実践の行為主体 (agents of practice) の双方であり、身体が承認され定義されることで実践が構造を形成する (Connell, 2005, p. 61)。身体－再帰的な実践とは、身体と社会的関係との相互関係のパターンである。Connellはジェンダーを、身体－再帰的な実践を通じて構築される社会的なプロセスであるとする。

ゆえにConnellはこれまで男性性の理解に用いられてきた本質主義的な定義、男とは何かという実証主義的な定義、男は何をすべきかという規範的な定義、女性性でないものとする記号論的なアプローチに反論し、男性性はジェンダー関係のシステムなしに存在しないと主張する (Connell, 2005, pp. 68-71)。男性性とはジェンダー関係における場所であり、男性と女性がジェンダーの場所に携わることを通じた実践でもあり、身体的な経験やパーソナリティ、文化下の実践の効果でもある (Connell, 2005, p. 71)。男性性／女性性というとき、それはジェンダーの実践の配置 (configurations of gender practice) を名付けているのだ (Connell, 2005, p. 72)。少なくとも理論上においては、男性性とは単なる男性の実践ではない。そこで見られるのはジェンダー関係の実践の効果と場所、つまり「配置」である。

ここで押さえておく必要があるのは、Connellは「配置」としての男性性を動的なものとして捉えようとする点である。ジェンダー関係を理解するうえで重要なのは「実践を配置するプロセス (the process of configuring practice)」 (Connell, 2005, p. 72, 強調原文) である。

これを踏まえて展開されるConnellの男性性理論は、男性性を複数形として捉え、その相互関係が女性性の支配を含むジェンダー関係を構築すると論じる。男性性を複数化することで明らかになるのは男性性間の「ヘゲモニーと支

配／下位¹と共謀」及び「周縁化／文化的承認」という2つの分析枠組みである (Connell, 2005, p. 81)。

Connell理論において、男性性はジェンダー関係における実践の配置である。さらに男性性は単数形ではなく複数形をとる。複数の男性性の相互関係は全体のジェンダー関係を構成する。ジェンダーとは、そうした社会的実践が男性性／女性性として秩序づけられていくプロセスである。

男性性を動的な配置のプロセスとする本理論は、何らかの男性性が男性の内部にあらかじめ存在するという認識をある程度超えようとするものであるといえよう。こうした論理展開は、本質主義や性役割理論といった、ジェンダーを固定的なカテゴリーとして扱う議論を乗り越えるために採られた。そのため第二部以降の実証分析と政治的実践の議論では、Connell理論が男性性を固定的なものとして扱わないことにどれだけ成功しているかを検討することが必要である。つまり問われるのは、身体－再帰的な実践が男性性としてジェンダー関係に配置されるプロセスを、Connellがどれほど実証的に描けているかである。

3-2 看過される配置のプロセス：男性性の実証分析と政治的実践

第二部ではオーストラリアの男性集団のライフヒストリーが紹介される。ここでは主に4章と5章の内容を取り上げる。

4章では、労働者階級の男性たちの語りが分析される。ここでConnellが着目するのは、労働者階級の男性たちの暴力についての語りである。仕事や仲間たちとの交流、異性愛の実践などについて語るなかで、彼らはしばしば暴力の経験に言及する。Connellは彼らの語りから、仲間同士の集まりが時に暴力沙汰に発展する様を読み取る。その多くは仲間内での男性同士の暴力であり、しばしば移民や同性愛者、女性に対する暴力も含まれる。こうした暴力は、集団的に実践されるものとして語られる。

そのためConnellは彼らの実践を分析するうえで、その集団性に着目する。男性たちの生活環境に対する反応は、個別的でありながらも集団的である

¹ Connell理論のsubordinationは日本語で「従属」と訳されるのが主流である (Connell, 2005/2022)。しかし平山 (2020, p. 55) は、subordinateは必ずしも「従属的」と限らず、subordinate masculinityの訳は「副次的な男性性」や「下位の男性性」の方が適切だと指摘する。これに倣い本稿ではsubordinateを「下位」と訳出する。

(Connell, 2005, p. 106)。それを踏まえ Connell は「基本的に男性性の担い手は集団である」(Connell, 2005, p. 107, 強調原文) であるとする。男性性は集団的な実践 (collective practice) として理解される。そしてこの理解は、以降の分析においても継続される。

つまり実証分析において男性性は、第一部で論じられたような「実践が配置されるプロセス」としてではなく、「男性たちによる集団的な実践」としてみなされる。ここにおいて、Connell の理論と実証の「ずれ」が読み取れる。そしてこの「ずれ」により、集団的な実践がどのようにして男性性に位置付けられ、ジェンダー関係に配置されているのかというプロセスは分析されない。

Connell は労働者階級の男性たちが語る暴力、学校への反抗、軽犯罪、ドラッグやアルコールの乱用、時折の単純労働、バイクや車、短期的な異性愛関係を「ジェンダーの実践」(Connell, 2005, p. 110) と解釈する。Connell は彼らのこうした集合的な実践を「抗議的男性性 (protest masculinity)」と名付ける。ただし抗議的男性性は、ステレオタイプ化された男性役割を単純に遵守するものではない (Connell, 2005, p. 110)。それはジェンダー平等主義的な価値観や、女性的とされるような表現の感覚とも両立可能である (Connell, 2005, p. 110)。

上記のような男性たちの集団的な実践は、ひとまとめに男性性として括られる。他方で、それを男性性と呼ぶことの必然性は説明されない。抗議的男性性が必ずしもステレオタイプの男性役割を反映せず、女性的とされるような実践とも両立できるのであれば、それらの実践を男性性と名付ける必然性があるとはいえないのではないか。もしそれでもそれらの実践が男性性として解釈されジェンダー関係に配置されるプロセスが存在すると Connell が考えるのであれば、なおのことそれが男性性として成り立つプロセスを論じる必要がある。しかし彼らの実践がどのようにして男性性に位置づけられ、ジェンダー関係を構成するのかという分析はなされない。

第一部で提示されたような「配置のプロセス」は看過され、男性性は集団的な実践を指す用語になってしまう。Connell が彼らの実践を男性性と名付ける理由は配置のプロセスにあるのではなく、単に実践の担い手が「男性たち」だということに依存している。言い換えれば「男性たち」による実践を「男性性」と自動的に名付けることで、ジェンダー関係への配置を Connell 自身が行ってしまっ

いるのである。

この問題は5章でも継続する。5章では環境運動にかかわりフェミニズムに向き合うようになった男性たちの語りが検討される。Connellは彼らの活動を「ヘゲモニックな男性性への挑戦」になると評価する (Connell, 2005, p. 127)。それらは具体的には、平等、集団性や連帯、個人の成長、自然との結びつきを重んじるような実践とイデオロギーを指す。では、こうした集合的な実践はどのように配置され、ジェンダー関係を平等化し得るのだろうか。そこでは実践が必ずしも男性性として配置されないような方向性も当然想定されるだろう。

しかしながら Connell は「男性性の消滅」(Connell, 2005, p. 134) は避けられるべきであるとする。なぜならそれは女性化を引き起こし、アイデンティティの喪失へと繋がるためである。問題なのはいまだ家父長的な社会において、脱ジェンダーの実践は進歩的だが動員解除にもなり得ることだ (Connell, 2005, p. 142)。ヘゲモニックな男性性を拒絶する男性たちには、ジェンダー化された性差別に対抗する政治が必要なようだ (Connell, 2005, p. 142)。Connell は男性たちの実践を「男性性」と自ら名付ける姿勢を崩さない。

こうした議論を踏まえ第三部では、不平等なジェンダー関係を是正するような男性性の政治的な実践が論じられる。9章で Connell は性差別に対抗する男性たちにとって「脱出の政治 (Exit Politics)」が有効であると主張する。そこでは男性性／女性性の二分法に抗うような脱ジェンダーの実践に一定の評価が付与されつつも、やはりそれは前面化されない。代わりに10章で論じられるのは、新たな男性性を再形成し再配備することの可能性である。

そこでまず焦点が当たるのは、身体－再帰的な実践である。そこでは身体の行為主体性を喪失するのではなく拡張すること、つまりこれまでと異なる男性身体の使い方や感じ方、見せ方を探求することが求められる (Connell, 2005, p. 233)。それはジェンダーの文化的な要素を消す (delete) ことではなく、組みなおす (recompose) ことを意味する (Connell, 2005, p. 234)。Connell はこうした実践を「脱ジェンダー化する戦略」(Connell, 2005, p. 232, 強調原文) と呼称する。しかし上記のように、実際には脱ジェンダー化された (degendered) 実践よりも、男性性として再ジェンダー化された (regendered) 実践に焦点が当たる。

そして「脱出の政治」に向けた「男性性の政治」において重要になるのは、男性性はジェンダー以外の社会関係に影響されながら複数の形態をとる点である。職場や組織、コミュニティや地域での社会的な闘争は必然的に異なる論理を持ち、しばしば異なる男性集団の利害の葛藤を明るみに出す (Connell, 2005, p. 238)。そしてそこに、異なる集団同士の利益を重ね合わせることによる社会正義のプロジェクトとしての連帯の政治が見いだされる (Connell, 2005, p. 238, 強調原文)。複数の男性性の間には異なる利害関係や対立が存在する。ゆえに男性性の再配置 (reconfiguration) と変化 (transformation) は新しい可能性に開かれている (Connell, 2005, p. 243)。

こうした論理展開は男性性／女性性の二元論に基づき、男性たちの実践は男性性へと回収されていく。こうした男性性の再形成と再配置は、ジェンダー関係を平等化するために必要なプロセスであるとして正当化される。そして繰り返しになるが、(再)配置のプロセスは実証的に検討されるというより、Connell自身によって行われる。

Connell理論は男性性／女性性の二元論を歴史的に形成されるものであるとしながら、ある時点においては既に成立したものとみなす。そのため男性性／女性性の二元的なジェンダー関係に回収されないような実践や、そうした実践を可能にするための方法は模索されない。そこでは反復行為としての男性性が常に達成不可能であり、失敗の可能性に開かれるということは見逃され続ける。

3-3 集合的な実践の担い手としての「男性」

ここまでの「男性性」の検討からは、Connellが実証分析と政治的実践の議論では、男性たちによる集団的な実践を男性性と位置づけていたことが明らかになった。次に「男性」カテゴリーを検討するうえでは、第一部の実践の議論に再び着目することが有効である。Connell理論で男性カテゴリーは身体－再帰的な実践の担い手として想定されるためである。

先述のように、実践の配置 (configuration) としての男性性は、固定的ではなく動的なプロセスである。ただし動的な側面は、あくまで配置の「プロセス」のみにおいて強調されることに注意したい。つまり実践自体は既に「なされたもの (things done)」 (Connell & Messerschmidt, 2005, p. 832) として捉えられるので

ある。実践を「なされたもの」として固定的に捉える Connell 理論は、反復的な主体化の実践を通して男性というカテゴリーが成立されようとする様を検討するものではない。むしろそれは実践の担い手としての男性カテゴリーの存在を、実践に先立つものとして想定する。

しかし2-2で検討したButlerの議論に鑑みれば、男性というカテゴリーは予め存在するものではなく、不完全な反復行為を通して成立されようとする。そしてそれは常に達成不可能なプロセスである。実践がなされる（doing）なかで男性としての主体化がなされることを看過する Connell 理論は、カテゴリーとしての男性の不完全さに無批判であったといえよう。

第二部の実証分析においても、男性というカテゴリーは自明なものとしてみなされる。先にも述べたように、分析の対象となるのは男性たちのライフヒストリーである。Connellは彼らが語る集合的な実践を、既になされたもの（things done）とみなす。そしてその実践を主に男性性と名付けていく。そこでは実践がまさになされるなかで、彼らが男性として主体化しようとする様は看過されてしまう。

Connell 理論において、男性的な実践の担い手である男性たちは、どこまでもその実践に先立つものとして想定される。Connellはジェンダーを「固定的なカテゴリーではない」（Connell, 2005, p. 37）と想定しながらも、ジェンダーの実践をなされたもの（things done）と措定する。そのため実証分析でも、結局のところ、実践の担い手としての男性カテゴリーの安定性が批判的に検討されることはなかった。Connell 理論において男性というカテゴリーは、既に成立したものとして論じられる。そしてそれが主たる男性性の担い手であるという前提は保持される。

3-4 Connell 理論の限界

Connellは男性性を理論的には「ジェンダー関係における実践の配置」と措定し、配置は動的なプロセスであると強調する。しかし実証分析や政治的実践の議論に移ると、男性性は「男性たちによる集合的な実践」として扱われる。そこでは、それぞれの実践がジェンダー関係に配置されるプロセスが実証的に検証されることはない。男性たちの実践は、それが現行のジェンダー関係に従うものでも

対抗するものでも、基本的に男性性として位置付けられる。つまり男性たちの実践を男性性として名付けることで、男性性／女性性の二元的なジェンダー関係への配置を Connell 自身が行ってしまっているのだ。

男性たちの実践は、彼らが過去を振り返る語りから検証される。そのため実践はなされたもの (things done) としてみなされる。そこではパフォーマティヴィティ概念が明らかにした、男性性とは固定的なものではなくパフォーマティヴな反復であるということは検討されない。

パフォーマティヴィティ概念が明らかにするのは、反復行為としての男性性はどこまでも達成不可能だということである。つまり男性性の反復がまさになされる (doing) プロセスは、それが意図せず失敗し、別の再意味付けへと開かれる可能性を持つ。しかしながら男性性をどこまでも固定的なものともみならず Connell 理論は、男性性の達成不可能性を見逃してしまう。Connell はジェンダーを予め固定されたものではないと述べてながらも (Connell, 2005, p. 35)、結局のところ固定化に陥ってしまう。

さらに既になされた実践としての男性性は、実践の担い手としての男性を実践に先立つものとして措定する。そこではパフォーマティヴな反復行為を通じて、男性が主体化していくプロセスは検討されない。男性カテゴリーは、男性性の主な担い手としてつねに先立って想定されるのである。

先に述べたように Connell 理論は歴史や社会関係の複数性に着目し、男性性を複数化する。しかしどれだけ男性性を複数化しても、それが根本的には流動的であることに切り込むものではなかった。「男性性は集合的な実践で、その担い手は男性(たち)である」という Connell 理論の視座は、男性カテゴリーをあらかじめ自明視することから逃れられない²。

² こうした視座を持つ Connell 理論は、シスジェンダー・ヘテロセクシュアルの男性性を認識の中心に据えることになる。Connell 理論がシスジェンダー・ヘテロセクシュアル中心であるという批判は、これまでもなされたという。これに対し Connell & Messerschmidt (2005, p. 837) は、本理論はあくまでヘテロセクシュアリティを問題視し、身体を自然化する議論を克服するものだと反論する。しかし本稿で論じてきたように、Connell は男性たちの集合的な実践を男性性とみなし、それを男性性／女性性の二元的なジェンダー関係に配置する。そこではヘゲモニックな男性性がゲイの男性性を下位に置くプロセス、さらにはそれが決して達成済みではないことは検討されない。さらに本理論では、実践としての男性性がいかに「ペニスのある身体」(Connell, 2005, p.231)、つまりシスジェンダー性とかかわりながら配置されるかも説明されない。上

ゆえに、フェミニズム理論の立場からConnell理論を下記のように批判するBeasleyの見解の妥当性が確認される。男性性を複数の類型や集団とするConnellの記述はモダニスト的なアイデンティティの理解に留まり、主体を超えた、そして主体の中の流動性への関心というポストモダンの思想とは質的に異なるものであった (Bealey, 2012, p. 757, 強調原文)。

本稿は、こうした問題がConnell理論での男性性の論じられ方に起因することを論じてきた。そしてこの理論的限界を乗り越えるために、男性性理論においてパフォーマティヴィティ概念を援用することが有効だといえるだろう。パフォーマティヴィティを男性性理論の枠組みに援用することで、ジェンダー・カテゴリーとしての男性や、それを成立させようとするものとしての男性性が、つねに達成不可能なものであることを論じることが初めて可能になるからだ。

次章ではこの議論を筆者のフィールドである日本社会を対象とする男性／男性性研究に引き付けて、パフォーマティヴィティを援用する男性／男性性研究の展望を論じる。

4 パフォーマティヴィティを援用する男性／男性性研究の展望：

日本の研究群から

4-1 Connell理論への偏向：多様な男性像としての「複数の男性性」

「はじめに」で述べたように、Connell理論はグローバルに展開される男性／男性性研究において最も影響力のある理論であり続けている。日本の男性／男性性研究においてもそれは例外ではない。

Connell理論に依拠しながら日本社会の男性／男性性を検討するのは多賀(2001)の研究である。多賀は男性たちへのライフストーリー・インタビューを通して、彼らのジェンダー形成の過程を明らかにする。

しかし多賀はConnell理論をそのまま援用するわけではない。多賀はこれまでの研究では男性たちの性規範をめぐる葛藤が不可視化されることに問題意識を持ち、男性内の多様性を明らかにする必要性を主張する (多賀, 2001, pp. 35-36)。ゆえに多賀はConnell理論のような男女間の不平等という「大きな絵」を「幅

記の反論が説得力を持つとはいえないだろう。

の広い筆」で描くのみならず、「細部を描く小筆」の分析枠組みが必要だとする（多賀, 2001, p. 88）。そのような前提のもと、性差別的イデオロギーと反性差別的イデオロギーが交錯する現代日本社会において、それらと葛藤したり交渉したりする「男性内の多様性」が描き出される。

多賀（2001）の研究はConnell理論に部分的に依拠しつつも、「男性内の多様性」に着目することを重視する。こうした男性（性）の多様性や複数性が日本社会の男性／男性性研究の大きな関心のひとつにあることは、渋谷（2001）も指摘する通りである。そして「男性内の多様性」への関心は、Connell理論の「複数の男性性」概念と呼応していく。

Connell理論をより前面に押し出して現代日本社会の男性性の分析を行うのは、田中（2009）の研究である。田中はConnell理論の「複数の男性性」に着目する。しかしそれは単に男性性にもさまざまな形態があると主張するためではなく、男性性の競合によってどのようなジェンダー秩序が構築されているのかを明らかにするためだとする（田中, 2009, p. 13）。田中は複数の男性性の関係をマクロに把握するものとしてConnell理論の援用を試みる。それを踏まえ、退職者の男性や「オタク」男性などの幅広い多様な男性像が分析される。

そこで男性性は「ある社会で男性と関連づけて把握される諸特性」（田中, 2009, pp. 10-11）とされる。さらに男性性は、ヘゲモニックな男性性が「フルタイム労働に従事しながら妻子を養う男性像」（田中, 2009, pp. 157-158）とされるように、実際の男性像を表す概念としても用いられる。

田中は「男性性は決して一枚岩ではなく、その内部には多様性や矛盾を内包している」（田中, 2009, p. 159）と結論づける。田中は複数の男性性（男性像）の多様性や、それらの間の矛盾を含んだ関係を分析する。しかしそれはConnell理論と同様に、パフォーマンスな反復としての男性性そのものの達成不可能性を検討するものではない。

このように日本の男性／男性性研究において、Connell理論は「男性内の多様性」という関心とともに依拠され、特に「複数の男性性」の点から受容された。「複数の男性性」は、男性たちの多様性やその関係性を描くものとして援用される。そのため男性性概念はConnell理論で定義された「実践の配置」というより、男性の規範や特性、男性の在り方として扱われる。

こうした分析枠組みは、Connell理論と同様、Butlerのジェンダー・パフォーマンスティヴィティを反映するものではない。「複数の男性性」で「多様な男性像」を描き出すことは、あくまで男性らしさや男性像が複数であることを指摘するに留まる。「多様な男性像」やその関係性を表す概念としてConnell理論の「複数の男性性」を援用する議論は、実践や理念型としての男性性がいずれも達成不可能であること、その意味で男性カテゴリーもまた流動的で達成不可能であることを前面化するものではない。

さらには、Connell理論自体の妥当性も十分に検討されてきたとはいえない。川口（2014）はConnell理論を批判的に検討し、男性性間のヘゲモニー闘争と多元的なジェンダー構造に着目してConnell理論を援用することを提案する。しかしこの議論でも、Connell理論が男性性を「男性たちの実践」として運用することの根本的な問題は検討されない。川口はConnell理論を批判的に検討したが、それはConnell理論をいわば「延命」することに留まる。

このように、日本社会を対象とする男性／男性性研究では、特に「複数の男性性」に着目してConnell理論が受容されてきた。しかし今日に至るまで、Connell理論自体の妥当性は十分に議論されてきたとはいえない。そのためConnell理論に内在するような「男性」や「男性性」の認識の問題は、4-2で挙げる研究を除いて、殆ど検討されていない。ゆえに日本社会を対象とする男性／男性性研究においても、パフォーマンスティヴィティを援用して男性性理論を展開することには一定の有効性があるといえる。

最後に4-2では、日本社会を対象とする男性／男性性研究群において、ジェンダーのパフォーマンス的な側面に着目して展開される先行研究を検討し、今後の展望を深める。

4-2 パフォーマンスティヴィティを援用する男性性理論の展望

本節では、日本社会を対象とする男性／男性性研究のうち、ジェンダーのパフォーマンス的な側面を捉えるものとして、平山（2017）の研究を検討する。それを通して、パフォーマンスティヴィティを援用する男性性理論の展望をより具体的に論じる。

平山（2017）は親の介護を担う息子たちの調査を通じて、自立・自律と結び

付けられる男性性が、息子介護を可能にする女性たちのお膳立てを「なかったこと」にすることで成り立つ側面を明らかにした。この研究はジェンダー・パフォーマティヴィティの枠組みを前面に押し出してはいないが、ジェンダーが行為遂行的な言説実践によって組み立てられるプロセスを明らかにするものだと見える。

平山によれば、男性性は、私的領域における、あるいは私的領域に対する依存を不可欠なものとしながら同時にそれを「なかったこと」にする、という欺瞞的な操作によって完成する（平山, 2017, p. 223）。この指摘は、実践や規範としての男性性が決して成立済みのものではなく、むしろ他者との交渉のなかで成り立とうとするプロセスであることを示唆する。

平山は彼らが「息子＝男性である自分が親を介護すること」をどのように説明可能にするかを分析する。そこで明らかにされるのは、その説明が「介護は女性のごとである」という伝統的で規範的な言説を解体することによってだけでなく、むしろ「介護は身体的にタフな男性の方が向いている」などといった伝統的な性別分業を維持する言説を用いても行われることである。平山はButlerの議論にも依拠しながら、こうした息子介護者たちの語りが編み出した論理は性別分業へ抵抗するための言説資源となり得ると指摘する（平山, 2017, p. 150）。

平山の研究は、ジェンダー規範の解釈が言説によってパフォーマティヴに構築されること、さらにその言説はときに矛盾含みで組み立てられることを明らかにする。そこでは、ジェンダー規範の説明実践が決して一貫したものではないことが提示される。他方でこれは、息子性や男性性とされるジェンダー規範の「欺瞞」を指摘することに留まり、その失敗の様相を詳らかにするものではない。つまり本研究は、男性性の説明実践が達成不可能であることを提示するものの、それがどのようにして別の再意味付けに開かれているかを積極的に検討するものではない。

Butlerが指摘するように、ジェンダーの「反復行為は、ときおり起こる不整合のために、この『基盤』が暫定的で偶発的な〈基盤ナシ〉であることも明らかにするのである」（Butler, 1990/2018, pp. 247-248, 強調原文）。パフォーマティヴィティを援用する男性性理論を打ち立てるにあたっては、男性性が〈基盤ナシ〉であることだけでなく、「不整合」としての「再意味付け」が、現にどのように

生まれているかを詳細に検討することも必要だろう。常に言説／物質的に存在するものの棄却されようとする「再意味付け」の存在を詳らかにすることは、より豊かな「男性優位を前提としない対抗言説」(平山, 2017, p. 151)を集めることを可能にするだろう。

その意味で「再意味付け」への着目は、Connellが男性たちを「動員解除させ得る」(Connell, 2005, p. 142)として棄却したような、男性たちの実践を男性性／女性性の二分法に帰結させずに物質的な不平等を是正する政治的な取り組みでもある。それはまさに「どんなパフォーマンスが、そこで、男性性と女性性の場所やそれらの安定性についての再考を促すのか」(Butler, 1990/2018, p. 244, 強調原文)を検討することである。

5 おわりに

本稿の問題意識は、男性／男性性研究において、男性性を男性の実践や特性、アイデンティティと措定することが、男性カテゴリーを自明視する作用を持つのではないかということにあった。この点に基づき本稿では、本研究分野において中心的な存在であり続けるConnell理論の批判的検討を行った。Connell理論は、結果的に男性性を「男性たちによる集会的な実践」として捉え、それがジェンダー関係に配置されるプロセスを検討するものではない。そしてそれゆえに、実践としての男性性はその担い手が男性であることに依存し、ジェンダーカテゴリーとしての男性を男性性に先立つものとして措定する。つまりConnellの男性性理論は、男性カテゴリーを自明視したうえで展開されるものであった。

そのため、男性性理論にButlerのパフォーマティヴィティ概念を援用することは、今日においても有効である。パフォーマティヴィティの議論は、ジェンダーが主体内部にあらかじめ存在するものではなく、主体化のプロセスにおいて不完全ながら反復的に引用されるものであることを明らかにした。男性性とは先立って存在するのではなく、男性としての同一化が試みられる際に不完全ながら反復され引用される。そして男性性の反復実践を通じた男性アイデンティティへの同一化は決して完全なものではなく、常に別の再意味付けへと開かれる。男性性理論にパフォーマティヴィティを援用することは、男性・男性性を固定的なものとしてではなく、流動的で達成不可能なものとして議論することをはじめて可能に

するのである。

日本社会を対象としてConnell理論を受容する男性／男性性研究においても、同様の問題が確認された。男性性は男性の特性や男性の在り方とされ、その達成不可能性はほとんど論じられない。しかしながら、ジェンダーのパフォーマティヴな側面に着目する研究もわずかに存在する。本稿では平山（2017）の研究を取り上げ、今後の男性性理論にパフォーマティヴィティを援用するにあたっては、その再意味付けの様相を詳らかにすることが重要であると論じた。

このように本稿の意義は、Connell理論が持つ根本的な課題を明らかにし、Connell理論に依拠し続けることの限界を示した点にある。さらに本稿ではConnell理論を乗り越える方向性として、男性性理論にパフォーマティヴィティ概念を援用して男性性の反復が失敗する様を明らかにすることを提起した。

他方で本稿は理論的考察に留まるものであり、今後の研究では実証的なデータに基づいて具体的な理論枠組みを検証する必要がある。さらにはその作業を通じて、パフォーマティヴィティ概念の有効性と限界を見極めていくことも、残された課題である。

いずれにせよ、今後の男性／男性性研究においてはConnell理論を金字塔とするのではなくそれを批判的に乗り越える作業が必至であるとして、本稿を閉じたい。

Acknowledgments

本研究はお茶の水女子大学ナガセ研究奨励金、JSPS科研費23KJ0959の助成を受けたものである。また本稿の執筆にあたっては、2名の匿名査読者から貴重なご指摘を賜った。記して感謝申し上げたい。

References

- Beasley, C. (2012). Problematizing contemporary men/masculinities theorizing: The contribution of Raewyn Connell and conceptual-terminological tensions today. *The British Journal of Sociology*, 63(4), 747-765.
- Beasley, C. (2015). Caution! hazards ahead: Considering the potential gap between feminist thinking and men/masculinities theory and practice. *Journal of Sociology*, 51(3), 566-581.
- Beasley, C. (2023). Embrace or engagement?: Critical studies on men and masculinities and feminist posthumanism/ new materialism. In Mellström, U. & Peace, B. (Eds.), *Posthumanism and the man question: Beyond anthropocentric masculinities* (pp. 139-153). London: Routledge.
- Butler, J. (2018). 『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』（竹村和子, Trans.）. 東京：青土社. (Original work published 1990).
- Connell, R. W. (2005). *Masculinities* (2nd ed.), Berkeley, and Los Angeles: University of California Press.
- Connell R.W. (2022). 『マスキュリニティーズ：男性性の社会科学』（伊藤高雄, Trans.）東京：新曜社. (Original work published 2005).
- Connell, R. W. & Messerschmidt, J. W. (2005). Hegemonic masculinity: Rethinking the concept. *Gender and Society*, 19(6), 829-859.
- Howson, R. & Hearn, J. (2020). Hegemony, hegemonic masculinity, and beyond. In Gottzén, L., Mellström, U. & Shefer, T. (Eds.), *Routledge international handbook of masculinity studies* (pp. 41-51). New York: Routledge.
- 平山亮. (2017). 『介護する息子たち：男性性の死角とケアのジェンダー分析』. 東京：勁草書房.
- 平山亮. (2020). 「男性性による抑圧」と「男性性からの解放」で終わらない男性性研究へ』. 『女性学』27, 42-56.
- 川口遼. (2014). 「R.W.Connellの男性性理論の批判的検討：ジェンダー構造の多元性に配慮した男性性のヘゲモニー闘争の分析へ』. 『一橋社会科学』6, 65-78.
- 小口藍子. (2023). 「男性／男性性研究はどこに向かうのか？：研究動向と展望』. 『人間文化創成科学論叢』25, 137-148.
- 渋谷知美. (2001). 「『フェミニスト男性研究』の視点と構想：日本の男性学および男性研究批判を中心に』. 『社会学評論』51(4), 447-463.
- 多賀太. (2001). 『男性のジェンダー形成：〈男らしさ〉の揺らぎのなかで』. 東京：東洋館出版社.
- 田中俊之. (2009). 『男性学の新展開』. 東京：青弓社.

Abstract

A Consideration of Men and Masculinity Studies Applying Performativity: From Theory to Prospect

Aiko OGUCHI

Problematized in this article is the notion that men and masculinity studies (MMS) have conceptualized masculinity as men's practice, identity, or something that determines men's actions, and that this conceptualizing helps to take the category of men for granted. Thus, the theory of masculinities by Raewyn Connell, which has been the most influential in MMS, is critically considered in terms of the above point. Further, in doing so, it is indicated that it is effective to apply the concept of performativity by Judith Butler to theorize masculinity. The concept of performativity reveals that the category of men as a consistent gender never exists in subjects, and it is an unachievable process through incomplete repetition of masculinity. In addition, repetition can always fail, with the possibility of resignification. Performativity shows that men and masculinity are not fixed but fluid, with the possibility of failure. However, in Connell's analysis, masculinity is recognized as men's collective practice. With the notion of masculinity as men's collective practice, she herself positions each masculinity into gender relations based on the dualism of masculinity/femininity. It is further pointed out that masculinity as collective practice always assumes the category of men as bearers of masculinity in advance. Practices are recognized as things already done, and this notion ends up ignoring the fact that performative repetition of masculinity is incomplete and unachievable. It is pointed out here that Connell's theoretical framework multiplies masculinities, but in the end she treats them all as fixed. Therefore, the fixed category of men is always assumed in advance. It is concluded in this article that to overcome this theoretical limitation, it is effective to develop theories of masculinity applying performativity, which enables us to reconsider

men and masculinity as fluid. Finally, focusing on MMS in Japan, this article discusses some prospects of studies applying performativity.

Keywords:

men, masculinity, Raewyn Connell, Judith Butler, performativity

研究論文

「ノンケじゃない」既婚男性による 「既婚者であること」の実践

白井望人

要旨

女性と結婚するゲイやバイセクシュアル男性とその妻や子供との関係に注目した研究は、MOM (mixed-orientation marriage) 研究と呼ばれ、盛んに行われている。しかし、その多くが結婚した理由やカミングアウト後の夫婦関係、男性のアイデンティティに注目し、多く存在しているはずのカミングアウトしていない既婚ゲイ／バイ男性や、彼らが他の男性間のセクシュアルまたはロマンティックな関係を結ぶ際に、「結婚していること」をどう扱うかは詳しく検討されてこなかった。また、多くの研究が彼らを「異性愛／同性愛」の枠組みで解釈しており、この枠組みで捉えられない男性たちの経験が軽視されてきた。

本稿はそうした関係性を分析するためにまず、セクシュアルマイノリティによる異性愛者を指す「ノンケ」というスラングを利用し、セジウィック (2001) や竹村 (2002) の理論を援用して、ホモソーシャリティを、「異性愛的な」結婚やセックスをするかという、行為に基づく「ノンケ／じゃない」の視角で分析した。これにより、二元論的な「異性愛／同性愛」の枠組みから離れた男性たちの解釈が可能になった。その上でノンケじゃない既婚男性2名の語りを分析し、ホモソーシャリティにおける彼らの「結婚していること」をめぐるパフォーマンス的な実践を分析した。

その結果として、ホモソーシャリティ上では異性愛規範へのコミットの具合が「結婚していること」として具体的に測られることや、それがノンケじゃない男性によって「ノンケらしさ」として解釈され、既婚男性に対する性的興奮や拒絶として現れることがわかった。ノンケじゃない既婚男性はこれらの反応に対して、「既婚者であること」を隠して無標のノンケじゃない男性になったり、逆に「既婚者であること」を提示し、自らの魅力のアピール手段や「同じ境遇」の男

性と繋がる手段として利用したりしていた。

キーワード：

既婚ゲイ、MOM（性的指向が異なる二者の結婚）、ノンケ／ノンケじゃない、ホモソーシャリティ、異性愛規範

1 はじめに

日本において、女性と結婚経験のある「男に興味がある」（セジウィック, 2001, p.137）男性、いわゆる「既婚ゲイ／バイセクシュアル」を自称し、そのように呼ばれている／いたシスジェンダー男性は以前から多く存在していた。前川直哉（2017）は、大正時代の性欲学雑誌『変態性慾』から、日本ではじめて全国規模で流通し、一般書店にも置かれた（石田, 2018）ゲイ男性向け雑誌『薔薇族』の1980年頃までの読者投稿において、ゲイ男性たちにとって結婚の是非が「悩み」の主題となり続けていた様子を分析している。Lunsing（1995）が1986年から1993年の『薔薇族』を分析したところによれば、同誌編集長の伊藤文学は実際にこうした結婚を推奨し、分析対象80号分の文通欄に、761件のゲイ男性の結婚募集が掲載されていた。

こうした性的指向が異なる二者の結婚（mixed-orientation marriage: 以下MOM）の研究は様々な関心のもとで行われている。なぜ彼らが結婚するかについて、Ortiz&Scott（1994）は既婚男性へのインタビューを通して、「保守的社會化理論（conservative socialization theory）」（Ortiz&Scott, p.68）としてまとめている。この理論では、彼らの結婚は、ホモフォビアを含む社会規範の内面化という無意識的な理由と、結婚をセクシャリティに関する問題の「解決策」とみなす意識的な理由の結合であるとみなされている。Higgins（2002, 2004）も同様に、内なるホモフォビアや宗教的背景を結婚の理由として分析している。また、ローカルな文脈に注目した研究も存在する。Kissil&Itzhaky（2015）はアメリカの正統派ユダヤ教コミュニティにおける既婚ゲイ男性からの聞き取りから、自らのセクシュアリティを隠し続ける緊張を抱えながらも、女性との結婚が男性たちにとってコミュニティでの生存戦略として採用されていると述べる。加えて中国で

は、一人っ子政策の結果として親からの結婚の圧力が高まっていることや、儒教文化がセクシュアルマイノリティを含めた人々にホモフォビアを内面化させ、彼／彼女らに結婚を促している可能性が指摘されている (Xu et al., 2022, Shi et al., 2020)。

他の視点として、妻へのカミングアウト後にバイセクシュアル男性 (以下バイ男性) が夫婦関係をどう再構築するかをゲイ男性の場合と比較した研究 (Buxton, 2000) や、男性自身がどうアイデンティティを受容するのかに焦点を当てた研究もある (Percy, 2005)。Percy (2005) は、社会に蔓延するホモフォビアのために、男性たちが自らのセクシュアリティを認められず、ゲイ／バイ男性とのつながりを作れないままに女性との結婚を選ぶという分析をしている。そして、彼らが周囲にカミングアウトをした後は「健全 (healthy) で正直 (honest) な」(Percy, p. 36) アイデンティティが構築されるとしている。また、自助グループに注目し、中国国内のゲイ／バイ男性の妻である女性 (中国では同妻 (tongqi) と呼ばれている) がSNS上で自らの経験をどう解釈するか (Tang et al. 2020) や、サンフランシスコにおける妻たちの自助グループの重要性を主張するもの (Auerback & Moser, 1987) や、既婚男性のオンライングループを分析したもの (Peterson, 2000) もある。

彼らは女性と結婚し、周囲の多くの人々には異性愛者として認識されている。その一方で彼らは男性とセックスや恋愛をし、「ゲイ」を自認する者も多い (Peterson, 2000)。彼らの多くは独身のゲイ／バイ男性同様、同性に欲望を持つことが「ばれる」ことを恐れ、自らのセクシュアリティを隠す。Swan&Benack (2012) は、モノガミー規範とセクシュアリティは不変であるという規範が彼らへの批判の典拠となっていると分析する。この規範によって、既婚男性は妻などから「裏切り者」として糾弾されるだけではなく、ゲイ／バイ男性からも批判されることがある。これに加え、前川 (2017, pp.218-219) は女性との非対称なジェンダー構造のもとに男性たちの異性婚という「解決策」が図られている事実を批判している。

しかしこれらの研究は、既婚ゲイ／バイ男性が「既婚男性」としてゲイ男性／バイ男性と関わる中でどのような経験をしているのかについては踏み込んだ考察をしていない。いくつかの研究は、既婚男性のゲイ／バイ男性との性交渉やデー

トなどの交流について、結婚前後で変化がない (Higgins, 2002) としたり、妻へのカミングアウト後に増加する (Percy, 2005) としたが、男性間の交流において、「結婚していること」が具体的にどのような影響を与えるのかには注意が払われてこなかった。

また、これらの研究はSwan&Benack (2012) が異性愛／同性愛規範からも自由な場所でクィアな既婚男性の経験を読み解くことを試みた以外では、基本的に異性愛／同性愛の枠組みで既婚ゲイ／バイ男性たちの経験を分析している。そこで本稿は、既婚男性たちが他の独身／既婚のゲイ／バイ男性と比較してどのような立場におり、彼らとの交流の中で「結婚していること」がどのように影響したのかを、セクシュアルマイノリティが異性愛者を指す「ノンケ」というスラングから着想を得た「ノンケじゃない」という概念を使うことで、異性愛／同性愛の枠組みから離れた地点で解釈していく。

まずそのために、単なる (セクシュアルマイノリティから見た) 異性愛者とだけ解されてきた「ノンケ／じゃない」概念を再定義することで、異性愛／同性愛の二項対立では表せない男性たちの多様な経験を分析可能なものへとまとめ上げる。そのうえでセジウィック (2001) のホモソーシャリティ概念を「ノンケ／じゃない」の尺度で見ること、男性同士が「ノンケらしさ」を欲望する／しない概念上の場としてホモソーシャリティを再定義し、「結婚していること」と「ノンケらしさ」の関係について考察する (2節)。そして、その概念に基づいて男性にセクシュアル (または／かつ) ロマンティックな欲望を覚える既婚男性2名の語りを分析し (3節)、ホモソーシャリティの場における彼らの「結婚している」ことに対するパフォーマティブな実践の様子を考察する (4節)。最後に全体をまとめた上で、「ノンケ／じゃない」という言葉の意義を再度確認し、本研究の限界について述べる (5節)。

2 概念装置としての「ノンケ／じゃない」考

本節では、実際の既婚ゲイ男性の語りを分析する前段階として、「ノンケ」という言葉の定義上の意味と、その虚構性やパフォーマンス性について述べる。その後、「ノンケじゃない」という一見ただの補集合にも見える概念について、特定セクシュアリティを名指ししないという点から、既婚ゲイ男性を分析するう

えでの有効性を述べる。続いて、その「ノンケ」と「ノンケじゃない」という領域はどのような関係にあるのかを、セジウィックのホモソーシャルリティの分析や竹村和子の「正しいセクシュアリティ」の規範についての概念を援用することで説明する。

2-1 「ノンケ」という言葉の機能

まず最初に、「ノンケ」というスラングの定義とその虚構性やパフォーマンス性について考察していく。ゲイ男性向け雑誌『バディ』の1995年10月号では「夏のノンケ三昧」と題し、ノンケをテーマとした様々な特集が掲載されていた。この特集によれば、ノンケの定義は以下の様なものである。

否定の接頭辞“non”プラス `ケ。による複合語。`ケ、じゃないことを表す。`ケ、とは、「あいつ、そのケがあるんじゃないのか?」とか「俺にはそのケはないっすよ!」という具合に使われることから分かるように、ゲイであること=ゲイネス (gayness) を意味する。つまり「ノンケ」はゲイじゃない人=ヘテロセクシャル、異性愛者のことだ。同義の古義的表現では「純タチ」「純メン」。英米俗語ではstraightという。(『バディ』1995年10月号, p.28)

また、同じ特集では通信欄¹担当のスタッフが、どのような文面が文通相手を探すのに効果的であるか、実際の文面を分析している。そこでは、「女にもてる」「ノンケ」などのキーワードを含んだ投稿に回送の希望が多く出ており、「ノンケらしさ」をアピールすることが男性との出会いの獲得につながるという分析がなされている(『バディ』1995年10月号, p.49)。ここには、ゲイ雑誌に出会いの募集の掲載を希望するという「ノンケらしくない」行為のなかで「ノンケらしさ」が欲望されるという矛盾が存在している。

ここから考えれば、「ノンケ」という言葉の機能は、単にヘテロ男性(・女性)を指し示すにとどまらず、「男らしさ」を演出するための装置として捉えること

¹ インターネット普及以前のゲイ男性の一部は、ゲイ雑誌を通して手紙等をやりとり(回送)し、出会いを獲得していた。ここで分析しているのは、雑誌に載せる自己紹介文についてである。

ができるだろう。この異性愛／同性愛の言語上での混線は、竹村和子の議論を援用することで整理することができる。

竹村は『愛について』(2002)において、近代社会が再生産し続けている異性愛規範の正体が『「正しいセクシュアリティ」の規範』(竹村, p.37)であると指摘した。この規範は、再生産のための性器結合と膣内射精を要請し、その他の性行為(アナルセックスや膣挿入しないセックスなど)を行うカップルや、セックスレスや子供のいない夫婦を「正しくない」ものとして排除する。また、終身的な単婚を規範化して合法的な異性愛を特権化し、一方で婚外子差別や、離婚・再婚に対する制限をもたらした。それに加え、この規範に違反していると捉えられたゲイ男性たちは乱交に耽溺するものとしてレッテルを貼られる(竹村, pp.35-43)。この規範は自動的に、実態を無視して、既婚者を配偶者との恋愛・セックス・生殖のイメージに結びつける。

竹村の議論に則れば、異性愛規範に適うかどうかには、異性愛者／同性愛者かは関係ない。仮にゲイやバイなどと自認する男性がいたとしても、(特に、周囲にそれを告げない場合において)一人の女性と結婚し、子どもを作ることを達成できたならば、この規範には適応しているのである。ノンケという語は上で見たように、本人のセクシュアリティと無関係に、「女にもてる」などという社会的に承認された「異性愛者(男性)らしさ」と関連付けられており、その点でセクシュアリティが「正しい」か否かの問いは、ノンケか否かの問いに近似している。ただし、「ノンケ」の男性は異性と婚姻し、性交渉をして再生産することを志向しているならば、現段階での婚姻状況は問われないため、そうした『「正しいセクシュアリティ」の規範』適応予備軍のような男性についても考えることができる点で、より視野を広げた概念と言える。

まとめれば、「ノンケ」とは、「(ゲイ男性から見た)ヘテロセクシュアルの男性」のことであるが、ヘテロセクシュアルであるということは、単に異性愛者であるということではなく、女性と(恋愛をして)結婚し、ペニスと膣の性器結合をし、膣内射精をして子どもを作るという行為を遂行すること、またはそれを志向することである。つまり、「ヘテロセクシュアル」であることにヘテロセクシュアルを「自認すること」は必要ない。「ノンケ」は具体的行為で示される異性愛規範への適応の問題なのである。つまり、誰でもノンケに「なれる」。ゲイ

を自認してもノンケにはなれるのであり、そういった男性の一部は既婚ゲイ／バイとして、「ノンケ」でありつつもゲイ／バイとしても振舞うようになる。

2-2 「ノンケじゃない (not straight)」概念の有効性

続いて、「not straight」という言葉の範囲やその有効性について検討する。この言葉は、Peterson (2000, p.201) から引用し、発展させたものである。Petersonは男性にセクシュアルまたはロマンティックな欲望を抱く既婚男性のオンラインコミュニティにおいて、ゲイやバイといった呼称を避けた人々の一部が自らを“not straight”と表現していたと述べる。それらの呼称を避ける理由の考察は深くなされていないが、Pearcey (2005) は「ゲイ／バイ」を名乗らずに距離を置くこうした態度をホモフォビアの内面化として解釈する (Pearcey, p. 33)。

しかし、Higgins (2004, pp.21-22) が指摘するように、既婚ゲイ／バイ男性の男女への惹かれの度合は様々である。「ノンケじゃない (not straight)」という言葉はHigginsが指摘した様々なゲイやバイを自認・自称することのない男性たちの経験や、しばしば独身ゲイにさえゲイネスを否定され得る既婚ゲイ／バイの経験を分析の俎上に載せる²。そして「ノンケじゃない」という言葉は彼らを『「正しいセクシュアリティ」の規範』に違反しているという点で彼らの経験をまとめ上げる。これは、異性愛／同性愛の枠組みで彼らを分析するには不可能な操作である。もちろん、ゲイ／バイ男性の経験の違いについては考える必要はあるが、彼らの振る舞いの「正しさ」を社会的規範に照らして判断する際により重要なのは、その時点において女性とのセックスや結婚などの「正しい」行為を遂行しているか否かなのである。また、既婚ゲイ／バイ男性の存在から分かる通り、「ノンケ」であることと「ノンケじゃない」ことは並立する。なぜなら、規範に適応すること、つまり婚姻状況にあったり、子供がいたりすることは、例えゲイ・セックスをしている（規範への違反）最中でも継続し得るからである。これは独身ゲイ／バイ男性が社会で異性愛者として振る舞いつつ、男性と交際した

² 例えば、「ロマンティックな欲望は女性にしか持たないが、セクシュアルな欲望は男性にしか持たない」と言った男性の経験を、「ノンケじゃない」という言葉は掘り上げることができる。また、本稿の範囲からは逸れるが、例えばアセクシュアル男性などの経験も「ノンケじゃない」という言葉で分析することができるかもしれない。

りセックスしたりする際にも同じことが言えるが、既婚者の「ノンケ」らしさは制度的・物質的（実子の存在）な支えがある分、より強固である。

砂川（1999）や石田（2007）が指摘する通り、日本におけるゲイ・スタディーズは輸入元のアメリカの影響を受け、アイデンティティに拘泥する余り、マイノリティの中のマイノリティについて焦点を当てることを消極的だった。既婚ゲイをはじめとして、異性愛と同性愛の連続したグラデーションのなかに生きていたり、その中を右往左往するような人々の経験を捉える必要があるとしたら、「ノンケ／じゃない」の分析枠組みは重要な意味を持つだろう。

2-3 ホモソーシャリティにおける「ノンケ／じゃない」男性

セジウィックは、『男同士の絆』（2001）において、イギリス文学をテキストにして「男同士の絆（ホモソーシャリティ）」の分析を行っている。セジウィックは、レヴィ＝ストロースの議論を援用しながら、男性中心的社会における結婚が一個人の男女間でなされる契約ではなく、ある集団の男とある集団の男の間でなされるものであると述べる。そして、そうした社会では女は単なる交換可能な財であり、結婚の大きな目的が二集団の男たちの絆を深めることであることを指摘する。また、人々が結婚して子孫を作っていくことは社会の維持のために不可欠であるから、その際に達成される男同士の絆も同様に社会の維持に必要となる。ここで、男同士の絆を使って男性たちを統制する方法がホモフォビアなのである。つまり、男性たちは男同士の絆が行き過ぎること、つまり同性にセクシュアルまたはロマンティックな欲望を覚え、それを実践することにより、糾弾されることを避ける必要がある。このとき、異性との結婚を選択した既婚者は結婚＝女性の交換という「男らしい行為」をしたとしてホモソーシャリティの中心に置かれ、「ホモ」や「オカマ」から最も縁遠い場所に自らの位置を確保することができる。しかし、セジウィックはこうも指摘している。

男性にとって男らしい男になることと、「男に興味がある」男になることとの間には、不可視の、注意深くぼかされた、つねにすでに引かれた境界線しかないわけだ。（セジウィック 2001, p.137）

つまり、「男らしい男」、例えば、女性に対してセクシュアルな、またロマンティックな欲望を覚え、仲間内で女性の好みを語り合い、結婚するような男性と、「男に興味がある男」の間の境界線は、きっぱりと分かれているわけではない。「男らしい」かつ「男に興味がある」男のなかにノンケじゃない既婚男性が存在している。

ホモソーシャリティの分析においては、異性愛規範が一つの重要な概念になっている。男性が女性を所有し、男同士の絆を結んでいくのは、異性愛が好ましいとされる社会規範が実際にあるからであり、それ自体は疑いようがない。しかし、異性愛規範を分析の視座として採用することは、異性愛と同性愛の二項対立を採用することであり、たとえ社会の多数がその二項対立に賛同していても（しているからこそ分析の視座として有効なのであるが）、その二項から抜け落ちる人々を捨象することにはならないだろうか。また、「ノンケ／じゃない」の条件を思い出せば、ホモソーシャリティの両極にいることと、異性愛／同性愛者であることを引き受けることには何の関連もないことに注意が必要である。ノンケじゃない既婚男性は普段は規範に適った「(ノンケの) 既婚男性」として、そして同性とのセクシュアル／ロマンティックな関係を持つ際には、ホモソーシャリティにおいてホモフォビックに糾弾される可能性を孕んだ「ノンケじゃない(既婚) 男性」として、その二項の間を動き、また戻ったりする。「ノンケ／じゃない」の概念をホモソーシャリティと接続することで、独身のノンケじゃない男性たちとは全く異なった立場の男性たちについて捉えることが可能である。

以上竹村やセジウィックの議論を参考にしつつ、「ノンケ／じゃない」概念とその有効性について議論してきた。この節で論じられたことは、ノンケじゃない男性を含むすべての男性たちが立つ権力関係の「地図」を描いたことに等しい。ノンケじゃない既婚男性たちは、時に独身の、時に既婚のノンケじゃない男性と、恋愛関係や友人関係、性関係を持って繋がる。そうした関係はどのように構築され、そのなかで「結婚していること」は彼らの関係にどう影響を与えるのだろうか。これまでの議論をもとに、当事者のインタビューデータを分析する。

3 ノンケじゃない既婚男性の経験の分析

3-1 調査と分析について

筆者は調査前の2020年12月からTwitter（現X）やマッチングアプリを利用してノンケじゃない既婚男性と知り合い、長い時間をかけて関係を構築してきた。その上で身元を明かして調査を依頼し、了承を得られた場合にインタビューを実施した。なお、ほぼ全てのインフォーマントが（元）結婚相手にセクシュアリティをカミングアウトしていなかったため、本研究への参加検討の事実がアウトティングになり得ることを鑑み、同意書は電子ファイルで共有し、口頭やテキスト上で了承をもらった。その上で2022年7月から9月までの間に、日本で生まれ育ち、女性と法律婚をした経験のあるシスジェンダー男性のうち、これまでに男性に対してセクシュアル、またはロマンティックな欲望を抱き、恋愛やゲイ・セックスなどの形でそれら実践した男性（つまり、ノンケじゃない男性）のなかから、10名に半構造化インタビューを実施した。本稿はその内2名のインタビューデータを分析したものである。

インタビューに際しては、誕生してから現在までの人間関係やアイデンティティなどについて尋ねた。その際、中心的なテーマとして設定したのは「恋愛」「結婚」「セックス（性欲）」であり、誰／何に対して欲望したのか、その際にどのような方法をとったのかを中心に質問した。そして、特に結婚後に関しては、「結婚していること」がノンケじゃない男性との関係においてどういった影響を及ぼしたのかに注目した。こうした一見プライベートな事柄に注目したのは、セクシュアル／ロマンティックな個人的結びつきが、本人が意図するにしろしないにしろ異性愛規範や「ノンケ／じゃないらしさ」と接続されるためである。そのため、一人の男性と異性愛規範との関係性を分析する具体的な尺度として、恋愛経験や性経験、結婚の経験を聞いていくことが重要になってくる。

3-2 Bさん（30代前半）の経験——「侵食される感じがあって」

Bさんは30代前半の既婚男性であり、ゲイを自認している。未就学の子どもが1人おり、同性パートナーもいる（インタビュー当時）。

Bさんは小学校から大学に至るまで、女性との恋愛について「ビビッと来ていなかった」が、「(好きな女性が) いなきゃいけないもんだ」という義務感

を感じ、好きな女性について男友達と話したり、女性とのデートなど「普通の高校生らしい恋愛的なこと」をしていた。一方で高校生の時には自慰の際に“shemale³”ものを観たり、自らの肛門をいじるなど「周り的高校生とは違う」ことを自覚しながらも、異性愛者という「普通の人」になるべく、「性的指向と恋愛指向を完全に切り分け」ていた。

Bさんの初めてのゲイ・セックスは大学時代にインターネット掲示板で知り合った男性とのアナルセックスだった。Bさんは当時のゲイ・セックス観を「自慰行為の延長」と言い切り、当時のセックス相手から交際を申し込まれたものの、Bさんはそれを断る。

当時のBさんは「ノンケらしく」なることを望んでいたため、あくまで恋愛関係には踏み込まず、ゲイ・セックスのみに「逸脱」を留めた。そして、「ノンケらしさ」から程遠い交際という相手の望みに応えなかったどころか、その男性に「なんで男が好きなの？」という異性愛規範を濃厚に引き継いだ質問を投げかけずらした。

Bさんはその後、大学卒業間際に初めて女性とセックスをし、就職後は女性とのセックスにのめり込むようになる。「そう（女性とのセックス）することによって、（…）普通の方に普通の方に、と思っていた」と述べる通り、同僚の男性達と女性とのセックスの仔細を開陳し合って周囲に「ノンケ」性をアピールし、Bさんは「ノンケらしく」なっていった。「ストレートとして生きていくぞっていう覚悟」で結婚した後、しばらく男性との性交渉は控えていたが、「自慰の延長」として発展場⁴に通うようになる。一旦は人間関係の齟齬の原因となった「ノンケらしさ」への欲望は、ここで肯定的に解釈される。

筆者（以下筆）：やっぱ（発展場で結婚指輪を）付けてると言われますか？

B：言われるかな

筆：どんな感じなんですか？

B：その一、興奮材料になる人がいるよね。結婚してるのに、みたいな。な

³ 「女性らしい」特徴（乳房や頭髮等）がありながら、ペニスを持っている人々が出演するアダルトビデオのジャンル。

⁴ 主にゲイ男性用に作られたクルージングスポット（不特定多数とセックスする場所）。

んだ、なんか、なんか知らんけど、どっちにもうけるんだよね

筆：どっちにも？

B：ウケしてる、ウケする時は、そう、なんか、奥さんに内緒で犯されて喜んでんのか、みたいなの。興奮材料にする人もいるし、なんか、タチしたらしたで、なんか、なんだろう、奥さん抱いた体で、抱かれるのが、みたいなのどっちも興奮材料になる人がいるみたいで⁵

ここで、Bさんが既婚者である事実は、『バディ』誌面で「ノンケらしさ」が欲望されていたのと同様のロジックで、性的欲望の道具として消費されている。ここでは、異性愛規範に疎外されるノンケじゃない男性たちによって、異性愛規範（女性とのセックス）を根拠にした性的欲望が表出するという奇妙な逆説が生じている。

しかしBさんは既婚者であることを性的欲望の道具として消費されていることに対し、次のようにも述べる。

B：なんか俺はそれが、かえってなんかあの、「うっせーな」って感じだったんで、だるかったから、あんまり言われなくなかった

(…)

筆：こっち（指輪に象徴される妻との関係性）の要素をこっち（性欲）に持ってくるなみたいな話？

B：そうそう、そこに触れられると要は、ちょっと侵食される感じがあって、なんか、ねえ、だから、まあ、欺瞞でしかないんだけど、そう、倫理的には明らかにヤベえから、いやでもホントそう、そこを、そこに触れられるような気がしたから、だって、そうじゃん、その、奥さんがいるのに、ケツ犯されて喜んでんのか、ってさ、普通に考えたらあの、実際そういうことをしてるわけで、それはまあ、倫理的には、アウトでしょってというのが、根底にはあるから、そこに触れられたくないがために、そういうこと言われた

⁵ 「タチ」は同性同士のセックスにおける能動役であり、(男性同士のアナルセックスの場合は)アナルにペニスを挿入する方。「ウケ」は受動役であり、アナルにペニスを挿入される方。

くないから、まあ（発展場で結婚指輪を）外すとか、っていうのがあった、ちょっと自己防衛でもあった

Bさんが既婚者である事実は性的消費の道具になると同時に、Bさんの中に葛藤を生み出した。自らが欲望した「ノンケらしさ」は結婚という制度的保障に基づいており、その結婚制度はBさんの「規範的でない」性行為（同性間・不特定多数）を強く咎める。Bさんはそのストレスに「侵食される」のを回避するために結婚指輪を外し、単なる「ノンケじゃない男性」として振舞うことを選択した。

その後Bさんは「完全に体の相性が合う人」とのセックスを求め、婚姻状況を隠してSNSでセックス相手を募集するようになる。時に既婚者であることを理由に関係を絶たれたり、性的に興奮されたりすることを経て、そこで出会ったのが、現在の同性パートナー（独身）だった。その男性と定期的に会っていくうちに、「恋愛指向と性的指向」が「分けきれなくなってしまう」、Bさんは既婚者であることを明かした上で交際を申し込む。パートナー男性は幼少期に両親が離婚しており、「(Bさんの子どもに)自分みたいな思いはさせたくない」という理由で告白は一度断られるものの、最終的には交際することとなり、関係は一年以上続いている。

そうした状況でBさんは、「気持ち悪さが耐え切れなくなってきた」ため、妻に現在の状況をカミングアウトし、離婚協議をしている（インタビュー当時）。「正直に生きていきたい」と述べるBさんは、「ここ2、3年のうちに」「性自認がゲイだっていうのを明確に自分で認め」、求められれば「隠さず（ゲイであることを）話すように生きていこうと思っている」と決心している。このように自らのゲイ／バイとしてのセクシュアリティが妻などに露呈した上での結婚生活について論じるものはMOMの研究に多い（Buxton, 1994; Buxton, 2000; Pearcey, 2005等）。また、論文ではなくインタビュー記事などにおいても、ノンケじゃないことが妻や周囲に露呈していることを前提としているものが多い⁶。しかし、筆者の2年以上に及ぶ観察からは、ノンケじゃないことを周囲に秘匿している既婚者や、ゲイ／バイのいずれも自認しない当事者がかなり多くいると思われる。そ

⁶ 例えば、『東京の生活史』におけるインタビュー（岸編 2021, pp.811-818）など。

うした彼らの経験はどう解釈されるだろうか。

3-3 Gさん（40代後半）の経験——「ノンケの男の人に惹かれるからです」

Gさんは40代後半の既婚男性であり、自らをゲイとバイの間で「針が振れるような」セクシュアリティだと感じている。未就学児から高校生までの子どもが4人いる（インタビュー当時）。

小学生の時は恋愛感情をあまり感じたことがなく、中学生になると学校に好きな女性ができる。しかし並行して男性器に対する興味があった。大学に入ると、女性に告白したり、交際したり、セックスする一方で、「自分に持ってない」ものを持つ男性に惹かれ、時に性的欲望を覚えることもあったが、「同性に対するそういう感情っていうのは、なんかまずいこと」だと思い、そうした「ノンケじゃない」欲望を公言したり、他のノンケじゃない男性と繋がることはなかった。

その後大学院進学を経て就職するが、女性と家庭を築く「憧れ」があったため、婚活サイトを経て30代前半で一度目の結婚をしたが、一年半で離婚する。その一方で、男性への性的欲望はあったため、20代後半になるとインターネット掲示板経由で男性との性的行為を募集することになる。結婚後も掲示板で募集を続けたGさんは、そこで既婚者であることを明かすか否かについて次のように語る。

筆：そのときは、結婚してることは言ってないんですか

G：言ってなかった時もあるし、言ってた時もあった

筆：それは何の違いがあるんですか？

G：自分の、その時の、募集をする時の気分だと思います

筆：気分？既婚って載せるとなんなんだ

G：なんかリアクションがいいのかな、とかそんな打算的なことを考えてた

筆：リアクションがいいんだなあ、いいかなって、思うっていうこと自体が、なんかそれを見たんですか？具体的に。既婚者が称揚されてることを

G：僕自身が、ノンケの男の人に惹かれるから、だと思います

筆：それはつまり、既婚者がノンケってことですか？

G：っていう風に、なんか、興味を持ってくれる人がいるかな、と思って。

そういう打算的なことが働いてる (…)

筆：既婚者って書いたら、向こうがノンケだと思ってくれて、それがまあ、釣り針というか、魅力になる、からって思った？

G：そうです

既婚者と書くと「リアクションがいい」と考える理由に、Gさんは自らが「ノンケの男の人に惹かれる」からだと答える。また別の場面でGさんは「ノンケっぽい人」の方が「とっかえひっかえいろんな人とやって」「ないって思われる」のではないかと推測している。ここでは『パティ』誌面で見られたように、既婚者であることが「ノンケらしさ」として欲望されるほかに、結婚していることが『正しいセクシュアリティ』の規範のもとで異性愛やモノガミー規範と自動的に接続されており、それを既婚男性側も理解し、運用している様子がわかる。Gさんの目論見は実際に当たり、既婚者を好むノンケじゃない男性から連絡が来たこともあった。

Gさんはその後、再婚して子供をもうけ、40代になるとインターネット掲示板からSNSにノンケじゃない男性とのつながりの場をシフトした。SNS上ではごく最初を除いて性的関係の募集はせず、プロフィールに既婚者であることを表明しつつ「今まで自分の中にため込んできたいろんな思いを正直に」書くことを目的に、セクシュアルな話題に限らない発信をするようになった。そうした発信の中でアップロードする自らの写真について、Gさんは次のように述べる。

G：だって自撮りするときにこうやって、(結婚)指輪写るように、撮ったりするもん

筆：あ、意識してるんですか

G：するする

筆：なんで

G：え、なんか、ブランドブランド

筆：え、なんか調整してます？写るように

G：あの、トリミングをして、写っちゃいけないところを切るじゃない、その時に指輪は入るようにしてる

筆：なんか指輪を映さないことと、映すこと、何が違うんだろうなあ

G：まあそれは自分がブランドだと思ってるってことと、うん、あとでもそれで、あの、そういうなんか打算的なやましい気持ちもあるけど、その一方で、なんか同じような境遇で同じ悩みを抱えている人が、そういう指輪を付けてる僕をみて、で、それをきっかけで僕の投稿を遡ってみてもらって、ああ、同じようなことを考えてる人がいるなあっていう風にこう、気づいてくれたらいいなあ、っていう、そういう同じ同士を、とつながりたいって思っている。別にかっこつけて言ってるわけじゃなくて、うん

Gさんは「ブランド」と称される既婚男性の「ノンケらしさ」を、文字情報だけでなく結婚指輪をカメラに写すことで演出する。その一方で、Gさんは Peterson (2000) が見たような、ノンケじゃない既婚男性の自助オンライングループの役割をSNSに見ており、「自分のモヤモヤした気持ち」を吐露し、共感してもらうことで「消化」しようとする。そのなかでも、「同じような境遇」で「同じ悩み」を持つようなノンケじゃない既婚男性と経験を共有するために自らの指輪を写して、自らが既婚者であることをアピールしている。なお、このSNS上でもGさんは既婚者であることや、それに連想される「父」や「年上」であることに関連する性的な興奮や「落ち着いた感じ」などといった肯定的評価を受けている。

Gさんは自らの立場のために批判的な言葉を浴びたことについて、「時々はあるけど、そんなにない」と述べる。これはおそらく、既婚者であることを表明しているために、批判的な人々と接触する機会があまりないことが大きな要因だろう。

4 考察

ここまで、2名のノンケじゃない既婚男性の語りを分析してきた。本節では、本稿の目的を振り返りつつ分析を整理し、本稿の意義について述べる。本稿の目的は、異性愛／同性愛の二項対立では捉えづらい、ノンケじゃない既婚男性の存在を、「ノンケ／じゃない」という概念にまとめ上げて説明することと、その概念を用いて彼らが他のノンケじゃない男性との関係において、結婚していること

をどのように取り扱っているのかについて説明することであった。

分析から明らかになったことは次の二点にまとめられるだろう。

まずは、ノンケじゃない既婚男性のホモソーシャルリティにおける複雑性である。彼らのセクシュアリティを知らない人々、例えば友人、同僚、そして妻や家族は、自動的に彼らを異性愛者だと認定する（少なくとも、同性愛者ではない）だろう。その認定にセクシュアリティの自認が一切関係しないのは、竹村の述べた「規範的なセクシュアリティ」の条件から明らかであり、その点で彼らは「ノンケ」である。しかし、男性への欲望という点で、彼らの行動は確実に「規範的」ではない。彼らはゲイ・セックスを行ったり、男性への性的欲望を開陳したり、ゲイバーに行ったり、男性と恋愛したり、ゲイであることを引き受けたりすることがある点で「ノンケじゃない」。つまり、既婚ゲイはどちらも本当の自分として分裂しているのであり、どちらも「偽装」ではありえない。アイデンティティ概念をはじめて提示したエリクソン（1973）は、自らが何者であるかについての自分での認識（個人的同一性）と、他者や社会がどう考えているかについての自分の認識（社会的同一性）が統合されるとき、アイデンティティが安定するという「統合仮説」（上野 2005, p.7）を唱えたが、「ノンケ／じゃない」という相反するアイデンティティは、統合されない場合も多くある。Bさんは「切り分け」の戦略を取り、「ノンケじゃない」ことへの深入りを避けつつ結婚した。Bさんは最終的には離婚しゲイであることを引き受けるが、それまで「ノンケじゃない」こと、つまり同性への欲望を捨てきれずに、ノンケじゃない既婚男性としてゲイ・セックスを繰り返した。Gさんも自らのセクシュアリティをゲイとバイ（女性への欲望）の間に「針が振れるよう」と述べており、どちらの欲望もGさんの嘘偽りない欲望だろう。こうした彼らの状況や、彼ら自身のことを「同性愛／異性愛」や「ゲイ／バイ／ヘテロセクシュアル」などの既存の区分法で分析することは困難である。

そして二つ目の点は、その「ノンケ」らしさ、つまり結婚していることが、「ノンケじゃない」男性たちとの関係のなかで様々な応答を生み出し、それに既婚男性が様々な方法で対処していることである。具体的には拒絶や肯定（性的欲望）の反応があった。Bさんは「奥さん抱いた体」として性的に欲望される経験をし、Gさんも同様の欲望に加え、父親役割や「落ち着いている」ことをその身

体に読み込まれた。逆に、Bさんはその「ノンケらしさ」を理由に関係を絶たれたり、交際を断られたりすることもあった。その反応への応答としては、ここでは隠蔽や内面化などの方法が取られた。また、好意的な反応については、既婚者本人が意図していない場合に、本人を困惑させることがあった。Bさんは結婚していることに対する意図しない性的欲望に「侵食される感じ」を受け、発展場において結婚指輪を外したり、その後プロフィールに既婚者であることを書かないことで、既婚者ではない無標の「ノンケじゃない男性」となることを試みた。一方でGさんは自らが「ノンケの男の人に惹かれる」と述べ、自らの「ノンケらしさ」を主張する手段として既婚者であることを表明することを選択した。ここでは、セジウィックが指摘したように結婚することによって「男らしい男」になり、ホモソーシャルリティのなかで評価されるという規範をGさんが内面化し、他のノンケじゃない男性へアピールする際の資源として活用している様子がわかる。加えて、Gさんにとって既婚者であることを示すことは、他のノンケじゃない既婚男性と経験を共有し、「モヤモヤした気持ち」を「消化」するためのきっかけとして使われている。

5 おわりに

ノンケじゃない既婚男性を扱ったこれまでの研究は、妻にカミングアウトした上で夫婦間の関係や、ノンケじゃない既婚男性当人のアイデンティティに重点を置いた分析を展開してきた。本稿は其中で注目されてこなかった、家庭の外でのノンケじゃない男性同士の関係の中で、結婚していることが既婚男性たち自身にどのように扱われるかに注目した。その前提として、セジウィックのホモソーシャルリティの分析と竹村和子の『正しいセクシュアリティ』の規範の分析を接続し、正しいセクシュアリティの規範へのコミット度合によってホモソーシャルリティにおける「男らしさ」が変化することを示した。インタビューの分析から、そうしたホモソーシャルリティにおいて、ノンケじゃない既婚男性が他の独身のセクシュアルマイノリティから身体を区別されていることがわかった。そして、既婚男性本人も、既婚者であることを隠したり、逆に規範を内面化して「既婚者ブランド」をアピールするなどして、そうした区別に対応する様子を明らかにした。

彼らは果たして「ゲイ」なのだろうか、「バイ」なのだろうか、それとも「ノンケ」なのだろうか。こうしたカテゴリーの区分の基準は恣意的であり、何を「異性愛者」で、何を「同性愛者」とみなすかは人によって異なる。こうした男性たちの経験を解釈する際の解決策の一つとして本稿が提案するのが、「ノンケ／じゃない」という言葉によって男性たちをみる視角であった。この言葉は、一旦本人の自認を不問にし、行為の問題で男性たちをみることで二項対立的な枠組みでは語ることの難しかった男性たちに光を当てる。

伊野（1997）は、ゲイ・スタディーズが「セクシュアリティ・アプローチに偏りがち」であることを批判し、ジェンダーの視角を取り入れることで、「ゲイ・スタディーズの脱ゲットー化」（伊野, p.44）を目指した。本稿は、女性蔑視を経由して成立するホモソーシャリティの分析を下敷きにはしているものの、あえて男性同士の関係性に注目した。そのため、結婚を成立させるために必要である女性たちの視点や、ケア労働の分担などの問題でノンケじゃない既婚男性とは非対称な経験をしているであろう、ノンケじゃない既婚女性（いわゆる「既婚レズビアン」「主婦レズ」）の視点については更なる分析が必要だろう。

また、独身のノンケじゃない男性たちによる既婚ゲイ男性への視点に関しても、既婚者からの語りによる記述に終始してしまったため、今後の課題として取り組みたい。その際には、既婚者に敵対的な目線を向ける人だけではなく、同性婚の法制化が裁判で戦われている今の時代に、「あえて」異性婚を望むノンケじゃない人々についても考える必要がある。

References

- Auberback, S. & Moser, C. (1987). Groups for the Wives of Gay and Bisexual Men, *Social Work*, 32(4), 321-325.
- Buxton, A. P. (1994). *The other side of the closet: the coming-out crisis for straight spouses and families*. USA: Wiley
- Buxton, A. P. (2000). Writing Our Own Script. *Journal of Bisexuality*, 1(2-3), 155-189.
- Erikson, E. H. (1971). 『自我同一性——アイデンティティとライフサイクル』(小比木啓吾, Trans.). 東京: 誠信書房. (Original work published 1959).
- Higgins, D. J. (2002). Gay Men from Heterosexual Marriages, *Journal of Homosexuality*, 42(4), 15-34.
- Higgins, D. J. (2004). Differences Between Previously Married and Never Married 'Gay' Men, *Journal of Homosexuality*, 48(1), 19-41.
- Kissil, K. & Itzhaky, H. (2015). Experiences of the Marital Relationship among Orthodox Jewish Gay Men in Mixed-Orientation Marriages, *Journal of GLBT Family Studies*, 11(2), 151-172.
- Lunsing, W. (1995). Japanese Gay Magazines and Marriage Advertisements, *Journal of Gay & Lesbian Social Services*, 3(3), 71-88.
- Sedgwick, E. K. (2001). 『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(上原早苗, 亀澤美由紀, Trans.). 愛知: 名古屋大学出版会. (Original work published 1985).
- Ortiz, E. T., & Scott, P. R. (1994). Gay Husbands and Fathers: Reasons for Marriage Among Homosexual Men, *Journal of Gay & Lesbian Social Services*, 1(1), 59-72.
- Peterson, L. W. (2000). The Married Man On-Line. *Journal of Bisexuality*, 1(2-3), 191-209.
- Pearcey, M. M. S. (2005). Gay and Bisexual Married Men's Attitudes and Experiences: Homophobia, Reasons for Marriages, and Self-Identity. *Journal of GLBT Family Studies*, 1(4), 21-42.
- Swan, T. B., & Benack, S. (2012). Renegotiating Identity in Unscripted Territory: The Predicament of Queer Men in Heterosexual Marriages. *Journal of GLBT Family Studies*, 8(1), 46-66.
- Tang, L., Meadows, C., & Li, H. (2020). How gay men's wives in China practice co-cultural communication: Culture, identity, and sensemaking, *Journal of International and Intercultural Communication*, 13(1), 13-31.
- Xu, W., Huang, Y., Tang, W., & Kaufman, M. R. (2022) Heterosexual Marital Intention: The Influences of Confucianism and Stigma Among Chinese Sexual Minority Women and Men. *Archive of Sexual Behavior*, 51, 3529-3540.
- 石田仁 (2007). 『戦後日本における「男が好きな男」の言説史: 雑誌記事にみる表象とそれを支える解釈枠組みの変容』[未公開博士論文]. 中央大学.
- 石田仁 (2018). 「ゲイ雑誌、その成り立ちと国立国会図書館の所蔵状況」『現代の図書館』, 56(4), 196-204.
- 伊野真一 (1997). 「セクシュアリティとジェンダーの軋轢: ジェンダー・コンシャスなゲイ・スタディーズに向けて」『ソシオロゴス』 21, 44-58.
- 上野千鶴子 (2005). 「脱アイデンティティの理論」『脱アイデンティティ』 1-41. 東京: 勁草書

房.

岸政彦編 聞き手：太齋慧 (2021).「これが自分の幸せなんだって思う、イメージができたし。自分のセクシュアリティを受け容れつつも、幸せにやっつけていけるのかもしれない」『東京の生活史』811-818. 東京：筑摩書房.

砂川秀樹 (1999).「日本のゲイ／レズビアンスタディーズ」『Queer Japan』(1), 135-153. 東京：勁草書房.

竹村和子 (2002).『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』東京：岩波書店.

『パディ』, 1995年10月号, 東京：テラ出版

前川直哉 (2017).『〈男性同性愛者〉の社会史——アイデンティティの需要／クローゼットへの解放』東京：作品社.

Abstract

Performance of “Being Married” by “Not *Non-ke*” Married Men

Mito SHIRAI

This paper aims to explore how gay/bisexual married men (do not) use their marital status to manipulate other gay/bisexual men’s impression of married ones when they have romantic or sexual relationships with other gay/bisexual men who are single (and married), using the colloquial term “*non-ke*” to signify heterosexuals. Several studies, called MOM (Mixed Orientation Marriage) research, focuses on gay/bisexual men who marry women and their relationships with wives and children. Much of this research has illustrated the reasons for marriage, post-coming-out marital relationships, and identity issues. Therefore, there is a remaining gap in understanding of closeted married gay/bisexual men. Specifically, there is limited research on how they handle “being married” when having sexual or romantic relationships with other men. Additionally, previous studies tend to interpret their experiences within the binary framework of “heterosexuality/homosexuality,” overlooking the experiences of such men that cannot be captured within these frameworks. To analyze their behaviors, this paper first utilizes “*non-ke* (straight),” which is the slang term referring to heterosexuals by sexual minorities in Japan. Drawing on Sedgwick (2001) and Takemura’s (2002) theories, this study revisits the concept of homosociality from the perspective on “*non-ke/not non-ke*” based on actions engaging in “heterosexual” marriages and sex. This perspective allows for an interpretation of men who fall out from the binary “heterosexual/homosexual” framework. Following this standpoint, the narratives of two married men who identify as not *non-ke* are then demonstrated such as how they handle their “being married” when they approach other not *non-ke* men.

Initial research reveals two contradicting methods of the management of “being married”. Within the context of homosociality, the degree of

commitment to heterosexual norms, explicitly manifests as “being married”, and this status is interpreted as “straightness”, even if the married men have romantic/sexual desire for other men. This commitment is found to be a cause of rejection or sexual interest from other men who identify as not *non-ke*. In response to these reactions, these married men may choose to conceal their marital status and become (“ordinary”) *non-ke* or, conversely, present their married status as a means to appeal to other not *non-ke* men and attempt to build a bond with the men in the same situation.

Keywords:

married gay men, MOM (mixed orientation marriage), not/ “*non-ke*” (straight), homosociality, heteronormativity

研究論文

カミングアウトをめぐる可変的な交渉過程／ ある障害をもつ男性同性愛者の経験を事例に

欧陽珊瑚

要旨

本稿は、障害のある同性愛者が家族に自分のセクシュアリティを伝えていく過程において、いかに障害者というマイノリティ性が働くのかを明らかにする。先行研究において、障害とセクシュアル・マイノリティというマイノリティの重なりから、当事者は「複合的不利益」とカミングアウトにおける多重な困難を経験すると議論されてきたが、その過程についての事例検討は不十分である。本稿は、華人同志の研究におけるカミングアウトの分析のなかで検討されてきた「カミングアウト・モデル」「カミングホーム・モデル」「カミングウィズ・モデル」という、規範に対する抵抗や調整を行う視角から、同性愛者かつ肢体障害者でもある台湾在住の男性の経験を考察する。

その結果、男性同性愛者かつ障害者という「複合的不利益」な立場は、カミングアウトの際の家族関係に対して必ずしも消極的に作用するわけではなく、むしろ障害者というマイノリティ性は、同性愛を拒絶する家族規範と交渉する資源になり、家族関係をポジティブに変容させることにつながっていたことが明らかになった。同性愛者による家族との関係の調整に関して、柔軟に三つのモデルの切り替えや統合を行うカミングアウトの過程には、複数のマイノリティ性を利用したより複雑な調整の在り方が見られる。多様な「カミングアウト」のあり方を、特定のモデルへと回収せず、個々の当事者が抱える複雑さとそれに伴う家族関係の変化に照らして検討していくことが重要である。

キーワード：

障害者、華人同志、カミングアウト、家族関係、LGBT

1 はじめに

「カミングアウト (coming out)」という言葉は、同性愛者を含む性的少数者にとって、自分のセクシュアリティを他者に伝える行為を指している (Altman, 2010)。それは、英語圏のスラングで「クローゼットから出てくる (coming out of the closet)」と表現されてきたように (河口, 2003)、不可視化された非異性愛者の存在を可視化する行為でもある (Ryoji & 砂川, 2007)。従来の研究では、カミングアウトを定位家族 (自分が生まれ育った家族) に対して行う場合、異性愛規範による抑圧が同性愛者とその家族との間に葛藤を生み出すことが指摘されてきた (簡, 2012; 三部, 2014; Motoyama, 2015)。多くの議論は近代家族制度の抑圧面に焦点を当てており、セクシュアリティを中心に検討してきた。しかし、性別、人種、宗教、障害など複数のカテゴリが交差し合うことで生み出される「生」の複雑さの議論は不十分である。

障害者であり、同性愛と自認する人々のカミングアウト問題に関する研究はいまだ少ないが、わずかにある調査では、障害のある同性愛者ならではの困難が指摘されてきた。たとえば、Tom Shakespeare は、障害のある同性愛者は施設や家族からの介護に依存しており、カムアウトするとケアを受けられなくなる危険性があると指摘する (Shakespeare, 1999, p.46)。また障害者であり、かつ性的少数者であるという、同時に複数の社会的マイノリティに属する人々は、複数の差別 (multiple discriminations) を受けやすいともされる (Shakespeare et al., 1996)。そのような事態は、「複合的不利益」 (compounded disadvantage) と呼ばれている (Molloy et al., 2003)。ただし、障害のある同性愛者を対象にした従来研究は欧米が中心であり (cf. Leonard & Mann, 2018)、欧米以外の地域の研究は十分に展開していない。

そこで本稿では、華人同志における「カミングアウト」の実践モデルの可能性に依拠し、台湾の肢体障害をもつ男性同性愛者のライフ・ヒストリーを通じて、障害者であることがどのように「カミングアウト」の困難さやその実現過程に影響しているのかを考察することを目的とする。

2 先行研究と問題の所在

本節ではまず「華人同志」という用語について説明しておきたい。1990年代

前後から、中国語圏において、「同志 (tongzhi)」という言葉は同性愛者という意味ももつようになり、現在では広義の意味での性的マイノリティを意味する言葉として使用されている (cf. 三須, 2018)。人類学者である周華山は欧米 (Anglo-American) のゲイ・レズビアン解放運動の経緯や戦略をそのまま再生産することではなく、地域固有的な同志 (indigenous tongzhi) のポリティクスを構築する必要があると主張し、中国、香港、台湾の同性愛者の経験から同志の多様の、特有的な戦略を論じた (Chou, 2000)。周の影響を受けた学者たちは、伝統的な中国文化に影響されている地域社会であり、中国、香港、台湾や東南アジアの中国語圏で居住する “Chinese tongzhi” (本稿では「華人同志」と訳す) の経験を中心に考察を行っている (cf. Liu & Ding, 2005; Kong, 2011; Tan, 2011; 李, 2018; Huang & Brouwer, 2018)。

次に、これら華人同志を対象とする研究で提示されたカミングアウトに関する3種類の実践モデル、「カミングアウト・モデル (coming-out model)」、「カミングホーム・モデル (coming-home model)」、「カミングウィズ・モデル (coming-with model)」を整理したうえで、本稿の視座を提示する。

2-1 「カミングアウト・モデル」の困難さ

華人同志の研究では、性的アイデンティティの可視化というカミングアウトをめぐるポリティクスは、アメリカのレズビアン・ゲイ解放運動の影響を受けた社会運動の場面で強調されてきた。こうしたカミングアウトを通じた異性愛規範に対する批判や抵抗は、現在において性的な自由や平等を求めて闘う華人同志の運動主体の新たな原動力になっているが、社会運動の文脈でのカミングアウトの実践は日常生活でのカミングアウトの実践とは必ずしも一致しないと指摘されてきた (Huang & Brouwer, 2018, pp.100-101)。実際、華人同志の日常生活では、他者にセクシュアリティの表明、または「同志 (同性愛者)」としてカムアウトすることは、欧米型の「カミングアウト・モデル」と呼ばれている (Chou, 2000)。華人同志の実践では欧米型の「カミングアウト・モデル」をそのまま受容しているのではなく、「素地」(素質) や「道作り」(鋪路) のような華人圏の文化的概念を含む要因が介在している (Huang & Brouwer, 2018, p.102)。

ここで言及されている「素地」と「道作り」という比喩的表現は、「良い同性

愛者」の性質とみなされる高い経済力と社会的地位を得るための道筋を意味する。伝統的な中国文化に影響されている地域では、「孝」や「和」という規範が重視されている。「孝」とは主に一族に男子の後継者を産むことを意味し、「和」とは対人関係の調和と互いの「面子」を維持することを指す。一族の後継者を産まなくても「孝」を果たしていると承認されるためには、経済的に貢献する必要があり、既存の社会規範から逸脱しても「和」が達成されるためには、「あの人の人なら仕方がない」という特別な社会的地位を得る必要がある。そのため、当事者の間ではまず経済的成功を収めて「素地」をつくり、次に社会において優秀な人物になることでカミングアウトの受容を容易にするという「道作り」が企図される場合が多いのである。

「素地」と「道作り」に基づくカミングアウトには、既存の異性愛規範に挑戦するものではなく、特別な貢献や地位に応じた同性愛者への認識や受容を期待するものであり、「異性愛規範との共謀によって、ある種の同性愛規範が作りだされている」と批判されている (Huang & Brouwer, 2018, p.103)。つまり、欧米の社会運動の文脈では異性愛規範への抵抗を目指すプロセスの出発点となる「カミングアウト・モデル」が、「『良い』／『悪い』セクシュアル・シティズン (sexual citizen) を判断するためのモデル」(Kong, 2011, p.106) としてヘゲモニーへの依存とその再生産をもたらししていると示唆されているのである。実際に、華人社会では、こうした道作りをせずに、非異性愛的な欲望を表明することは、「孝」と「和」に対立すること、すなわち「離家 (out of home)」と位置づけられる。たとえば、親に同性愛であることをカムアウトした後に、家から追い出された事例はよく見られる (UNDP, 2016)。そのため、数多くの華人同志が「素地」がある／ないや、「道作り」ができる／できない状況に従って、カムアウトする／しないという選択に閉じ込められているとされる。

2-2 「カミングホーム・モデル」の限界

こうした状況を踏まえて、周は欧米の経験を普遍化した「カミングアウト・モデル」をそのままアジア地域に当てはめることはできないと指摘した (Chou, 2000)。彼は、中国、日本、タイ、インドなどアジア諸国には、欧米のようにセクシュリティを個人の権利として認める「空間」がなく、「本当の自分」を構築

するために自分のセクシュアリティを言語化するという文化的伝統がない状況であると述べる。そして、アジア諸国の当事者には、家族や文化的アイデンティティを否定するのではなく、家族規範や文化的文脈にセクシュアリティの問題を統合することで自分の声を取り戻すことができるようなカテゴリーや戦略が必要とされると指摘する (Chou, 2000, pp.252-259)。華人同志の経験を踏まえ、欧米型の「カミングアウト・モデル」に代わって周がその有効性を主張するのが、「カミングホーム (coming home)」という「地域固有モデル (indigenous model)」である (Chou, 2000, p.36)。

このモデルの基盤となる発想は、「帰家 (come home)」という華人文化における重要な伝統である。「帰家」とは、重要な祝日や記念日の際には実家に帰らなければいけない、という華人家庭の子どもに課せられた義務を意味する。一般的には、春節に子供が実家に帰ってきて、家族全員と一緒に食事するといったことである。だが同志にとって「帰家」という言葉は、家族と親密な関係を保ち、非異性愛的な欲望を抑制することで「孝」と「和」を維持するという期待や義務を伝えるものでもある (Huang & Brouwer, 2018, pp.97-98)。台湾の研究では、周が提示したカミングホームの実践は、次の3つの原則から成り立っているとされると指摘されている。

- (1) 非対抗的な関係：家族との良好な関係を維持した上で、ゆっくりパートナーを紹介すること、
- (2) 非宣言的な日常行動：パートナーを家族のような存在にして、家族の信頼と安心を勝ち取ること、
- (3) セックス (セクシュアリティ) を中心としない健全な人格：健康で幸せな生活を送ることが、親が子供は結婚しなくても良い人生を送れると実感できること、である。(Liu & Ding, 2005)

この原則に従った方法として、シンガポールの華人社会を調査対象とした研究は、家族にカムアウトすることで親子関係に緊張をもたらすことを回避するために、同性パートナーを友人として家族に紹介し、家族が友情以上の親密な関係を自然に受け入れてくれるのを待つという同志の事例を取り上げた (Tan, 2011)。

このモデルでは、同志と家族の間で、たとえ同性愛に薄々気づいていてもそれ

に言明せず、あくまで既存の家族規範のなかでふるまい続けるという「暗黙の了解 (silent tolerance)」を育む操作が必要となる (Liu & Ding, 2005)。しかし、家族が頑固な態度で「暗黙の」コミュニケーションすら拒否する場合、カミングホームの実践は行き詰ることになる。

2-3 「カミングウィズ・モデル」の不足

Huang & Brouwer は「カミングアウト・モデル」を実践できず、「カミングホーム・モデル」によるコミュニケーションにも失敗した同志のインタビューから、新たな実践モデルが発見した。これは、ゲイ男性とレズビアン女性が形式的に結婚する「形婚」(偽装結婚)で、互いの同性パートナーとの関係を維持し、親を安心させ、家族との「和」の関係も維持することが可能になる実践である (Huang & Brouwer, 2018)。たとえば、Zien というゲイ男性のケースでは、両親は長い間、彼のセクシュアリティに気づきつつも「ビジネスパートナー」として紹介された彼のボーイフレンドに難色を示し続けてきた。しかし、Zien がレズビアン女性と婚約すると、両親は態度を軟化させ、ときには Zien のボーイフレンドに対して息子同然に接するという変化が起きた (Huang & Brouwer, 2018, pp.107-115)。同性愛者が、偽装的な異性結婚をすると、同性間の関係 (same-sex relationship) が家族から暗黙的にも容認されることは、華人同志にとって既存の家庭制度内で非異性愛的な欲望を表明・維持する有効な戦略となる。彼らはこの戦略を「カミングアウト・モデル」と「カミングホーム・モデル」にあてはまらない、すべての実践を第三の選択としての、「カミングウィズ・モデル (coming-with model)」と名づけた。彼らが言う「カミングウィズ・モデル」とは非異性愛的な欲望を表明し、かつ何らかの方法で異性愛規範や家族規範などの既存の規範との両立を図る実践であるといえる。しかし彼らは、「形婚」以外の「カミングウィズ・モデル」の実践の可能性もありえると主張したが、具体的な事例を論じておらず、このモデルの可能性に関しては検討する余地がある。

2-4 問題の所在

以上、華人同志のカミングアウトに関して先行研究が提示したモデルを整理してきた。個人と家族が緊密に繋がる東アジアの文化的文脈では、「カミングアウト

ト・モデル」は、「家庭崩壊」の危機（元山, 2014）を招きやすく、カミングアウト後の華人同志は、相手の理解や承認に左右される（李, 2018）という受動的な立場に置かれる。華人社会においてカミングアウトは「離家（out of home）」、すなわち「家族関係からの離脱／排斥」をも意味する。それに対して、「カミングホーム・モデル」は「帰家」、外で働く息子が家に戻るように、外の世界のもの（ここでは非異性愛的な欲望や同性間の関係性）とともに家族の元に帰り、家族関係のなかにそれらを溶け込ませることを目指す実践である。このモデルでは、華人文化の家族関係を維持することができるが、その成否は同志と家族の間の不安定な暗黙の交渉に左右され、家族内での非異性愛的な欲望は抑圧される。「カミングウィズ・モデル」は「カミングアウト・モデル」と「カミングホーム・モデル」の実現が困難である場合の第三の選択として示唆されたもので、「カミングアウト」と「家族規範」の“併存”（with）を何らかの手段で目指すものだと想定されるが、その多様な手段および実際の内実はいまだ不明瞭である。

本研究は、以上のような先行研究が提示したモデルを「障害をもつ華人同志」の実践に照らしてみた場合、それはどのような形態や可能性として立ち現れるか、それは時間的経過や個人の心情的変化においていかに変化しうるかを析出し、複数のマイノリティ性を抱える当事者の実践を明らかにする。障害者のセクシュアリティ問題はいまだ十分に重視されておらず、障害のある華人同志の存在自体が社会的に不可視化されている。この状況では、どのような実践をしている当事者が典型的であり、それはどれほど有効かといった先行研究のモデルを仮説として検証する量的調査は困難である。

加えて、特定の文化的な文脈において何が合理的、妥当であるかを固定的に捉える視座に立つと、たとえば、障害とセクシュアル・マイノリティという二重のマイノリティ性があるなど、異なる属性をもち、異なる岐路を歩んでいる個々の実践がもつ可能性が見落とされてしまう。また個々の実践では、特定のモデルが排他的に選択されるわけではなく、その失敗や成功の上に別のモデルが選択されたり、いくつかのモデルが複合的に試されたりすることもあるだろう。しかし、そうした特定のモデルが選択されたり、別のモデルに移行したり、複合的に発動する個々の契機として何があり、どのような葛藤や心情的変化が生じているのか、その際に他のマイノリティ性や個人としての背景がどのように影響するの

は、これまで十分に検討されていない。

そのため本稿ではライフ・ヒストリー法を用いて、障害のある華人同志一人の人生においてこれらのモデルがどのように選択され・変容していくのか、その契機に何があり、それらにカミングアウトの主体が障害者であるといった個人の属性や経験がいかに作用しているかを考察する。

3 調査概要

本研究では、台湾の男性同性愛者と自認する肢体障害者である Vincent¹ のライフ・ヒストリーを分析する。インタビューは2019年2月に台湾で Vincent に個人の生活史、団体活動の経緯、社会運動の経験について、合計7時間を中国語で実施した。なお、本調査は立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Vincent は、1960年代にラオスの裕福な華人家庭に、6人兄弟の長男として生まれた。子供のときに急性灰白髄炎（ポリオ）に罹患し、下肢の機能を喪失した。1975年に一家は台湾に移民として移住し、Vincent は、中学校時代を障害者施設で送った。高校を卒業した後は新聞社とラジオ放送の仕事に従事し、自立した生活を送っている。25歳から29歳の間、女性との交際を経験し、その後、同性に性的欲望をもつことを自認した²。1999年に Vincent はパートナーの Great と出会い、現在まで一緒に生活している。Vincent は台湾の同志運動（性的マイノリティ運動）の初期からかかわっており、2008年に障害のある性的少数者の団体である「残酷児（Disabled + Queer）」³を創設した。その後、障害者に対して性的支援を提供するボランティア団体である「手天使（Hand Angel）」のメンバーとしても活動している。本稿では、2000年前後から2010年ごろに行われた家族へのカミングアウトの過程について分析する。

2019年に同性婚の合法化された台湾では、同志運動が30年以上にわたって続いていた（鈴木, 2022）。2000年代の台湾には性的少数者への法制度への包摂が

¹ 「Vincent」はコミュニティで、活動の現場で使っている名前であり、ご本人の掲載許可を得ている。

² Vincentの肢体障害者としてセクシュアリティの探求と構築過程、または社会的な差別経験と活動について、欧陽（2021）に詳しい。本稿では家族関係の構築に焦点を当る。

³ 「残酷児」という活動団体について欧陽（2023）に詳しい。

進んでいることが見られる（福永, 2017）。しかし、当時の調査によれば、同志が抱える不安や悩みなどストレスの原因として、「家族の理解を得られないことへの心配」（79%）、「社会的な婚姻に対する期待」（68%）が挙げられている（簡, 2012）。この面において、先行研究で述べた「家」「和」「孝」という華人文化が色濃く残っていることが示唆されている。ただし、政治的な状況の変化によって、同志が自らの権利を主張しやすくなり、Vincent自身も障害者の「性的権利」を訴え、「残酷児」というアイデンティティを開示する戦略で運動に参加している。こうした実践は、健常者中心主義と異性愛規範に「抵抗」するカミングアウトの実践とみることができる。一方、家族とのかかわりでは「抵抗」とは異なる実践を行ってきた。以下では、Vincentのライフ・ヒストリー調査の結果を検討していきたい。

4 考察

4-1 障害と「孝」の義務

Vincentにとって、自身が病気／障害を抱えていることは家族関係に大きな影響を与えるものである。インタビューのなかで、Vincentは子供の頃から病気のために母に苦勞をかけてきたというエピソードをよく語った。

母にはとても感謝しているよ。私は生まれてすぐに熱と発作が出て、手足が完全に麻痺しちゃって、8歳になるまで、母は医者となつとつとこころはどこにでも私を連れて行ってくれた。そのおかげで脚が少しだけ動かせる……そうであれば今もベッドで寝たきりだよ。お金を稼いで、母にいい暮らしをさせて、お返しすることはできないけれど、恩は感じているんだ。私は観音菩薩に誓いを立てている。人生でたくさんの善行を積みまなきゃって、お恵みはすべて、私じゃなく母に与えてくださいって。それが私にできる唯一の恩返しだ。

障害のある息子のケアは、主に母親が行ってきた。Vincentは「家族の負担にならないように」施設で過ごし、社会に出て自立した生活をしていた。父親が定年退職した後、両親はVincentにより良い社会福祉、特に障害者の社会福祉

を受けさせたいと考え、家族でアメリカに移住することを決めた。しかし当時、Vincentは彼氏であるGreatと離れたくなかったため、そのまま台湾に残った。

私はアメリカに行かなかった。その頃は付き合いってまだ2年目で、やっとできた彼氏だし、彼と一緒に残るか、母とアメリカに行くか、すごく悩んだよ。〔施設に入ったため〕母と過ごした時間が少なかったものだから、私にとって家族はとても大切なんだ。でも、私って利己的なんだよ。Greatと残ることに決めた。母は「私と一緒にいかないの！」ってカンカン。私は台湾に住みたいんだよって言い訳をしたけど、彼氏がいることは言えなかったな。

Vincentは身体が不自由であるため、いつもそばに手伝う男性がいることが普通であると周囲から認識されていた。そのため、家族はVincentに同性パートナーがいることにまったく気づいておらず、Greatとの関係についても疑っていなかった。したがって、Vincentにとって、自分の性的指向を隠したまま、すなわち家族にカムアウトせずに、Greatと一緒に暮らすことが可能であったと考えられる。Vincentは、次のように述べた。

障害をもつことが、私と家族にとって大きな助けになった。私が小さいころから、母は、足の不自由な息子の人生は辛くて最悪なものになるだろうって考えてたんだ……だから母は私に何も期待していなかった。ただ、この先ずっと私の世話ができる人が現れることを望んでいた。「世話をしてくれる人がいたらいい！」って。母はそれ以外に何も望まなかった。わかった、それじゃあ、「世話をしてくれる」人を見つけてみせるよって。心のなかでそう考えた。母は女性を考えていたはずだけど、私は男性を考えていた。世話をするのは同じ。性別が異なるだけ。私はずっとそっちだった。恋人を探す努力だなんて願ったり叶ったり。しかもそれで、母に安心してもらえらるから。そして私は彼と一緒にいられる。世話をしてもらう必要はないけど、私の両親からしてみれば、彼は私の世話係。

Vincentによれば、障害があったため、結婚して子供を持つことや年老いた親のケアをすることは両親から期待されていなかった。華人文化には「不孝有三無後為大」という価値規範がある。この伝統的規範における不孝な行為とは、祖先を祀らないこと、親を養わないこと、子孫を残さず代を絶やすことの3つを指す。そのなかで、子孫を残さないことが一番の不孝であるとされている。Vincentが「お恵みはすべて、私じゃなく、母に与えてくださいって。それが私にできる唯一の恩返しだ」と語るのは、自身が「不孝」であるという価値観を内面化していることによって出てきた表現と言えるだろう。しかし、Vincentは、「障害をもつことが、私と家族にとって大きな助けになった」といい、障害をもつからこそ、「孝」の義務を免除されたとも語っている。つまり、「孝」の価値規範の最高目標である「子孫繁栄」(斎藤, 2001)は、多くの華人同志にとって同性間の欲望と対立してきたが、Vincentの場合はその対立が生じなかったのである。「世話をしてくれる人がいたらいい」という家族の思いは、生殖と結びつけられる異性愛的な形態ではない関係性、つまり、生殖と結びつかない多様な関係性に対する受容の可能性を示唆していたのだ。

4-2 カミングホームの過程

上述した通り、Vincentはそもそも「孝」に代表される異性愛的な家族規範から逸脱しているため、結婚し子供を産むといったライフスタイルは期待されていなかった。そのため、家族は同性愛も受容しやすい流れがあるように考えられるが、Vincentはそう簡単な話にはならないと指摘した。

私は、漸進的な方法を用いたんだ。何の前触れもなく「彼は私の彼氏です」って言うことで、みんなをびっくりさせ、傷つけなくなかったんだ。私たちはお互いに傷つけあうことを恐れていたんだ。

彼が「恐れていた」のは2つの点である。1つは、同性愛者であるとの表明が、家族に大きな衝撃や混乱をもたらすことである。これは、カムアウトされた親は同性愛に対する否定的な認識を子供に抱き、子供が知らない他人になったようなショックを受け、また子育てにおける強い罪悪感と失敗の感情に襲われる

(三部, 2014, p.16) ことと同義であろう。もう1つは、家族が自分のセクシュアリティを受け入れずに家から追い出されたり、または同性の恋人と別れさせられたり、暴力を振るわれたりすることである。このような不幸な出来事避けるため、Vincentが採った「漸進的な方法」について彼は次のように語った。

アメリカの両親が台湾の家に帰ってくると、いつも Great を一緒に連れてゆき、家族と食事をした。彼が誰で、どういう存在なのかを両親に説明することはなかったものの、すでにこのときから、私は土台づくりをしていたんだ。まず、Great がとてもいいやつで、私には大切な存在だということを家族に知ってもらう。そして、その時がきたら、彼が私の彼氏であること、私のパートナーであることを伝えるというものだ。

2004年に父の70歳の誕生日を祝うため、Greatとアメリカに行った。そのとき私は、私と彼との関係を母は知らないものとばかり思っていたんだけど、実は知っていた。ある時、弟と妹に向かって、母が「もし兄さん [Vincent] が死んでも、遺産はあなたたちのものにならないのよ。全部、Greatのところにいくの」と言った。もう、びっくり。母は気づいていたんだね。小学校も卒業していない人だったけど、母は母なりに私を理解していたんだな。母はそれだけを口にして、もう何も言わなかった。超感動。弟も Great に話しかけたんだ。「私らは兄さんと仲良しだけど、私らにできるのは、君が兄さんにしてくれたことの半分ぐらいだって気づいたよ」って……

Greatと行った海外旅行の写真を何度か家族に見せたことがあって。そこには車いすを押してくれる彼も映っていた。彼と出会えて幸せだと思う。[家族の] みんなも感動してくれてさ。でも同性愛については、心から受け入れることはできないと思う、特に両親は。だけど、彼が私にしてくれていることは、見ているから。

そういうことがあって、Greatと私はふたりで家を買ったんだ。私は母にふたりで家を買ったことは伝えたんだけど、それがなぜかまではいわないでおいた。母は少しずつ、理解してくれるはず。息子がなんとなく男と一緒にいるだけで、そこに特別な関係がないなら、一緒に家を買うということにはならないだろう。

VincentはGreatと恋人同士であると家族に伝えなかったことを明らかにした。すなわち、Vincentは自分のセクシュアリティやパートナーとの関係をカムアウトしていなかった。彼は、家族との食事会や重要な日にパートナーを連れて家に帰ることを通して、パートナーと親とが良い関係を築くのを企図した。また、自分のことを大事にしてくれるパートナーについて、その人柄に加え、世話をしてくれる人として認識させることで、家族の信頼と安心を勝ち取った。「一緒に家を買う」というのは、伝統的な中国文化に影響されている社会では異性愛カップルが行うことであり、共有財産をもつことは別れがたい関係を築いていることを意味する行為である。これらを通してVincentはGreatとの関係について、家族との間に「暗黙の了解」の土台を作った。最終的に、家族は同性パートナーの存在を暗黙的に受け入れた。このような、パートナーとの親密な関係をはっきり明言せず、曖昧にしたまま受け入れさせていく、Vincentが「漸進的」と呼んだ段階的な営みは、まさに「カミングホーム・モデル」の実践であると言えよう。それは既存の家族制度に対抗せず、家族関係の「和」を維持しながらも、非規範的なセクシュアリティの空間を異性愛的な家族制度のなかに開くものであった。

4-3 「クローゼットを開けてもらう」

以上の語りから、一見するとVincentはいわばクローゼットにいるまま、すなわち同性愛であることを明確に開示しないまま、家族とパートナーの間に良い関係を構築してきたように見える。しかしながら、2005年に父親が急逝したことでVincentは「父に私の人生で最も重要なことを伝えていなかった、人生で取り返しのつかない後悔を感じた」といい、クローゼットから出ることを考え始めた。葬儀の後、Vincentは母親と次のような話をした。

母にこう言ったの。「ごめんなさい、お母さんに孫を抱かせてあげること
はできないかも。お母さんが望むなら、養子をもらうつもりだよ」って。

すると、母はそんなのだからって言うんだ。「6人の子供を育て上げたのよ。子育ての大変さは知っているわ。しなくていいのよ」って。母は平然と
そう口にする、少し考えた後、ぽっと顔を向けて、はじめではっきり私に
聞いたんだ。「あなたが本当に言いたいのは、あなたが同性愛だってことで

しょう？」って。

母の口から「同性愛」という単語がでたのははじめてだった。私は、「ごめんなさい、そうです」と言ったんだ。母は「知っていたよ。ともかく、あなたが幸せであればいいよ」と言ってくれたんだ。

Vincentはまた、そのときに母親に対して言った「ごめんなさい」の意図も説明した。

「ごめんなさい」と言ったときに、とても悲しかった。でも、この悲しみの原因は私のせいではないとずっと思っていた。この悲しみを背負い込むのは、母と私ではない、この社会全体だって。

Vincentは自ら自分のセクシュアリティを母親に表明する際にも、直接的に「同性愛」であるとは言っていない。そのかわりに、「孫を抱かせてあげることができない」や「養子をもろう」という暗示的な表現を用いていた。母親はその言葉の意味を悟り、自らの口でVincentが「同性愛だ」と明確に言葉にした。「クローゼットを〔母あるいは他者から〕開けてもらおう」とVincentが自身のサイトで述べている⁴のは、華人文化の「含蓄」というはっきり伝えず婉曲的表現を行うコミュニケーション・スタイル (Liu & Ding, 2005) を通して、自分のセクシュアリティと家族とを調整してきた実践の一つの結果として考えられる。すなわち、家族との間に暗黙の理解の土台が築かれ、人生の重要な契機を経験した本人にクローゼットから出たいという意思が芽生えたとき、自ら自分のセクシュアリティを明示せずとも、クローゼットから出るよう導かれることもあるのである。

また「この悲しみを背負い込むのは、母と私ではない、この社会全体だ」という言明は、自分たちを苦しめているものが、社会の異性愛規範であるという指摘と糾弾である。ただし、この説明には、家族との交渉のなかで、Vincentが他者に対する想像力を働かせる姿勢が示されている。Vincentは非異性愛である自身

⁴ Vincent. (2021). 「媽媽打開殘障兒子的櫃子 (母は障害者の息子のクローゼットを開けた)」。 Retrieved July 22, 2021, from <https://www.facebook.com/notes/3366534813383476>

と異性愛の親の両方が、社会の異性愛規範から抑圧を受けていることを理解し、親の大変さや認識の限界もある程度想像していた。Vincentは前述したように、社会的には「残酷児」や「手天使」の活動を通じてマイノリティの権利運動を展開している。だが家族関係においては、セクシュアル・アイデンティティの承認を求めるよりも、家族が同性パートナーとの親密関係を受け入れる余地の構築を優先していると言える。

4-4 カミングアウト後と関係修復

本節ではVincentとパートナーの家族との関係の変化、日常における「カミングアウト・モデル」の実践とカミングアウト後の関係構築について考察する。

パートナーのGreatは一人っ子であり、公務員の仕事に就いている。台湾の伝統的な価値観では、一人っ子の男性は家系を引き継ぐ強い責任があるとされる。また職場では結婚の有無が出世に影響を与える。そして、Greatの母はキリスト教信徒であった。そのような背景から、Greatの母が息子とVincentとの関係を認めるのに困難であったことは想像に難くない。Vincentは、Greatの父の誕生日会で、はじめてGreatの親に会った。そのとき、Greatは、Vincentに事前の説明もなく「Vincentは私の彼氏だ」と紹介した。突然カムアウトされたGreatの親はその事実を受け止めることができず、VincentとGreatの親との緊張関係は3年間続いた。しかし3年後にある変化の兆しが見えた。Greatはその年の正月を実家に帰らずVincentと一緒に過ごすことに決めた。すると、Greatの母から二人で一緒に家に来なさいと、正月の食事に招かれた。その後、緊張関係は改善されたという。Vincentはこの変化について以下のように説明した。

Greatのお母さんが私のことを受け止められたのは、自分を騙しているからなんだと思う。自分の息子は良いことをしているんだって。良いことというのは、障害者をケアしているから。そう考えることで、彼女は楽になり、私たちの関係を受け入れやすくなったんだ。私にとってはそれで良いんだけど。

Greatの告白は、異性愛的な家族規範に直接抵抗し、伝統的な価値観を拒否す

る姿勢を示すものとなった。すなわち、Greatは「カミングアウト・モデル」に従った実践を行った。同時に、Vincentもアウトイングされた立場となり、双方とも受動的な立場に置かれてしまった。息子が同性愛者であると突然に知らされたGreatの親はショックを受け、二人の関係を認めることができなかった。こうした事態は、ほかの調査においても狭義の「カミングアウトの失敗」とされている（UNDP, 2016）。

しかしながら、三部が「カムアウトは、一度だけでは終わらない」（三部, 2014, p.93）と指摘するように、とりわけカミングアウト後の家族とのかかわり方においては、カムアウトした者とされた者の双方の関係性の構築が問題となる。Vincentは、当初、Greatの母はクリスチャンであり、その教義のため息子の同性間の関係性を認めることは非常に難しいと認識していた。この厳しい状況に対する突破口になったのは障害者であるとVincentは解釈した。Vincentの語りによると、自分は肢体不自由なので、介助する人のケアが必要であることは一般的に想定されている。弱い立場に置かれた障害者をケアする行為は、Greatの母にとって、神によって祝福される素晴らしい行動であった。そして、障害者は無性愛だという多くの人々の偏見を利用したというようにVincentは考えている。Greatの母が「罪」と見なす同性間の性行為が二人には不可能であると彼女に思わせるために、Vincentは自ら性的主体ではないことをアピールした。最終的に、Greatの母は息子とVincentとの暮らしを受け入れたという結果になったと、述べた。すなわち、「障害者」であることが、カミングアウト後の家族との関係修復を可能にするファクターとして働いたのである。Vincentの戦略は、健常者中心の社会規範が生んだ障害者（無性愛、無能力）の偏見を利用して、対話が可能な空間を作り出すものであったと言える。これも、家族規範とセクシュアリティの両方を並行させる「カミングウィズ・モデル」であると言えよう。

5 結論

本稿では、肢体障害をもつ男性同性愛者Vincentの語りをもとに、カミングアウトをめぐる障害、セクシュアリティ、家族との関係の変化、および関係を再構築するプロセスを分析した。Vincentの事例から示唆されたのは、次の2点である。

第一に、カミングアウト・ナラティブは可変的、相互的であり、カミングアウトの過程においては、単一のモデルの遂行・維持だけでなく、違うモデルへの切り替えや複数のモデルの統合もなされることである。

Vincentは自分の家族に対して、「漸進的な方法」を通してセクシュアリティを明確な形で表明せず、家族の「和」を維持しつつ、同性パートナーとの関係への承認を得た。その行動の戦略の特徴を3つにまとめるなら、次のように言えるだろう。(1) カミングアウトによる親子関係の緊張を回避するため、ケア的側面でのパートナーの必要性や人柄をアピールする（そうして家族と良い関係を築いていく）。(2) 重要な日にはパートナーと一緒に実家に帰り、食事をすることで、身内とよそ者の区別を解除する。(3) 友情以上の関係を言外に、それとなく、いわばセクシュアルと受け取られない方法で表現することで、家族が暗黙の了解を家族のなかに浸透させる。Vincentは自らの生活を既存の家族規範とうまく融合させたが（「カミングホーム・モデル」の実践）、父親の急死によって、本当の自分を伝えたい、カムアウトしたいと思い始めた。この変化からもわかるように、カミングアウト・ナラティブは固定的なものではなく、人生の変化に合わせて、その方法も変わっていくのである。

他方で、パートナーのGreatの家族への対応は、「カミングホーム・モデル」と呼ぶ戦略とは全く異なるものであった。Greatは突然Vincentと同性カップルであることを親に告白した。これは、規範を拒否する姿勢を示す「カミングアウト・モデル」に従った実践であった。他方、Vincentは本来自分の家族に対して実践してきた漸進的な方法で、パートナーの親に開示していくことを考えており、いきなり自分たちの恋愛関係を明示することは考えていなかった。しかし、パートナーによるカムアウトで自身のセクシュアリティをアウトイングされてしまう。その際にVincentはGreatの家族との緊張関係を緩和させる試みもした。二人の関係に反対を示す敬虔なキリスト教信者であるGreatの母は、障害者へのケアが神から祝福される行いであると信じていた。また障害者は無性愛であるという偏見があった。そこで、Vincentは同性愛者であることよりも、障害者であることを強調して、互いの緊張関係を緩和させていった。第2節で述べたように「カミングウィズ・モデル」を「カミングアウト・モデル」「カミングホーム・モデル」以外のものとしたが、その代表的な例として挙げていたのが「形

婚」である。ここから窺えるのは「カミングウイズ・モデル」の特徴には、特定の社会規範と非異性愛的な欲望の両立のために、別の既存の社会規範や、偏見を含む社会的通念を利用するという側面が共通してあることである。本稿の事例は、「カミングアウト・モデル」の実践が（失敗）した後に、障害者の一般化されたイメージや偏見を利用しながら「カミングウイズ・モデル」に移行したケースである。

Vincentの事例は、長期間交渉することによって、異性愛的であった家族空間に変容が生じことを示している。この過程のなかで、Vincentは自分からアクションをする一方で、家族側からの反応によってどのように振る舞うのかを判断していた。家族もVincentとコミュニケーションをとりながら、考えや態度を変化させていた。Vincentは時に能動的で、時に受動的でもあり、それは家族の側も同じである。すなわち、カミングアウトの行為は複数の主体の相互作用によって構成されているのである。

第二に、「カミングアウト」をめぐる交渉過程において、Vincentがうまく家族と交渉できたのは、彼が障害者であったという点が大きく作用していることである。

障害のある同性愛者は、二重のマイノリティ性をもつことでより苦しむというのが従来の理解であり、実際、そうした事例は広く見られる。それゆえネガティブな複数の要素が重なった「複合的不利益」について論じた研究は多いが、本稿の事例は、肢体障害が必ずしもマイナスに働くとは限らないことを示唆している。Vincentが「障害をもつことが、私と家族にとって大きな助けになった」と述べたように、華人文化の儒教的な「孝」の価値観と対立する非異性愛的な欲望を両立させるためには、障害者であることが好都合であった。Vincentは自分から家族を騙そうとはしていないが、障害者という立場を戦略的に利用していた。生殖と結びつく異性愛的な親密関係というよりも、ケアし合う関係性としてパートナーとの関係を理解してもらうよう、互いの家族を誘導したのである。またパートナーの家族に対しては、障害者は性と関係ない、ケアされるだけの存在であるといった、相手のミスリードされた認識を利用して、対話する空間を作り出した。

Vincentはカミングアウトをめぐる交渉過程のなかで、異性愛者である家族も

社会の異性愛規範または健常者規範から抑圧を受けていることを理解し、相手の大変さや認識の限界もある程度想像していた。彼は、個人の力だけでは短期的に変えられない現実と直面した場面には、「障害者である」というマイノリティ性を戦略的に活用している。この戦略は、自らに敵対的な社会的規範を、家族関係の再構築の目指す資源として巧みに活用し、結果的に脱異性愛規範的な家族関係の形成の可能性を切り開くものとなった。他方で、Vincentは積極的に社会運動に参加し、「アウト」によって障害者の性の権利を主張し、健常者中心の同志コミュニティを批判している。彼は、様々な状況に応じてモデルを使い分け、抑圧を低減するために多様なアプローチを模索しているといえる。

本稿では、特定のマイノリティ性を原因として抱えていた困難な状況は、ときに別のマイノリティ性を戦略的に使うことで打開されることもあることを示した。ただし、そうした戦略が、障害をもつ華人同志が置かれた社会規範や構造的な制約に応じて選択されている点にも十分に注意を払う必要があるだろう。特定のマイノリティ性を戦略として生かすこと、それに即して多様なモデルを使い分けていくこと自体が、華人の「家」「和」「孝」の文化、あるいは健常者中心の構造に規定されているものだからである。いずれにしても、多様な「カミングアウト」のあり方を、特定のモデルへと回収せず、個々の当事者が抱える複雑さとそれに伴う家族関係の変化に照らして検討していくことが重要である。その際には、複数のマイノリティ性が必ずしも複合的不利益だけに帰結するわけではなく、個人をとりまく差別状況の改善にポジティブに作用することもありうること、かつそうしたポジティブな作用が各社会の規範や構造的制約に規定されたものであり、逆説的に既存の規範や制約を維持・継続することにもなりうることに目を配る必要がある。今後は、差別状況を生み出す社会構造に対する批判と交差性との関係をより多くの華人同志の事例から解きほぐしていきたい。

Acknowledgement

本稿はJSPS科研費（JP20J21415）による成果の一部であり、立命館大学生存学研究所2018年度若手研究者研究力強化型「国際的研究活動」、ならび松下幸之助記念志財団2023年度研究助成を受けたものである。

References

- Altman, Dennis. (2010). 『ゲイ・アイデンティティ——抑圧と解放』(岡島克樹・河口和也・風間孝訳). 東京: 岩波書店. (Original work published 1993).
- Chou, Wah-Shan. (2000). *Tongzhi: Politics of same-sex eroticism in Chinese societies*. New York and London: Routledge.
- Chou, Wah-Shan. (2001). Homosexuality and the Cultural Politics of Tongzhi in Chinese Societies. *Journal of Homosexuality*, 40(3-4), 27-46.
- 福永玄弥. (2017). 『LGBTフレンドリーな台湾』の誕生. 『世界』, 898, 89-95.
- 簡至潔. (2012). 『台湾同志壓力處境問卷』調査結果初步分析. TAPCPR. Retrieved July 22, 2021, from <http://tapcpr.wordpress.com/2012/04/17/>
- Huang, Shuzhen., & Brouwer, D. C. (2018). Coming out, coming home, coming with: Models of queer sexuality in contemporary China. *Journal of International and Intercultural Communication*, 11(2), 97-116.
- 河口和也. (2003). 『クィア・スタディーズ』. 東京: 岩波書店.
- 倉本智明編. (2005). 『セクシュアリティの障害学』. 東京: 明石書店.
- Kong, Travis. (2011). *Chinese Male Homosexualities 華人男同志跨地域研究*. New York: Routledge.
- 李佩雯. (2018). 「當『他們』也是『我們』——已出櫃同志與原生家庭之跨群體溝通關係維繫研究」. 『傳播研究與實踐』, 8(1), 65-101.
- Leonard, W., & Mann, R. (2018). *The everyday experience of lesbian, gay, bisexual, transgender and intersex (LGBTI) people living with disability, No.111 GLHV@ARCSHS*. Melbourne: La Trobe University.
- Liu, Jen Peng & Ding, Naifei. (2005). Reticent Poetics, Queer Politics. *Inter-Asia Cultural Studies*, 6(1): pp.30-55.
- 三須祐介. (2018). 「林懷民『逝者』論——『同志文学史』の可能性と不可能性をめぐって」. 『立命館法学別冊』, 6, 603-626.
- Molly, D., Knight, T., & Woodfield, K. (2003). Diversity in disability: Exploring the interactions between disability, ethnicity, age, gender and sexuality. *Research Report No.188*, Department for Work and Pensions, Leeds.
- 元山琴菜. (2014). 『カミングアウトされた家族』から〈非異性愛者をもつ家族〉になることとは——『家族崩壊』に対応する母親役割に着目して. 『家族社会学研究』, 26, 114-126.
- Motoyama, Kotona. (2015). Experiences of Coming Out in Japan: Negotiating 'Perceived. Homophobia'. *Asia-Pacific Social Science Review*, 15(2), 75-92.
- 欧陽珊珊. (2021). 「障害とセクシュアリティの交差についての考察——台湾の肢体障害/男性同性愛者の経験から」. 『コア・エシックス』, 17, 51-63.
- 欧陽珊珊. (2023). 「残酷児——台湾における障害のある性的少数者の実践」菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく3』. (pp.108-135). 京都: 晃洋書房.
- Ryoji & 砂川秀樹. (2007). 『カミングアウト・レターズ』. 東京: 太郎次郎社エディタス.
- 斎藤光編. (2001). 『東アジアの性を考える』. 京都: 京都精華大学創造研究所.
- 三部倫子. (2014). 『カムアウトする親子』. 東京: 御茶の水書房.
- Shakespeare, Tom. (1999). Coming Out and Coming Home. *International Journal of Sexuality*

- and Gender Studies*, 4, 39-51.
- Shakespeare, Tom., Gillespie-Sells, Kath., & Davies, Dominic. (1996). *The Sexual Politics of Disability: untold desires*. London and New York: Cassell.
- 鈴木賢. (2022). 『台湾同性婚法の誕生』. 東京: 日本評論社.
- Tan, Chris K. (2011). Go Home, Gay Boy! Or, Why Do Singaporean Gay Men Prefer to 'Go Home' and Not 'Come Out'?. *Journal of Homosexuality*, 58, 865-882.
- UNDP. (2016). *Being LGBTI in China: A National Survey on Social Attitudes towards Sexual Orientation, Gender Identity and Gender Expression*. United Nations Development Programme.

Abstract

Negotiation Process of ‘Coming Out’ with Skilled / Flexible Acceptance: A Case Study of a Gay Man with Physical Disabilities

OUYANG Shanshan

This article clarifies how a status of disabled minority affects a process in which gay people inform their parents of their sexualities. Most research on this issue has often presumed that individuals belonging to both sexuality and disability minorities would experience compounded disadvantages, leading multiple difficulties in coming out. As a case study of such coming out processes, I apply three coming out models remarkably discussed in the context of Queer Sinophone Studies: coming-out model, coming-home model, and coming-with model. Based on these models, this study focuses on a Taiwan-based gay man with physical disabilities faced through the experience of coming out to his parents. The result indicates that the gay man’s status of combined minorities with sexuality and disabilities, which led to “compounded disadvantages”, did not act as a negative factor in his relationship with his family. In conclusion, those with combined minorities flexibly apply their multiple minorities in order to improve the family relationship in the process of coming out, in which they switch or combine some among the three models depending on the situation. It is crucial not to categorize them strictly into a particular model. Instead, examining these experiences within the broader context of the complexities faced by individual parties and the subsequent transformations in family relationships provides a more nuanced understanding.

Keywords:

people with disabilities, queer Sinophone, coming out, family relationship, LGBT

研究論文

ベルサーニをトランスする ——ベルサーニのクィア理論における トランスリーディングの可能性

古怒田望人

要旨

本論の目的は、レオ・ベルサーニのクィア理論の内に、トランスジェンダー研究の観点を見出すことにある。確かに、ベルサーニの理論はゲイ男性中心主義的であると批判されてきたが、彼の理論はトランスジェンダー研究の観点を含意する射程を有している。

第一節では、『フロイト的身体』（1986）におけるフロイトのセクシュアリティ論に関するベルサーニの解釈をトランスジェンダーの観点から読解する。この読解を通じて、彼のセクシュアリティに関する理論が、トランスジェンダーの人々が生きるセクシュアリティの構造を内包するものであることを明らかにする。

第二節では、「ホモネス」と呼ばれるベルサーニの関係性論を扱う。『ホモズ』（1995）において彼は、異性愛関係に根差す抑圧的な関係性とは別の仕方では繋がる「同じさ」を通じた関係性を、「ホモネス」という関係性概念から明らかにした。この概念をベルサーニは同性愛関係から具体化するが、同時に彼はこの概念を、同性愛関係を越えた仕方でも論じており、本論はそこにトランスジェンダー研究との交錯を見出す。

そこで、第三節では、「ホモネス」概念を、ゲイル・サラモンが『身体を引き受ける』（2010）で主題化した「ホモエラティックス」というトランスジェンダーに関する関係性概念から具体化する。この概念は、トランスジェンダーにおけるある種の同性愛関係を浮き彫りにするものであり、「ホモネス」概念を具体化するために適切な概念である。

最終節では、トランスジェンダー当事者の語りの分析を通じて、本論が浮き彫りにしてきたベルサーニの理論が、トランスジェンダーの肯定的な関係性の構造

を理論的に捉えるものとなることを証明し、彼の理論をトランスジェンダー研究に応用する意義を指摘する。

キーワード：

レオ・バルサーニ、クィア理論、トランスジェンダー研究、ホモネス、ホモエラティックス

本論の目的は、L・バルサーニのクィア理論の内に、トランスジェンダーに関する理論の可能性を見出すことにある。それにより、彼の理論を、トランスジェンダー研究の文脈に接続することを試みる。

このような試みに対しては、クィア理論が、ゲイ・レズビアン研究にある面で還元されてしまい、トランスジェンダーの存在を抹消した理論になってしまっているとトランスジェンダー研究から批判が向けられてきた。例えば、S・ストライカーは、「クィア研究はトランスジェンダーの課題を着手するのにもっとも適した場であり続けている一方で、たいていの場合クィアは「ゲイ」あるいは「レズビアン」の歪曲表現となっており、異性愛規範とは異なる主要な手段としてセクシュアル・オリエンテーションとセクシュアル・アイデンティティを優先付けるレンズを通してトランスジェンダーの現象はたいていの場合、誤解されている」と指摘する (Stryker, 2004, p.214、強調原典)。

この指摘に応じるように、バルサーニのクィア理論に対しても、このトランスジェンダー研究によるクィア理論批判と同様の批判が向けられてきた。例えば、井芹真紀子は、彼の「直腸は墓場か？」(1987)を読解しつつ、同論文におけるゲイ男性の経験のクィアな「否定性」が、女性のような「[他者]の固定化と消去によって成立」していると論じ (井芹, 2013, p.47)、J・E・ムニョスは、彼の理論が「人種、ジェンダー、セクシュアリティ」の差異を不可視化する「北米のゲイ男性文化」に留まっていると批判する (Muñoz, 1995=2009, pp.34-35)。つまり、彼の理論はゲイ男性中心主義的な理論であると批判されてきたのだ。

本論は、このような先行研究の批判に対して、バルサーニのクィア理論の枠組みとその射程が、むしろ、シスジェンダーのゲイ男性に限定されない、トランスジェンダーが生きる経験の構造——特に、彼ら、彼女らの肯定的な経験の構造を

浮き彫りにするものであることを証明し応答したい（尚、本論のこの試みは、トランスジェンダーのローカルな表象や語りの分析から展開される。この点で、ベルサーニの理論が「ヨーロッパ・アメリカ文学のカノンのなアーカイブ」に限定されているというJ・ハルバースタムの批判 [Halberstam, 2008, p.152] に対して、本論は応じるものでもある）。

本論は次のように展開する。まず、第一節ではベルサーニの『フロイト的身体』(1986)におけるフロイト論が、シスジェンダー中心主義に還元されないセクシュアリティの観点を含意することを論じ、彼の理論の「枠組み」におけるトランスリーディングの可能性を提示する。第二節では、この「枠組み」を通じてベルサーニが強調するセクシュアリティにおける自己瓦解の観点が、「ホモネス」と呼ばれる関係性の観点に開かれていることを論じ、彼の理論の「射程」を浮き彫りにする。続く第三節では、この彼の理論の「射程」が、G・サラモンが『身体を引き受ける』(2010)で主題化するトランスジェンダーが生きる関係性の構造から理解可能なことを論じる。そして、第四節では、トランスジェンダー当事者の語りの分析を通じて、本論が浮き彫りにしてきたベルサーニの理論が、トランスジェンダーの肯定的な関係性の構造を理論的に捉えるものとなることを証明し、彼の理論をトランスジェンダー研究に応用する意義を指摘する。

1 『フロイト的身体』におけるトランスネス

——ベルサーニの理論の枠組みの可能性

先に指摘したように、井芹は、ベルサーニの「直腸は墓場か？」における議論を読解し、彼の理論がゲイ男性中心主義に陥っていると批判している。本論はこのような井芹の批判に対して、同論文が理論的に依拠する『フロイト的身体』のセクシュアリティ論を読解したとき、ベルサーニの理論の枠組みの内に、シスジェンダー中心主義から逸脱するセクシュアリティの観点が見出されることを証明し、応答したい（また、ここから、次節でベルサーニの関係性論を論じるための足掛かりを作る）。そこで本節では、同著におけるS・フロイトの『セクシュアリティ理論のための三篇』¹(1905、以下『セクシュアリティ三篇』)解釈を説

¹ 文脈に合わせて邦題の「性理論のための三篇」から改訳している。

解する。

『セクシュアリティ三篇』においてフロイトは、口唇や肛門に関わるセクシュアリティを性的倒錯と見なし排斥しつつ、人間のセクシュアリティの「正常形態」を「性器領域」に置き（フロイト, 1905=2009, p.266）、このような性器領域において「快を得ることが生殖という機能のために有利に働く」（フロイト, 1905=2009, p.253）と論じている。この点で、明かに彼は、性器を用いて異性間でなされる生殖に基づいてセクシュアリティを規範化し、他のセクシュアリティの可能性を抹消している。しかし、このような規範的観点から論じられる『セクシュアリティ三篇』について、ベルサーニは『フロイト的身体』で「全く異なった議論が展開されている」ことを指摘する（Bersani, 1986, p.39）。

この「全く異なった議論」を論じるためにまず、ベルサーニは、「対象発見とは本来、再発見なのである」（フロイト, 1905=2009, p.284）というフロイトの『セクシュアリティ三篇』における発言を、次のように解釈する。彼によれば、この発言は、性器領域をセクシュアリティの正常形態と定めるフロイトの態度とは裏腹に、そうしたセクシュアリティにおける対象発見が、性器期に先立つ口唇期や肛門期のような性器領域に限定されないセクシュアリティのある種の反復（「再発見」）であることを示唆している（cf. Bersani, 1986, p.35）。したがって、彼が指摘するのは、フロイト自身の理論の内部に、セクシュアリティに関する規範的観点を崩す理論が含意されているということだ。

ところで、フロイトは、「子供が母親の乳房を吸うことは、あらゆる愛情関係の祖型になっている」（フロイト, 1905=2009, p.284）と対象発見におけるある種の「起源」を定めているが、対象発見における反復は、このような起源の対象を捉えそこなう運動である。というのも、彼が記述するセクシュアリティの構造は、特定の対象や身体領域に限定づけられるものではないからだ。例えば、口唇的セクシュアリティ（具体的には「おしゃぶり」）についての彼の記述は多義的なもので、「口がとどく任意の場所の皮膚」（フロイト, 1905=2009, p.230）にまで広げられる。彼においてさえ、母親の乳房は「性源域としての唇を幼児が発見するための偶然的な原因」（Bersani, 1986, p.35）と見なされており、対象の「再発見」は、起源的对象を捉えそこなう反復とならざるをえない。

以上の点から、ベルサーニはフロイトの「再発見」に関する発言を以下のように

に解釈する。

起源的対象を「再発見」しようとする努力は次のような布置への再帰の試みだろう。その布置とは、そこでいかなる対象も特権的ではない布置、そこであらゆる源からセクシュアリティが生じうる（私たちは、乳房に、親指に、身体が揺すられることに、思考等々に刺激を受けうる）布置、そして最後に、そこであらゆる身体の部分が潜在的な性源域である布置である。[…]
[フロイトによる]人間のセクシュアリティへの探求は、対象の特定性からも、身体器官の特定性からも、セクシュアルなものが徹底的に分離される事態へと行き着く。(Bersani, 1986, p.39, 亀甲カッコ内引用者)

このようにフロイトのセクシュアリティ論は多義的な対象や身体性を通じて展開されており、彼の理論はセクシュアリティを特定の対象や身体領域から切り離す理論的帰結をもたらすものである。敷衍すれば、この理論的帰結は、出生時に割り当てられた「男」という性別に基づいて意味づけられたペニスという特定の身体領域から、異性愛者のシスジェンダー男性であることを期待、要求する規範から逸脱するセクシュアリティの可能性を示しているといえる。それゆえ、フロイトのセクシュアリティ論は、異性愛中心主義、そしてシスジェンダー中心主義から逸脱する理論として読み替え可能なのだ。実際、『セクシュアリティ三篇』において、性源域は「あらゆる身体部位および内臓の諸器官にも備わっている」と語られ（フロイト, 1905=2009, p.237）、「一段とすぐれた」性源域は「皮膚」という身体全域に広げられる（フロイト, 1905=2009, p.216）。

ベルサーニは、以上のようなフロイト読解を通じて、セクシュアリティの「位置づけ難さ」と呼びうる構造を引き出している。彼は、セクシュアリティを生殖のための性器へと限定するといった規範的観点による特定の身体領域への位置づけから横滑りするクィアなセクシュアリティの構造を、フロイトから提示するのだ。加えて、彼は、このようなセクシュアリティの「位置づけ難い」構造を、「セクシュアルなものへの感じやすさ=感応性 (susceptibility)」(Bersani, 1986, p.38) と呼ぶ。彼によれば、クィアなセクシュアリティは、特定の対象や身体領域に「位置づけ難い」がゆえに、あらゆる対象、身体領域がセクシュアルに触発

しうる「感応性」を含んでいるのである。

さらに、このようなセクシュアリティの構造を起点として、ベルサーニは、セクシュアリティを生きる「自己」の経験に目を向ける。彼は、「位置づけ難く」、「感じやすい」セクシュアリティを介して、「私たちは私たちを強く動揺させる (nearly shatter) ものを欲望する」(Bersani, 1986, p.39) と語る²。彼は、セクシュアリティを、特定の対象や身体領域に留まり切れず、どんな対象や身体領域もセクシュアルに触発する可能性を含む限りで、主体によって統御困難な現象と解釈するのだ。またこの点から、「セクシュアリティとは構成された自己にとって耐えがたいことだろう」(Bersani, 1986, p.38) と論じられる。つまり、セクシュアリティを何らかの仕方統御しようとする主体性そのものが、当のセクシュアリティの経験から覆されるのだ。この意味で、彼にとって、セクシュアリティは、主体を快楽によって充足させる現象ではなく、むしろ、その「位置づけ難さ」や「感応性」を介して「自己」を崩す現象なのである。それはある面では、規範的に「構成された自己」を覆すことであるが、しかし彼の議論はそれ以上のことを含意している。彼によれば、「位置付けがたく」、「感じやすい」セクシュアリティの「多形倒錯的本性」とは「セクシュアリティへと自己瓦解すること」であり (Bersani, 1986, p.38)、言い換えれば、彼の議論におけるセクシュアリティは、その本性としてなんらかのアイデンティティを生きる「自己」を転覆させるものなのだ。すなわちそれは、異性愛・シスジェンダー中心主義から離れて——セクシュアル・オリエンテーションとジェンダー・アイデンティティのどちらについても——規範的か非規範的かの別を問わず、あらゆるアイデンティティをその射程とする理論なのだ。

以上の『フロイト的身体』におけるフロイト解釈に基づいて、ベルサーニは「直腸は墓場か？」におけるゲイ男性のアナルセックスに関する理論を展開する (cf. Bersani, 2010, pp.24-25)。彼は、ゲイ男性のアナルセックスの身体性（「直腸」）を「墓場」と呼びつつ、そこに「誇り高き主体性という男性性の理想像」、「内面化されたファルスの男性性」というアイデンティティが瓦解する「自己の

² ベルサーニの術語である「shatter」は確かに「破碎」という「動揺」よりも強い意味で訳されるが (cf. 村山, 2005=2022)、本論ではこの術語の原語である「ébranlement」(cf. Bersani, 1986, p.38) の意味に立ち返りあえて「動揺」や「瓦解」と訳すことで「破碎」とは異なった経験の構造を浮き彫りにすることを試みる。

壊乱、自己の喪失」を見出す (Bersani, 2010, pp.29-30、強調原典)。確かに、一見すると彼のこの理論は、ゲイ男性のセクシュアリティにある種の否定性を一義的に付与し、特権化しているようにみえる。しかし、この理論は、前述のとおり異性愛中心主義だけではなくシスジェンダー中心主義からも逸脱するセクシュアリティの構造を提示する彼のフロイト論にそもそも基づいたものであり、理論の枠組みとしてシスジェンダーのゲイ男性に閉じられたものではない。したがって、ベルサーニのクィア理論は、トランスジェンダーに関する理論として拡張される可能性を内包しているのだ。

では、このようにセクシュアリティの内にある種の自己瓦解の契機を見出すベルサーニの理論は、具体的にどのようなトランスジェンダーの経験の構造を捉える「射程」をもつのだろうか。そこで次節では、彼が、このセクシュアリティにおける自己瓦解を起点として、ある種の関係性論を展開することを論じたい。さらにここから第三節と第四節では、この彼の関係性論が、トランスジェンダーが生きる関係性の構造から具体化されることを証明する。

2 「ホモネス」という関係性——ベルサーニの理論の「射程」

本節では、ベルサーニの『ホモズ』(1995)を読解することで、彼が指摘したセクシュアリティに根差す自己瓦解の構造が、「ホモネス」と呼ばれるクィアな関係性の契機となることをみる。そしてここから、次節と第四節では、この「ホモネス」が、トランスジェンダーが生きる関係性の構造を通じて具体化可能なことを論じたい。

この「ホモネス」の観点を論じるためにまず、『ホモズ』の約8年前に書かれた「直腸は墓場か?」において既に、ある種の関係性に関する問いが立てられていることを確認したい。ベルサーニは同論文において、J・ウィークスやG・ルービン、M・フーコーといった理論家たちが、「多様性」や「ライフ・スタイル」といった仕方で、セクシュアリティを「理想化」していると批判する (cf. Bersani, 2010, pp.25-29)。その批判の中で、彼は、セクシュアリティの実践が、権力関係を内面化したものであることを強調する。

人間の身体は次のような仕方で構築されている、あるいは少なくともこれ

までそう構築されてきた。それは、支配と従属を私たちのもっともはげしい快楽の経験と切り離すことがほとんど不可能な仕方によってである。このことはなによりもまず体位の問題である。種の再生産に（近年まで）必然的なものだった挿入は、もっとも一般的には男が女の上になることでなしとげられてきた。もしそうだとするならば、上になることは単なる物理的な位置の問題ではありえないということもまた真実である。[...] 私が言わんとしていることは次のことである。フーコーは関係それ自体に内在する権力の効果について論じてきたが [...]、それはおそらくセックスにおいて、もっとも過激なものになりやすいし、支配と従属の関係へともっとも二極化しやすいということである [...]。(Bersani, 2010, pp.22-23)

ベルサーニは、「正常位」のような「体位の問題」を、「単なる物理的な位置の問題」ではなく、「支配と従属」という権力関係が「セックス」の水準で内面化する問題として捉える。セクシュアリティを生殖に結びつける規範は、「正常位」という「体位」を介して身体化されており、その「体位」は「男が女の上になる」という権力関係を内面化させている。つまり彼は、セクシュアリティを「理想化」するのではなく、その身体経験が「支配と従属」という権力関係を実践してしまうというある種の暴力性を明るみに出すのだ。

このような権力関係を主題化することから分かるように、「直腸は墓場か？」の中でベルサーニは、セクシュアリティにおける「関係性」を重要な問いの一つとして取り上げている。そして、同論文において彼は、ゲイ男性のアナルセックスの分析を通じて、ある種の権力性を内面化した主体の動揺、瓦解を論じることで、権力関係を内面化した主体とは異なった「自己」の構造を描くことを試みた。では、このようなクイアなセクシュアリティを通じて自己瓦解する主体は、どのような関係性に開かれるのだろうか。

そこで、「直腸は墓場か？」の後に書かれた『ホモズ』において、ベルサーニが、『フロイトの身体』における自身の理論を参照しつつ展開する以下の関係性論を参照したい。

フロイトとフーコーにとって、もちろんそれぞれまったく異なった仕方

はあるが、権力の実践が生み出すのは、その権力の実践それ自体の内部からの権力への抵抗である。この実践と抵抗を同時に生じさせる諸々の主体性に関しては、フロイトの解釈が、より良い説明を与えてくれるように思われる。[…] 主体が反復しようと試みるのは、我有化すべき対象が、それに対して我有化すべきものとしての妥当性を失ってしまうセクシュアルな興奮、また、その妥当性の消失の結果として、我有化を行う自我の瓦解を本義とするようなセクシュアルな興奮である。[そのとき] 我有化は、次のようなコミュニケーション、非対話的 (non-dialogic) コミュニケーションへと変容する。それは、そこで主体が支配することを期待する対象によって、当の主体が極めてセクシュアルに「摩擦を受ける」ことで、主体と対象を隔てている諸々の境界そのもの、[対象の] 所有のために必要なその諸々の境界が消え去るコミュニケーションである。(Bersani, 1995, p.100、亀甲カッコ内引用者)

フロイトの理論において「主体が反復しようと試みる」、「セクシュアルな興奮」は、特定の対象や身体領域に位置づけることが困難な現象だった。ゆえに、セクシュアリティにおいて、対象を「我有化」あるいは「支配」しようとすること（「権力の実践」）は、常に失敗を伴う（「我有化すべき対象が、それに対して我有化すべきものとしての妥当性を失ってしまうセクシュアルな興奮」）。そして、フロイトが明らかにしたクィアなセクシュアリティにおいては、あらゆる対象や身体領域がセクシュアルに触発するという「感応性」によって主体は瓦解するのだ。言い換えれば、「我有化を行う自我の瓦解を本義とするようなセクシュアルな興奮」が生じるのだ。

だが、上記でベルサーニが示唆しているのは、こうした「失敗」や「瓦解」は、それ自体で終わるわけではなく、何らかの関係性へと開かれているということだ。彼の言葉を借りれば、クィアなセクシュアリティは、「支配」のような権力関係が前提とする「主体と対象を隔てている諸々の境界そのもの、[対象の] 所有のために必要なその諸々の境界が消え去るコミュニケーション」を発生させるのだ。したがって、彼が指摘するのは、クィアなセクシュアリティにおける自己瓦解の経験は、ある種の関係性の契機でもあるということだ（言い換え

ば、彼が強調するセクシュアリティにおける自己瓦解の経験は、ある種の関係性の観点に開かれる「射程」を有する³⁾。

では、このような関係性とは、どのようなものなのだろうか。上記の「非対話的コミュニケーション」という表現からは、ベルサーニが論じる関係性は、言語を介さない神秘主義的経験のように聞こえる。しかし、本論は、「非対話的」という言葉で彼が意図しているのは、ある種の抑圧関係を批判し、それとは別の関係性を狙うことだと考える。このことを証明するために、以下でM・ウィティッグの理論を参照したい。というのも、この抑圧関係のモデルを批判的に提供する理論として、『ホモズ』においてベルサーニはウィティッグの理論を参照しているからだ。

そこでまず、ウィティッグの理論においてベルサーニが特に注目するのが、彼女の論文“Straight Mind” (1980) で指摘される、「差異」概念に根差した以下のような抑圧関係の問題であることを見たい。

もっとも興味深いこのウィティッグ議論の側面は […], 彼女が差異に対して懐疑的であることだ。彼女は、差異それ自体の現象の構造をジェンダーと同一視することに抗議すること以上のことを行う。「差異を有した存在/他者 (different/other)⁴⁾ はつねに劣った位置にある […]. 「男たちも白人たちも差異を有さないし、主人たちも同様に差異を有さない。しかし、奴隷たちと同様に黒人たちは差異を有している」。それゆえ、彼女は次のように結論付ける。「差異の概念は、その概念についての存在論的な側面を何も有していない。差異の概念とは、主人たちが支配の歴史的状況を解釈するための方法でしかない」。(Bersani, 1995, p.39)

ウィティッグは、「差異」という概念が、「男と女」、「主人と奴隷」、「白人と黒

³⁾ ベルサーニの理論は、クィア理論における「アンチソーシャル理論」の先駆けとしてまとめられ (cf. Caserio et al. 2006)、その独我論が批判されるが (cf. 井芹, 2013, p.47)、彼の理論は外部へと開かれたものである。この点に関しては、Tuhkanen (2020)、長尾 (2023) を参照。

⁴⁾ ベルサーニは「different-other」と表記しているが、ウィティッグの原文は「different/other」であるため (Wittig, 1992, p.29) このように訂正する。

人」といった支配関係において、女性や奴隷、黒人を劣位に置くためのある種の抑圧構造として機能していると批判する。そして、この「差異」に基づく抑圧構造を形成していると彼女が見なすのが「ストレートな思考 (Straight mind)」と呼ばれる異性愛関係の構造である。例えば、「男女の異性の間の差異の概念は、女性を、差異を有した存在/他者へと存在論的に構成する」のだ (Wittig, 1992, p.29)。ベルサーニの言葉を借りれば、「異性愛は階級間の抑圧を、人間本性の恒常的な事実として固定化」し (Bersani, 1995, p.38)、「ストレートな思考は差異を〔抑圧的に〕価値づける」のである (Bersani, 1995, p.39、亀甲カッコ内引用者)。

このような異性愛関係に基づいた抑圧構造を表す具体例として、ベルサーニは、ウィティッグが“On The Social Contract” (1989) で取り上げた、アリストテレスの『政治学』における記述を参照する (cf. Bersani, 1995, p.38)。ウィティッグによれば、アリストテレスは『政治学』の中で「男と女」の異性愛の対関係を、「お互いが存在しないと無効」となる「一つの対になるべき」、すなわち「支配するものと支配されるもの」の関係とみなしている (Wittig, 1992, p.42)。ウィティッグはそれを「異性愛の関係性というもの」を「あらゆるヒエラルキーの関係の指標」として (ibid)、換言すれば、異性愛という社会契約が「暗黙のうちに」 (Wittig, 1992, p.41) 合意される事例として批判している。

M・ホクスワースが指摘するように、こうした女性を劣位に置く哲学の態度は、古代ギリシャ哲学から中世哲学を経て近代哲学にまで及ぶ (cf. ホクスワース, 2019=2022, pp.23-27)。例えば、20世紀フランスを代表する哲学者E・レヴィナスは、彼の主著『全体性と無限』(1961)において、女性性を「本当の発話を知らない無責任な動物性」(Levinas, 1961 = 1971, p.295) という劣位の立場に追いやっている。ホクスワースが述べるように、「西洋哲学の伝統の内部では、セックスの解釈はつねに、男性に権力と権利を付与する一方で、女性にはそれらを否定するという、二分法的な構造に依拠している」のだ (ホクスワース, 2019=2022, p.27)。

以上のような哲学の伝統が示すように、異性愛関係から示される「差異」は、ある種の抑圧関係を形成することに繋がっている。そして、ベルサーニは、ウィティッグが「ストレートな思考」と呼ぶ以上のような哲学の態度を、哲学が差異

を論じる際に参照する「弁証法的思考と対話 (dialogue)」の内に見て取っている (Bersani, 1995, p.40)⁵。したがって、ベルサーニが「非対話的 (non-dialogic) コミュニケーション」という概念で意図していたことは、こうした哲学の伝統、そして異性愛関係が内面化してしまっている差異に基づいた抑圧関係とは異なった関係性である。

そこでベルサーニは、差異に基づかない関係性を「ホモネス (homoness)」という概念から論じようと試みる。

ホモネスに関する新しい省察が私たちにもたらす可能性があることは、差異による価値づけを適切に切り崩すこと——あるいは、より正確には、乗り越えられるべきトラウマとしての差異の概念（この観点は、とりわけ、男女の異性の間の対立関係を強めるものである）ではなく、むしろ、同じさ (sameness) を脅かすことなく、その補完となるような差異の概念である。(Bersani, 1995, p.7)

「ホモネス」とは、「男女の異性の間」に根差した「差異」という抑圧関係を「切り崩す」ものであり、そこで関係し合う項が「同じさ」という仕方で結びつく関係性である。そして、その「同じさ」を共有し合う項の間の差異もまた、関係しあう項の間の支配や抑圧といった対立（「トラウマとしての差異」）を生むのではなく、その「同じさ」という繋がり合いの「補完」となる関係性である。

ただし、このような「同じさ」の関係性は、主体のアイデンティティを固定化するものではない。ベルサーニの言葉を借りれば、「ホモネス」とは、「非アイデンティティ主義的な同じさ」という概念であり、そこで「自己のアイデンティティが、自己の外部で不正確に複製される」関係性である (Bersani, 2010, p.183, 強調引用者)。つまり、「ホモネス」とは、主体が生きる何らかのアイデンティティが揺るがされつつ、「同じさ」を通じて、外部へと開かれる関係性だといえる。そして、そのように動揺するアイデンティティと外部へ開かれた関係

⁵ ベルサーニは次のウィティッグの発言を参照していると思われる。彼女によれば、「異性愛は、その主なカテゴリーとして弁証法的思考（あるいは差異の思考）のうちに暗黙のうちに入り込んでいるのだ」(Wittig, 1992, p.43)。

性の構造は、第一節で前述したベルサーニ自身のフロイト論から展開する自己瓦解の経験を基底としていることが指摘できる。

したがって、ベルサーニが「ホモネス」概念から捉えようとする関係性は、1) 「差異」に基づいた権力関係や抑圧関係といった対立関係に還元されず、2) むしろ関係する項の「差異」がそれらの項の「同じさ」を肯定的に補完するものとなり、3) 主体のアイデンティティが揺るがされつつ、その「同じさ」を通じて外部に開かれる、という構造である。では、このような彼の理論の「射程」は、具体的にどのような経験として立ち現れてくるのか。そこで次節と第四節では、この関係性論をトランスジェンダーの経験から具体化したい。

3 「ホモエラティックス」という「ホモネス」

——ベルサーニの理論の「射程」の可能性

『ホモズ』において「ホモネス」概念は、A・ジッド、M・プルースト、G・ジュネの作品におけるゲイ男性のセクシュアリティ表象から具体化されている (cf. Bersani, 1995, pp.113-181)。しかし、「ホモネス」概念の射程は、シスジェンダーのゲイ男性間関係性に限定されるものではないと考えられる。実際、ベルサーニ自身も、2014年のインタビューにおいて、『ホモズ』における彼の関係性論が同性愛関係に限定されている点を、「あまりにも文字通り過ぎ、あまりにも恣意的だった」と自己批判し、この関係性論が他の関係性に開かれる可能性を示唆している (cf. Tuhkanen, 2014, p.280)。そこで以下では、「ホモネス」概念の射程をトランスジェンダーが生きる関係性の構造から具体化することを試みたい。そしてそのために、『身体を引き受ける』においてサラモンが提示する「ホモエラティックス (Homoerratics)」という概念を参照する (この概念は「同性愛」を意味する「ホモエロティック [homoerotic]」と、「逸脱した」を意味する「エラティック [erratic]」を掛け合わせた造語である)。

この概念を論じるために、サラモンは、「サンフランシスコで年中無休で「ダイク・バー」を自称し、掲げている」、レズビアン・バー、「レキシントン・クラブ」が2002年に発効した「[ボーイズ]・オブ・ザ・レックス」(Salamon, 2010, p.69) というカレンダーに掲載された写真を取り上げる。

モーガンの十二月の写真は、このバーの設立者であり、所有者であるリラを写している。彼女はアーモンの隣に立っている。アーモンはリラの隣に座っている、顎がシェービングの泡で覆われている男性である。リラは一方の手で彼のあごひげをつかみ、もう一方の手で剃刀をもって彼の顔の横に注意深く構えている。その写真はレキシントン・クラブではなく、別のバーであるイーグル・テイバーンで撮られている。そこは地元のレザーマンのバーであることが、写真の背景に写っている屈強な〔ゲイの〕ダディ (burly daddies) たちのグループや、(イーグルのバーテンダーである) アーモンが被っているバーのロゴの入ったベースボール・キャップから分かる。写真における男性性の流通は複雑なものだ。リラは女性に「読める」が、背景の男性の身体に対して前景化しているのは——文字通りにも、また形象的=比喩的 (figuratively) にも——彼女の男性性なのである。アーモンの位置は、まったく従属的なものというわけではない——彼は茶目っ気のある笑みを浮かべてレンズを直接見ている——が、しかし、彼のあごひげと男らしい顔はその前にある剃刀に傷つけられうるほど密接である。リラは彼女が髭剃りをする男性との場面を任されているだけでなく、より広い意味でレザーマンのバーで繰り広げられる男性性の場面をも司っている。その写真は、去勢する女というブッチ・レズビアンステレオタイプを、準備万端のナイフで男性性を脅かすことで引用している。しかし、背景の男性たちの姿勢はリラックスしたフレンドリーなものである。そして、前方に写し出されている二人の人物の場面における危険な雰囲気は、お互いに対する二つの身体の状態によって和らげられており、その場面は、攻撃的というよりもむしろ温和なものである。ブッチ・レズビアンは男性性を攻撃しているのではなく、男性性とホモエロティックに戯れているのである。(Salamon, 2010, pp.69-70、亀甲カッコ内引用者)

リラは、アーモンの「あごひげをつかみ、もう一方の手で剃刀をもって彼の顔の横に注意深く構えている」。このリラのアーモンに対する関係は、彼を支配ないし抑圧する関係に表面上は見える。しかし、両者（そして、背景のレザーマンたち）の間に見られるのは「男性性を脅かす」あるいは「男性性を攻撃」する

という権力関係や抑圧関係ではなく、「男性性とホモエロティックに戯れる」肯定的な関係性である。事実、「背景の男性たちの姿勢はリラックスしたフレンドリーなものである。そして、前方に写し出されている二人の人物の場面における危険な雰囲気は、お互いに対する二つの身体の態度によって和らげられており、その場面は、攻撃的というよりもむしろ温和なもの」なのだ。

そして、サラモンは、「男性性とホモエロティックに戯れる」この関係性を、「ホモエラティックス」という観点から以下のように浮き彫りにする。

写真が表象しているのはある種の男性的なホモエロティックである。ただし、ホモエロティシズムあるいはホモセクシュアリティを「同一のものの愛」と解する一般的な理解では、このエロティシズムがどのように、セックス、ジェンダー、身体の水準での差異と他性に依存しているかを理解するのに不十分である。というのも、もしこれが類似性のエロティクスであるなら、類似性は決定的に差異を通して与えられているからである。写真に写っているすべての人は同じジェンダーに「属して」いると思う人もいるかもしれない（それは正しいかもしれないし、間違っているかもしれない）が、はっきりしているのは、彼らが同じセックスには属していないということである。写真のエロティックな力はこの同じさの内部の差異（*difference within sameness*）によって生み出されているのである。[...] このような文脈において、ホモエロティックはあまり役に立たない、味気のない形容詞であり、その〔写真の〕イメージによって生産されたリビドーと同一化の屈折にまったくついてゆくことができない。この写真の展示、及び、その文脈に基づいた用い方は、ホモエラティックと呼んだ方がよいだろう。つまり、同じさのリビドー経済の参加者はそれにもかかわらず、予測不可能な驚くべき仕方で、習慣的で予期された進路を踏み外し、彷徨うのであり、同じさのリビドー経済のエネルギーはまさにエロティックな同一化と交換の不安定性=固定化しがたさ（*unfixability*）に依存しているのだ。（Salamon, 2010, pp.70-71、強調原典、下線、亀甲カッコ引用者）

サラモンが指摘するように、リラとアーモン、そして背景のレザーマンたち

の間のホモエロティシズムは、「同一のものの愛」に還元されない。彼ら、彼女らはある種の類似した仕方で「男性性」を共有しながらも、そこには「セックス、ジェンダー、身体の水準での差異と他性」の交錯——例えばリラとレザーマンたちは類似した男性性を共有しつつ、前者はブッチ・レズビアン、後者はゲイのレザーマンである——が生じている。すなわち、彼ら、彼女らのセクシュアルな関係性は、「同じさ」で繋がる関係性の内部の差異——「同じさの内部の差異」——を含む、「ホモエラティックス」なのだ。

この「ホモエラティックス」という関係性に、ベルサーニが論じた「ホモネス」という関係性を見て取ることができるだろう。というのも、この「ホモエラティック」な関係性は、「男性性」を介して他者を支配したり、抑圧したりするものではなく、関係しあう項の間の「差異」が、互いの「男性性」の類似性を肯定的に補完するもの（つまり、「男性性とホモエロティックに戯れる」ことを可能にするもの）として働いているからだ。つまり、サラモンが指摘する「同じさの内部の差異」は、ある種の類似性をその類似した項の間の差異が補完するという意味で、ベルサーニが「ホモネス」を通して論じた「同じさを脅かすことなく、その補完となるような差異」（Bersani, 1995, p.7）だといえる。

加えて、この「同じさの内部の差異」は、「習慣的で予期された」「ホモエロティシズム」（あるいは「ホモセクシュアリティ」）にアイデンティティが固定されない、すなわち「不安定性＝固定しがたさ」という自己瓦解の性質を抱えるがゆえに、互いが共有する男性性に「ホモエラティック」に関係する契機となっている。したがって、セクシュアリティにおける自己瓦解の経験（アイデンティティの「不安定性＝固定化しがたさ」）は、「同じさ」を通じた関係性（「エラティック」に共有される「男性性」）の契機となるのだ。

さらに言えば、サラモンが論じる以上のような関係性は、トランスジェンダーが生きる経験に開かれたものである。というのも、サラモンがその写真を分析した「レキシントン・クラブは、女であるかもしれないし、女ではないかもしれないボーイたちで満ちているだけではなく、女に同一化するフェム、そしてバターが述べているように「彼らのガールがボーイであることを好む」フェム、あるいはおそらく、彼らの「ボーイがガールであること」を求めるフェムによっても満たされており、そして、女であるかもしれないし、女ではないかもしれない

ボーイで、彼らのガールがボーイであることを好むボーイの数はそこで増加しており、ブッチとブッチのカップルやトランスとトランスのカップル、すなわちホモエラティックはますます目に付くようになってきている」からだ (Salamon, 2010, p.93)。つまり、サラモンが論じる「同じさの内部の差異」の観点は、その射程がシスジェンダーの同性愛関係のみに限定されないどころか、トランスジェンダーも含む非規範的なジェンダーの人々のあいだでこそ増殖して (「ますます」) 見出されるのだ。

したがって、ベルサーニの関係性論は、シスジェンダーのゲイ男性間の関係性に限定されるものではない。しかし、「ホモエラティック」概念がどのようにトランスジェンダーの経験の観点から具体化されるのかという点に関しては、サラモンの議論だけでは判然としない。そこで次節ではトランスジェンダーの語りを通じてこの概念を具体化したい。

4 「ホモエラティックス」を具体化する

——トランスの語りを通じて

前節で論じた「ホモエラティックス」概念を具体化するために、本節では、ROSの『トランスがわかりません!!』(2007)に掲載された瑞恵という名のトランスジェンダーの以下の語りをベルサーニの理論の観点から分析したい。この語りからは、ジェンダーとセクシュアリティの交錯、そして、ある種の「同じさ」を通じて自己の外部と肯定的に繋がる「ホモネス」のありようが現れている。

いま一番しっくりきているのは、身体的には「男」だが、自分が「男」ではないと感じている人との関係である。その人は広い意味でのトランスとっていいかもしれない。わたしは自分が「女」であると感じていないし、その人は自分が「男」であるのに違和感・嫌悪感がある。外見でいえば男と女の取り合わせでも、二人のあいだで「男役」-「女役」をとることはほとんどない。二人の関係のなかでそういう役割をしなくていいからこそ、楽に一緒にいられるとっていいだろう。外見から見てヘテロセクシャルなカップルでも、実際はそうとは限らないということだ。そういうわたしたち

のセクシュアリティは、一体何と呼んだらいいだろうか。(瑞恵, 2007, p.87)

「外見から見てヘテロセクシュアルなカップル」であっても、瑞恵は、「自分が「女」である」ことに揺らぎを感じ、パートナーも「男」であることに揺らぎを感じている。また、そうした揺らぐ自己のアイデンティティを、何らかのカテゴリーから言い表すことの困難さも瑞恵は語っている (cf. 瑞恵, 2007, pp.82-83)。そして、その揺らぐアイデンティティを生きる両者の関係性に対して、「そういうわたしたちのセクシュアリティは、一体何と呼んだらいいだろうか」という瑞恵の問いかけが、セクシュアリティを生きる自己と他者関係の交錯した揺れ動き——ジェンダー・アイデンティティの問題なのか、セクシュアル・オリエンテーションの問題なのかと切り分けることのできないトランスジェンダーの揺れ動きを伝えている。

だが、このような揺れ動く「わたしたちのセクシュアリティ」は、「しっくりきている」、「楽に一緒にいられる」と語られるように、互いに肯定的に関わる契機ともなっている。その理由の一つは、瑞恵もパートナーも、出生時に割り当てられた性別からの揺らぎを生きるという点である種の「同じさ」を共有しており、「男役」-「女役」という規範的な異性愛の性役割という「差異」に基づいた抑圧関係とは別の関係性を生きているからだといえる（「二人の関係のなかでそういう役割をしなくていいからこそ、楽に一緒にいられるといってもいいだろう」）。つまり、瑞恵とパートナーは、自らのアイデンティティが揺らぎつつ、その揺らぎの「同じさ」を通じて、自己の外部で繋がるという「自己のアイデンティティが、自己の外部で不正確に複製される」関係性を生きているのだといえる。

この意味で、瑞恵が語る「わたしたちのセクシュアリティ」は、異性愛の性役割のような差異に基づいた権力、抑圧関係とは異なり、ある種の自己の動揺、瓦解を契機とした、「同じさ」という「ホモネス」の関係性——あるいは両者に「トランス」という側面を見出すのなら——「ホモエラティックス」の関係性だといえないだろうか。実際、瑞恵のパートナーの「セックスの場面」での「感覚やファンタジー」は、「レズビアン系」だと指摘されている (瑞恵, 2007, p.88)。すなわち、瑞恵とパートナーの肯定的な関係性は、ベルサーニの理論の観点から

解釈可能なのだ。

したがって、ベルサーニの理論、そして「ホモエラティックス」概念は、トランスジェンダーの肯定的な生を浮き彫りにしうるものであり、トランスジェンダーの観点に開かれたものなのである。

おわりに

ベルサーニのクィア理論の読解を通じて、彼の理論枠組みにシスジェンダー中心主義へと還元されないセクシュアリティの議論を見出し、同時に、その理論の射程となる彼の関係性論をトランスジェンダーが生きる関係性の構造から具体化した。それゆえ、先行研究の批判に反して、ベルサーニの理論は、トランスジェンダー研究の文脈にひらかれた可能性を有していると指摘できる。

最後に、ベルサーニのクィア理論をトランスジェンダー研究の文脈へと接続する意義を論じて本論を締めくくりたい。

第一の意義は、トランスジェンダーにおけるジェンダーとセクシュアリティの交錯を理論的に浮き彫りにすることである。というのも、ベルサーニが論じる「ホモネス」の観点においては、自己と他者が「類似している」こと（ある種のジェンダー・アイデンティティの問題）と、自己と他者が自身と「同じもの」を欲望すること（ある種のセクシュアル・オリエンテーションの問題）が不可分な仕方では論じられているからだ。彼の言葉を借りれば、「ホモネス」的な欲望において、「所有したいという欲望」——つまりセクシュアル・オリエンテーションの欲望と、「存在したいという欲望」——つまりジェンダー・アイデンティティの欲望の間の「境界はより曖昧になる」のだ（Bersani, 1995, p.63）。これは、近年のトランスジェンダー研究において指摘される、トランスジェンダーの経験におけるジェンダーとセクシュアリティの交錯という論点——ジェンダー・アイデンティティの問題なのか、それともセクシュアル・オリエンテーションの問題なのかという二項対立に疑問を投げかける論点（cf. Bettcher, 2014, Salamon, 2010, 佐川, 2023）を、クィア理論の観点から掘り下げることに繋がるだろう。

そして、なにより重要なのは、前節で証明したように、ベルサーニの関係性論からトランスジェンダーの経験を捉えるとき、トランスジェンダーの経験を、社会規範や差別構造との否定的な対比ではなく、彼ら、彼女らの肯定的な経験に基

づいて浮き彫りにすることが可能となることだ。確かに、現在の社会構造や法制度を鑑みたととき、トランスジェンダーがいかにシスジェンダー規範やトランス差別といった否定的な言説や眼差しから捉えられているかを論じることは極めて重要な問いである。しかし、他方でトランスジェンダーの人々は現にこの社会で生活をしており、他者や世界と肯定的に繋がっていてもいる。そうしたトランスジェンダーの肯定的な関係性を論じる一つの手がかりとして、権力関係や抑圧関係のような対立関係ではなく、「同じさ」を通じたある種の肯定的な関係性——トランスジェンダーの生／性の肯定的な現実を浮き彫りにしようとするベルサーニの関係性論が有効になるのではないだろうか。

こうした可能性を持つ彼の理論を解いてゆくことは、さらにトランスジェンダーの人々が自己の外部と肯定的に繋がる仕方を理論的に明らかにすることに繋がるだろう。この本論以降の課題を提起して本論を閉じたい。

謝辞

本論の執筆にあたって、徳山晶さんから貴重なアドバイスを頂いた。この場を借りて御礼申し上げる。

References

- Bersani, L. (1986). *The Freudian Body*, Columbia University Press.
- Bersani, L. (1995). *Homos*, Harvard University Press.
- Bersani, L. (2010). *Is the Rectum a Grave and Other Essays*, The University of Chicago Press.
- Bettcher, T. M. (2014). "When Selves Have Sex: What the Phenomenology of Trans Sexuality Can Teach About Sexual Orientation". *Journal of Homosexuality*, 61(5), 605-620.
- Casero, R, et al. (2006). "The Antisocial Thesis in Queer Theory", *PMLA*, 121(3), 819-828.
- Halberstam, J. (2008). "The Anti-Social Turn in Queer Studies", *Graduate Journal of Social Science*, 5(2), 140-156.
- Levinas, E. (1961=1971). *Totalité et infini*, Martinus Nijhoff, «Le Livre de Poche».
- Muñoz, J. E. (2009). *Cruising Utopia*. New York University Press.
- Salamon, G. (2010). *Assuming A Body*. Columbia University Press. (=ゲイル・サラモン [2019]. 『身体を引き受ける』藤高和輝訳. 以文社).
- Stryker, S. (2004). "Transgender Studies: Queer Theory's Evil Twin", *GLQ*, 10(2), 212-215.
- Tuhkanen, M. (2014). *Leo Bersani*. State University of New York Press.
- Tukanen, M. (2020). *Leo Bersani*, BLOOMSBURY ACADEMIC.
- Wittig, M. (1992). *The Straight Mind and Other Essays*. Beacon Press.
- 井芹真紀子. (2013). 「クィア・ネガティヴィティと強制的な健常的身体」, 『論叢クィア』, 6, 37-57.
- メアリー・ホークスワース. (2019=2022). 『ジェンダーと政治理論』明石書店.
- 村山敏勝. (2005=2022). 『(見えない)欲望へ向けて』ちくま学芸文庫.
- 長尾優希. (2023). 「ベルサーニの暴力的ケア/サエボーグの横滑りする身体」, 『ジェンダー & セクシュアリティ』, 18, 51-75.
- 瑞恵. (2007). 「関係が変える私の性」ROS編. 『トランスがわかりません!!』アットワークス, 82-88.
- 佐川魅恵. (2023). 「『性的な存在』の関係論的形成：恋愛／性愛における違和の経験に着目して」, 『ジェンダー & セクシュアリティ』, 18, 27-50.
- ジークムント・フロイト. (1905 = 2009). 「性理論のための三篇」, 渡邊俊之・越智和弘・草野シュワルツ美穂子・道簾泰三訳『フロイト全集6』岩波書店, 164-310.

Abstract

Transcending Bersani: The Possibility of Transreading in Bersani's Queer Theory

Asahi KONUTA

This paper aims to articulate a transgender standpoint within the queer theory of Leo Bersani. Although some theorists have criticized Bersani's queer theory for centering cisgender gay men, some implications of his theories may extend to transgender issues.

In the first section of the paper, I offer a transgender reading of Bersani's interpretations of Freudian sexual theory in *Freudian Body*. This reading shows that Bersani's sexual theory includes structures of sexuality that transgender people may experience.

In the second section of the paper, I deal with Bersani's theory of relationality, which he calls "homoness". In *Homos*, he tries to discuss how people can connect without oppressing one another. To that end, he shows the value of relations of sameness, in opposition to the otherness of heterosexual relationality. Although Bersani sees homosexual relationality, or "homoness", as the realization of these relations of sameness, he extends this beyond homosexual relationality, and it is therefore possible to apply it to transgender relationality.

In the third section of the paper, I embody Bersani's theory of homoness through Gayle Salamon's theory of transgender relationality, "homoerratics". *Homoerratics* describes a kind of transgender homoeroticism, and is therefore pertinent to the realization of homoness.

In the final section of the paper, through analyzing the narrative of transgender person, I demonstrate that Bersani's theory, which has been highlighted in this paper, can theoretically capture the structure of positive relationality among transgender people. And from this point, I point out the significance of applying his theory to transgender studies.

Keywords:

Leo Bersani, queer theory, transgender studies, homoness, homoerotics

Research Paper

Women-Only Carriages: How Sites of “Protection” Construct Gender¹

Koki OGAWA

Abstract

Current East Asian studies literature and Japanese public discourse addressing women-only carriages, hereon referred to as WOCs, primarily problematize the inefficacy of WOCs in promoting the safety of female passengers. Yet there presently exists little inquiry into the mechanisms by which WOCs spatially construct and constrain feminine identity. Instead, East Asian studies literature generally assumes feminine identity in public spaces as constituted by victimhood, treating the institutionalization of minoritized women as a predicate rather than anterior. One might then turn to feminist research on how spatial arrangements construct gender. The subject of this literature has been confined to primary spaces such as the dwelling or workplace. Yet WOCs occupy the interstice between these spaces; they do not function in precisely the same way. In other words, the construction and subsequent constraint of feminine identity in WOCs are not fully explicable by current East Asian studies or feminist research.

Instead, this paper draws on gender studies literature on public restrooms to explain the normative social understanding that is fundamental to the “protection” constructed. Through analyzing online posts documenting the lived experiences of women in these spaces and a collection of videos documenting the forced integration of WOCs—termed anti-cooperative ridings—I examine how gendered spatial construction encodes female identity

¹ This paper deals with sexual assault which some readers may find distressing. この論文では性暴力被害の詳細が記載されています。ご注意ください。

into WOCs.

Despite railway companies purporting that WOCs serve the interests of women, their implementation centers around the convenience of “other” passengers. Their concern for the convenience of other passengers during the WOC trial period attests to this. Yet if WOCs spatially center women, what is implied in “other passengers” is maleness. Securing women’s “safety” occurs inasmuch as it converges with male interest. What is more, I find that simply by way of their physical construction WOCs place the onus of redressal on women, causing women’s ability to receive protection to be contingent on their encoding as subjects warranting protection. Belongingness in that space hinges on performing according to the rigid contours of what the train carriage has encoded as feminine. The framing that women must actively vie for their own protection—as opposed to groping being framed as a societal issue—allows the absence of actively seeking protection to be conflated with inviting assault. This paper complicates the current discourse by scrutinizing how feminine identity becomes interlocked with victimhood in these spaces, calling for further scholarly inquiry into the social mechanisms underlying the functionality of WOCs that reify, constrain, and institutionalize the female subject.

Keywords:

gendered space, women-only carriages, gender construction, normative protection, public transportation

「満員電車で体を触られ、恐怖で動けなくなりました。

『なぜその車両に乗ったのか』 いまでも自分を責めてしまうんです。

『そんな必要はない』 とこれまで被害者に言い続けてきたはずなのに…」

— 青木千恵子

“I was groped, and I couldn’t move. I was paralyzed with fear.

To this day I blame “myself: ‘Why did I get on that carriage?’

Even though I've told countless victims that 'There's no need to...'"

— Chieko Aoki

Chieko Aoki is a lawyer, and she is also a woman (Japan Broadcasting Corporation, 2022). On October 6 of 2019, she was a woman in an *integrated* carriage—not a women-only carriage. It was there that she was groped by multiple men before confronting one of them, only to be violently thrown down a flight of stairs at the next station. In 2001, women-only carriages, hereon referred to as WOCs, were introduced and gradually spread across all major railways in Japan (Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism [MLIT], 2003a). These carriages socially, not legally, construct a space that male-identifying passengers are barred from entering (Osaka Metro, “Are Women-only Carriages Discriminatory,” n.d.), and are advertised as spaces that protect women (Japan Private Railway Association, n.d.). Yet without WOCs, Aoki’s question, “Why was I riding on *that* carriage?” becomes unintelligible. The WOC became the tangible object through which Aoki rationalized—and continues to rationalize—self-blame.

Aoki herself maintains she should have known better. A practicing lawyer who had advised countless sex-crime victims *should*, she reasons, have known better. Yet she continued rationalizing the irrational. Aoki’s experience is by no means novel. A study conducted in 2018 by #WeToo Japan found that 70% of women have experienced some kind of harassment on either the train or street with almost 48% reporting that they have been touched inappropriately—of which 50% reported they could not retaliate (Buzzfeed Japan, 2019).² It is a statistic that becomes even more glaring in light of the fact that in 2018 there was a cumulative total of over 18.7 billion commutes, of which over 11 billion were made by regular-basis commuters (MLIT, 2023). A 2017 census further found the average commute among regular-basis commuters in the Greater

² The original findings posted on #WeToo Japan’s website were inaccessible due to the website being inactive, given #WeToo Japan is largely funded through donations.

Tokyo area to be over 67 minutes per day (MLIT, 2018, p. 34). The temporal significance that the train occupies in day-to-day activities cannot be ignored. Where Aoki diverges, however, is her experience and positionality as a lawyer who had been advising the very victims whose unenviable ranks she had joined. How did a space simply by way of its existence deconstruct Aoki from lawyer to victim? How did it assemble and then rationalize such an irrational logic, that she was to blame?

East Asian studies and Japanese discourse would situate Aoki's experience as yet another instance of the existing scholarship on the inefficacy of WOCs (Horii & Burgess, 2012, pp. 41-55; Shibata, 2020a, pp. 293-305; Shibata, 2020b, pp. 160-175). Public discourse in Japan often problematizes whether WOCs enhance safety and whether these spaces discriminate against men (Saito & Takeda, 2019; The Sankei News, 2017, "男性専用男女から賛意 [Men and Women Express Support for 'Men-Only Carriages']" section). In both cases, WOCs are treated as a transit *policy* rather than a *space* that constructs gender.

What feminist scholars like Daphne Spain (2000) have termed "gendered space"—the inquiry into how spatial arrangements influence the construction of gender (p. 3)—has so far been limited in East Asian studies and Japanese public discourse at large. Feminist scholars outside of East Asian studies, however, have studied how we interact with the physical arrangements of the world around us—scholars known as feminist geographers (McDowell, 1993; Valentine, 1989; Valentine, 1993).³ They have traced how we experience space and have demonstrated how space is both constituted by and constitutes social relations (Massey, 1994; Massey, 2005; Valentine, 1993). This literature is interscalar in its inquiry, studying immigration (Silvey, 2004; Staeheli et al., 2004),⁴ to dwellings (Spain, 2000), down to the female body (Kato & Sleeboom-Faulkner, 2012). More recently feminist geographers have documented how

³ For an early review of feminist geography and the different schools of theoretical thought that occupy it see McDowell (1993).

⁴ For a review of feminist migration studies see Silvey (2004).

women in Japan negotiate and experience space (Kato & Sleeboom-Faulkner, 2012; Nakano & Ronald, 2012; Steger, 2013).⁵ This paper builds on this literature while extending spacial construction and gender as a subject to be studied further in Japanese public spaces.

This paper, therefore, both complicates the mainstream narratives that hyper-fixate on the efficacy of WOCs as a policy and introduces spacial configurations as a framework to analyze the co-constitution of public space and gender relations. The paper examines Aoki's experience through three online blog posts documenting the lived experiences of women in transit, as well as a video documenting the interactions of an anti-WOC group that forcefully integrated a WOC. It begins by tracing the lineage of WOCs, then discusses the frameworks that currently exist in scholarly discourse of gendered and public spaces, synthesizing the work of largely disparate scholarly disciplines to construct a new apparatus from which WOCs can be fully analyzed. Dissecting how WOCs as a gendered space "...[reproduce] gender differences in power and privilege" (Spain, 2000, p. 233), this paper makes explicit the covert mechanisms by which WOCs disempower and simultaneously reconstruct the female subject.

A Look Backward: Constructing the "Victim"

「周りの人々は、性暴力を無視できても、被害にあっている女性はその苦しさから目をそむけることができません。その意味では、被害者を孤立させ“見て見ぬふり”をした周囲も（駅員も含めて）加害者だと言えるのではないのでしょうか。」

— 性暴力を許さない女の会一同

"Bystanders can ignore sexual violence, but the violated woman is incapable of ignoring her own pain. In this sense, are not those who isolate women by 'turning a blind eye' (including station personnel) also

⁵ For a review on gender and geography in Japan see Yoshida (2019).

perpetrators?"

— Women Against Sexual Violence

One of the earliest mobilizations of Japanese feminists concerning transportation can be traced back to this letter written by Women Against Sexual Violence, addressed to the Japanese Bureau of Transportation and several Kansai railway companies (Women Against Sexual Violence, n.d.). Founded in 1988 by virtue of these letters—predating the WOC by over a decade—Women Against Sexual Violence was mobilized in response to the *Midosuji* Incident. The *Midosuji* Incident concerned a female passenger who confronted two men groping another woman on the *Midosuji* train line, only to be forced off the train by the two men who then paraded her around downtown Osaka while making extremely descriptive threats, eventually taking her to a cafe then back onto the train and finally to an abandoned construction site where they beat and raped her (Women Against Sexual Violence, 1990 as cited in Yamamoto, 2017). While the woman—herself having been groped a few weeks prior—acted in the faith that if she spoke up others around her would also defend the woman being assaulted, she was instead met with indifference and fear from bystanders in the train carriages, at the cafe, and on the street. When asked by the police why she did not simply ask for help, she replied, “I thought, if I ask again and no one responds then I don’t know what they’re going to do to me” (Women Against Sexual Violence, 1990 as cited in Yamamoto, 2017). As Women Against Sexual Violence writes, her fellow passengers in the train, the customers in the cafe, passersby, and the station master were complicit in their choice not to intervene. The letter goes on to declare that the object of transportation safety should not be to “not to create victims” but instead to “not create perpetrators,” making several policy demands (Women Against Sexual Violence, 1988 as cited in Yamamoto, 2017). In none of these demands appear the words “women-only carriage.”

The few railway companies that did respond to the letters remarked, “In an effort to limit gender-targetted language in our campaigns, we ask

customers to ‘refrain from bothersome behaviors’ more generally” (Women Against Sexual Violence, n.d.). Concerns with acknowledging gender continued as the Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism began implementing WOCs on a trial basis just over a decade later (MLIT, 2003a). During this period, the Ministry was particularly concerned with whether WOCs would be a nuisance to the average commuter and disrupt day-to-day operations (MLIT, 2003b). Indeed, the Ministry’s report specifically notes that many railway companies were apprehensive about introducing WOCs due to concerns regarding the crowding of integrated carriages, disrupted train schedules, and the lengthening of travel time. The Ministry and railway companies at large, were operating by the logic that the safety of women passengers was a subordinate priority to the convenience of the other—implicitly male—passengers. They isolated the female “victim” and physically removed her, and by extension the issue of sexual assault, from public sight. In essence, the construction of WOCs is in direct contradiction to the demands made by Women Against Sexual Violence; WOCs center the “victims”—not the “perpetrators”—as subjects to be redressed. WOCs were fundamentally a policy created *by* men, *for* men.

Today, the lineage of the latter half of this claim—that the WOC is a policy *for* men—is allegorized in how the Osaka Metro System publicizes WOCs, advertising that the carriage’s physical location is intentionally positioned to have “relatively little impact” on the safety and transfers made by other passengers (Osaka Metro, “How Did You Decide,” n.d.). Implicit in the phrase “other passengers” is maleness. If WOCs are constructed to “protect women” as the Osaka Metro System states (Osaka Metro, “Are Women-only Carriages Discriminatory,” n.d.), then the otherness that is constructed by extension is the contrapositive of that gender binary: maleness. Borrowing from Derrick Bell’s (1980) interest convergence—that Black racial equality is only achieved when it converges with white interests (p. 523)—we see that the protection of women is only achieved insofar as it converges with the interest of male

commuters. The convenience of the male commuter is paramount to the safety of the female commuter.

Gender Configuration in *Transited* Spaces

The intersection between spaces of public transportation—what this paper terms *transited* space—and gender has been problematized by urban planning scholars, with significant emphasis on how perceptions of safety might be tied to masculine and feminine identity. Most often this literature finds that the feminine is characterized by an abundance of fear that perceives the public space to be more dangerous than it actually is (Valentine, 1989, pp. 385-386; Yavuz & Welch, 2010, p. 2508). Masculinity, on the other hand, is found to be constituted by this female vulnerability in public space (Day, 2001, p. 123; Valentine, 1989, pp. 388-389). The natural implication of this body of work, then, is that it problematizes the discrepancy between the *actual* degree of public safety and women's perceptions of safety—and by extension makes the claim that urban planning should focus on mitigating this discrepancy (Roy et al., 2022, p. 17; Yavuz & Welch, 2010, p. 2508). Yet this literature makes little inquiry into *why* this discrepancy exists, even failing to evaluate this discrepancy outside the heteronormative gender framework.

We might, then, turn to feminist research on how spatial arrangements influence gender, what Daphne Spain (2000) terms gendered space (p. 3). This literature has largely established that certain spaces both reproduce and construct societal understandings of gender (Massey, 1994, p. 345; Massey, 2005; Spain, 2000, p. 234; Valentine, 1993). These issues have further been complicated by scholars, like Dolores Hayden (2022), who have problematized the privatization of spaces encoded as female—the detachment of the feminine domicile, such as the kitchen or nursery, from the community (p. 174)—by arguing that the privatization of space causes the work in those spaces to be fulfilled individually (p. 176). This, Hayden contends, leads to the perception that women's issues within these spaces ought to be resolved privately, as

opposed to communally. In other words, the physical detachment of the space frames the way we conceptualize women's problems and their modes of redressal. The literature derives these conclusions from spaces such as dwellings and the workplace (Hayden, 2022, p. 174; Massey, 1994, p. 234; Spain, 2000, p. 243). Yet these gendered spaces do not function in precisely the same ways as *publicly* gendered spaces. For instance, if we attempt to apply to WOCs Spain's (2000) conclusion that spatial segregation limits women's access to socially valued knowledge (p. 233), it is unclear whether or even *what* socially valued knowledge the WOC limits women's access to. Spain's conclusion only makes sense in the context of primary spaces like the workplace where socially-valued experiential knowledge of a trade, for instance, is developed and exchanged. The train carriage, however, is not a primary site in which knowledge of a trade or skill is exercised or exchanged in the same way that knowledge exchange occurs in dwellings and workplaces. Rather, WOCs lie in between those architectures; they occupy the interstices between primary spaces and thus are, at least partially, inexplicable by current feminist geographers.

Gender studies literature on gender-segregated public bathrooms then, insofar as public bathrooms are neither privatized nor "primary" in the way that dwellings or workplaces are, might prove useful in refining a framework that describes the underlying spatial mechanisms by which WOCs interact with gender identity. While public bathrooms are legally bound in their gender segregation, as opposed to socially bound as is the case with WOCs, there nevertheless exist social barriers, beyond the physical barriers of a stall, that are erected between a stall's occupants and those outside of it (Cahill et al., 1985, p. 36). For instance, Cahill et al. found that people who accidentally entered an occupied stall would often apologize, reaffirming the occupants' social claim to the stall, beyond the physical claim of locking a door. This phenomenon, termed normative protection, is presented in this literature as a dualistic relationship established between the protected and the bystander that

is reinforced by both parties (Cahill et al., 1985). In praxis, however, normative protection places a greater burden on the protected individual to initiate that protection by necessitating some affirmative act—locking a bathroom door—on their part. In trains too, an affirmative act—stepping into the WOC—is a prerequisite for women to access its spacial protections. In this respect, the way that normative protection functions in a bathroom stall might be similar to how it functions in WOCs.

Furthermore, interest convergence similarly seems to pervade the lineage of gender-segregated public bathrooms. Much of the scholarly work, in some form, situates the emergence of gender-segregated public bathrooms in the context of male interests. In the expansion of the physical space afforded to women's public bathrooms, legislation was often spearheaded by men who were simply tired of waiting for their female counterparts (Plaskow, 2008, p. 55). The extension of workplace bathrooms to women, and the segregatory legislation that enabled the said extension, emerged from resentment towards working women (Kogan, 2007, p. 12). Similar to how railway companies prioritized the convenience of "other" passengers in implementing WOCs (MLIT, 2003b), female-centered progress in access to bathrooms only occurred with the caveat that there be some kind of material benefit for their male counterparts.⁶

When put into conversation with one another, these disparate scholarly fields appear to signal that perceptions of gender are shaped by how WOCs

⁶ Here, I do not mean to ignore the experiences of transpersons and genderqueer persons. Scholars have studied how transpersons and genderqueer persons negotiate bathroom stalls in the workplace (Connell, 2011) and public space (Herman, 2013), problematized the tension between emerging public bathroom laws and social norms (Davis, A. K., 2020; Platt & Milam, 2018), and theorized the tensions that emerge within transgender politics (Roan, 2002). They have also looked at how binary constructions of gender are reasserted upon transpersons, masculine-appearing ciswomen, and feminine-appearing cismen in public bathrooms (Davis, F. G., 2017; Mathers, 2017). While studying how transpersons experience WOCs fall outside the scope of this paper, inquiry into people's experiences of WOCs outside the heteronormative framework is nonetheless a topic that should be studied further.

as a segregated space rely on social norms and understandings. Synthesizing scholarly conversations on urban planning, geography, and public bathrooms then, might reveal how gendered spatial construction encodes female identity into WOCs and what *kind* of female identity is being constructed.

Yet both current East Asian studies literature and Japanese public discourse addressing WOCs often neglect the mechanisms by which women are constructed as victims, and instead focus more broadly on the efficacy of WOCs (Horii & Burgess, 2012; Shibata, 2020a, pp. 293-305; Shibata, 2020b, pp. 160-175). Women who ride in integrated spaces—like Aoki—are valorized for pioneering the desegregation of gendered spaces (Horii & Burgess, 2012, p. 53; The Sankei News, 2017, “男性専用男女から賛意 [Men and Women Express Support for ‘Men-Only Carriages’]” section). In other words, this discourse conveniently ignores the temporal *before* and instead fixates on the *after*, and in so doing, treats the institutionalization of women as victims as a predicate rather than anterior. In ignoring how women have spatially become labeled as victims, scholarly discourse in East Asian studies and public discourse in Japan cannot sufficiently address how WOCs affect women’s internalized perception of themselves as dangerously vulnerable and the accompanying external perception of them as victims.

Women as the Arbiters of their *Own* Protection

「たまに寝坊して通常の車両に乗ってしまうと焦る。『女性専用車両に乗らないということは、触っても気にしないのか』と勘違いする男性がたまにいるからだ。」
— ブロガー @moonshiney

“I sometimes panic if I oversleep and have to ride on the integrated carriage.

I panic because there are men who mistakenly think, ‘She’s not on the women-only carriage so she won’t care if I touch her.’”

— Online Blogger @moonshiney

Normative protection in WOCs is established between the women occupying the WOC and the male-identifying passengers that occupy the integrated carriage. Yet WOCs and public bathrooms diverge in that while in gender-segregated public bathrooms normative protection occurs between the “same” gender, in WOCs, it functions between two heteronormative genders. In other words, in WOCs normative protection is being established between two social groups *already* viewed as unequal beyond the confines of the train. This skew is compounded by the fact that normative protection necessitates an affirmative act from the recipient; in this case, not the locking of a bathroom door, but stepping into the WOC. Normative protection only functions insofar as the female subject occupies the gendered space and the male subject respects that physical boundary.

Yet the disproportionate burdening of women for the sake of their safety occurs even before a woman sets foot on a train. @moonshiney (2021), an online blogger and female commuter, confesses that she becomes anxious if she oversleeps and cannot make it to the WOC (“職场上司の発言 [My Boss’s Remark]” section). Her anxiety stems from the physical inaccessibility of the carriage, an inaccessibility that is the result of railroad companies’ concern with the well-being and convenience of their “other” customers when implementing WOCs (MLIT, 2003a; Osaka Metro, “How Did You Decide,” n.d.). If the “other” is prioritized, then the implication is that women’s needs become secondary. Simply by way of their physical construction WOCs are burdensome to the people that they purport to protect (Japan Private Railway Association, n.d.).

To this, some may argue that because WOCs create a space where women are specifically centered—in ways that other identities are not—it justifies some sort of burden on the women’s part (The Sankei News, 2017, “男性専用は男女から賛意 [Men and Women Express Support for ‘Men-Only Carriages’]” section). It is important to note here that the “centering” of the female subject does not function in the same empowering ways that “centering” might function in an affinity group; riding in the WOC is not an agential choice by

any means. It is not a choice for women like Aoki who suffers from PTSD (Japan Broadcasting Corporation, 2022) or for women like @moonshiney who gets anxious if she oversleeps and cannot make it to the WOC (moonshiney, 2021, “職場上司の発言 [My Boss’s Remark]” section); it is a mode of survival.

If the foregrounding of the victimized female subject is the issue then, might the integration of WOCs resolve the burdening of women by getting rid of normative protection? While this might be the expectation for some, women continue to be placed in the position of being the arbiters of their protection even among activist movements—namely the so-called “anti-cooperative ridings” of the Anti-WOC Organization—that attempt to desegregate WOCs. During many of these interactions, men participating in the “anti-cooperative riding” will raise their voices against women who actively tell them that they are in a WOC, the men asking them to justify why they need a WOC and reminding these women that WOC are not legal policy but one that functions simply on the basis of normative protection (Anti-Cooperative Riding Channel, 2018). The forceful integration is further problematized when we turn to the experiences of women who ride on integrated carriages. @moonshiney feels anxious riding the integrated carriage for fear of men who will misconstrue her presence in an integrated space as an invitation to violate her (moonshiney, 2021, “職場上司の発言 [My Boss’s Remark]” section). She recalls, “I was so happy when WOCs were introduced. It meant I wouldn’t have to feel stressed in the mornings” (para. 2). Beyond the sentiments of this commuter, however, what is perhaps most disturbing is her male superior’s perception of women in integrated spaces. He appears overjoyed as he remarks, “A high school girl was pushed up against me for *free* this morning.” In establishing normative protection within WOCs *exclusively*, women are constructed as “assaultable” subjects outside WOCs. The absence of actively seeking protection is conflated as a woman inviting assault. In short, by this account, the WOC functions as an apparatus through which the sexualization of women in integrated spaces is justified.

Gender Construction

「すみません、女性です。」 — Aju

“I’m sorry, I’m a woman.” — Aju

When the female subject is constructed based on the exclusion of individuals that “fail to conform to unspoken normative requirements,” the construction of the subject itself becomes “coercive and regulatory” (Butler, 1999, p. 9). So, too, in WOCs does belongingness hinge on outwardly feminine performativity. This is encapsulated in Aju’s (2023) experience as a woman often mistaken for a man (para. 1-2):

I always feel anxious when I ride the women-only carriage. I’m anxious because I’m often mistaken for a man and asked to go to the other carriage. My hair is short and my shoulders, broad from swimming. I wear a hoodie and pants; my shoes are sneakers. I often carry a black knapsack when I go out (para. 1-2).

Yet Aju (2023) never corrects the behavior of the women who confront her beyond apologizing: “Sorry, I’m a woman” (para. 6). She explains, “If I get mad at someone who had the courage to confront me, they might decide not to confront the next man that occupies a WOC. It would reduce the number of people protected” (Aju, 2023, para. 10). Here, it is not an individual responsibility to establish normative protection that is felt, but a *collective* one; Aju’s own advocacy for *her* gender expression is superseded by the need to protect the women she shares the space with. In other words, the *collective* responsibility necessitated by normative protection to maintain a social partition between men and women commuters marginalizes women who fall beyond the rigid contours of femininity constructed by WOCs.

Aju’s interactions illustrate that an individual’s “worthiness” of receiving normative protection is entirely contingent on conforming to a particular set of feminine expressions. It was because Aju was not performing according to

what the WOC had encoded as being “female” that her belonging in the space, and by extension whether or not she *deserved* to be protected, was questioned. This revelation, however, becomes even more problematic when scrutinizing the *type* of female subject that is institutionalized by WOCs. To the extent that the advertised intent of WOC is to protect women (Japan Private Railway Association, n.d.), the female subject being institutionalized is constituted by victimhood. Women’s ability to *receive* protection is contingent on their encoding as subjects *warranting* protection.

Here, one might argue that any policy that is designed to be equitable inherently requires the recipient of that equity to be encoded as marginalized; that an administration of equity fundamentally requires acknowledging a particular group as marginalized. Yet WOCs are distinguished from more general equity policies in that they require a public display of marginalization. Identifying as a woman is not enough; you must perform as what the space has encoded as “woman.” Moreover, because WOC as a space only functions insofar as women perform, for the physical boundary to exist it requires women to constantly critique each other’s performances—or more simply put, appearances. To maintain a “women-only” space filled with strangers means making impulsive judgments based on the masculine or feminine performances of individuals. In short, the space encodes a gender identity that is constituted by victimhood and then relies on women to check and maintain one another’s conformity to that identity.

Online blogger Sakura (2018) in describing her experience in the WOC notes, “If I ride in the WOC, I’m told I’m overly self-conscious; if I ride in the integrated carriage, I’m told I’m in the way” (para. 8). While the direct translation of the term she uses, *jishikikajou*, is overly self-conscious, it carries connotations of egocentrism in Japanese (Weblio, n.d.). What is being implied, therefore, is that women who use WOCs are perceived as viewing themselves as “assaultable” subjects—attractive to male audiences. Sakura (2018) continues, “[WOC] were supposed to protect me, but they don’t at all” (para.

10). For WOCs to be maintained, these spaces require conforming to a particular gender performance, which in turn defines both Aju's self-expression and Sakura's self-perception. The WOC is constituted by the female "victim" but simultaneously overwrites the identities of women who occupy its boundaries as "assaultable." In short, space and gender are co-constitutive (Massey, 2005).

The Gender Aftermath

The logic that women ought to secure their own safety can be traced back to the excuses Women Against Sexual Violence received in response to their letter, that railway companies did not want to explicitly address gender (Women Against Sexual Violence, n.d.). In the year that followed, the Osaka Police and Kansai Railway Organization would create posters with the message, "If you are groped, be courageous and speak up" (Women Against Sexual Violence, n.d.). Such messages unashamedly embody the very victim-focused approach that Women Against Sexual Violence (1988) explicitly advocated against (as cited in Yamamoto, 2017). The notion that women ought to be the arbiters of their own protection, that they must be their own redressers, was woven into the fabric of Japanese trains over a decade before WOCs were introduced. The promulgation of WOCs was merely an institutionalization of the legacy that predated them. The onus to redress and safeguard one's security within transited space has always been placed on these women. It is the woman on the *Midosuji* Line who was punished for confronting the two men groping another woman (Women Against Sexual Violence, 1990 as cited in Yamamoto, 2017). It is @moonshiney (2021) who, before WOCs, was groped repeatedly by the same man every morning for twenty minutes, eventually having to ride on a different train at a different time to get to work ("痴漢する奴はしつこい [The Persistence of Groppers]" section); who must ensure she does not oversleep so that she makes it on the WOC; and who has to worry about whether her presence in an integrated carriage might be

misconstrued as an invitation to be assaulted (“職場上司の発言 [My Boss’s Remark]” section). It is the women who occupy the WOCs who have to defend their space against anti-cooperative riders (Anti-Cooperative Riding Channel, 2018). It is Aju (2023) who has to apologize for not conforming to what the WOC has encoded as “woman,” so that the safety of other women continues to be actively safeguarded (para. 6). It is Aoki who continues to rationalize self-blame because she failed to board a WOC (Japan Broadcasting Corporation, 2022).

Even before WOCs were introduced, assault in transited spaces has been framed as an issue whose solution lies with the redressal of women, and women *exclusively*. WOCs, by operationalizing normative protection, simply made this reality more covert by leveraging the fact that normative protection hinges on the involvement and cooperation of two parties. In other words, the fact that men are socially compelled to respect the boundaries of the WOC placates accusations of inaction. In as much as normative protection relies on all parties that occupy the train, the WOC pretends to treat groping as a societal issue, despite its still placing a greater burden on women to establish and maintain that protection.

Today, this lineage continues. The projection of responsibility onto women can be seen in the public discourse surrounding the #GropingFestival trending in Japan (Nichi-tele News, 2023). The hashtag was created in reference to the fact that because students cannot be late to the national college admissions test, they—particularly female students—often do not report being groped for fear of missing their exam. Yet rather than address the issue through reform at the institutional level such as allowing students to delay or make up the exam, online discourse centered around preventative measures that female students should be actively taking themselves. Online forums were of the popular opinion that girls avoid wearing their often-fetishized school uniforms and instead wear unalluring “sweatpants” (sumisumico, 2022), while news segments highlighted what women should do to prevent assault (Nichi-tele

News, 2023). The focus on women as opposed to institutions as the subject of redressal, however, should not come as a surprise; normative protection in WOCs had already operationalized the precedent of a women-centered discourse. What could otherwise be dealt with at the institutional level was then altered to frame women, exclusively, as needing to be active in establishing their protection. Any progress that has been made on the institutional front has thus far been limited. It was only in March of 2023 that the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2023) requested that public schools excuse students who file a police report and are subsequently tardy (pp. 5-6). In this way, the spacially encoded relationship between safety and gendered responsibilities inside the WOC is reproduced in public discourse that focuses on preventative measures that women can take. WOCs reproduce gender configurations (Spain, 2000, p. 6) outside the WOC by becoming logical precedent to frame *societal* issues as exclusively *women's* issues.

Yet, as we have seen, current scholarly discourse on urban planning and gendered perceptions of safety are predicated on the assumption that women are inherently more vulnerable—or are perceived as more vulnerable—than men (Valentine, 1989, pp. 385-386; Yavuz & Welch, 2010, p. 2508). Their analysis often departs from the presupposition that society is neatly bifurcated into women and men, and that these categorizations influence how we experience safety in public spaces. It hyper-fixates on the gender aftermath without considering how women's perception of heightened vulnerability and neat categorizations of a binary gender in public spaces are constructed (Roy et al., 2022, p.17; Yvuz & Welch, 2010, p. 2508). Synthesizing the frameworks applied by scholars studying gendered space and gender-segregated bathrooms, then, extends existing urban planning literature to consider the *before* of how public spaces construct gender, not simply the *after*. It is in scrutinizing how identity becomes constituted by victimhood in public spaces that historical continuities—for instance, that victim-focused methods of redressal predate

the WOC—emerge, thus compelling us not to relinquish our concept of redressal to the assumptions of urban studies literature.

A Path Forward

In tracing the legacy of WOCs, it becomes clear they frame groping as a women’s issue rather than a societal issue, burdening them with the redressal of an issue that extends well beyond trains. Revisiting Aoki’s experience, her failure to establish normative protection—that is, actively stepping into a space where it is maintained—is fundamental to her rationalization of self-blame: “Why did I ride on *that* train carriage?” The gender expectation inside the space—that women take initiative to step into WOCs and be the arbiters of their own protection—extended outside WOCs. In other words, the gendered expectations inside WOCs are spatially reproduced outside of the train carriage to function as a tool used by society to blame the victim.

In employing normative protection, WOCs task women with the maintenance of their own protection, placing that onus on women *exclusively*, thereby framing groping as an issue women ought to deal with privately. Because WOCs occupy an interstice between dwelling and workplace, one cannot expect to fully redress gender configuration within dwellings and workplaces without addressing the spaces women occupy in between those architectures. One cannot expect to address workplace equity if women like @moonshiney (2021) feel anxious about their modes of transportation to work (“職場上司の発言 [My Boss’s Remark]” section). One cannot expect to address gender equity in higher education if female students are regularly targeted on their way to their college admissions exams (Nichi-tele News, 2023). One cannot expect to address equal pay if women like Aoki have to quit their jobs because of chronic and debilitating PTSD (Japan Broadcasting Corporation, 2022). It is thus imperative that feminist geography be extended to encompass Japanese transited spaces as well.

Today, there is movement to have WOCs become a “multipurpose

carriage” in which marginalized identities such as same-sex couples and members of the LGBT community can occupy as a “safe space” (Omori, 2021, para. 1). Yet to include other marginalized groups into WOCs without reevaluating the type of expectations and gender configurations that constitute the WOC and are then reproduced outside of the WOC would be tantamount to replicating the above subjugation of women among other marginalized identities. Moreover, as we have seen through the accounts of online bloggers, WOCs serve as respite from an environment where women would otherwise have to endure the continuity of changing trains until their next assault.

Throughout this paper, I have intentionally avoided subscribing to the binarism that the current discourse evaluating WOCs as a *policy* rather than a gendered space constructs; to be for or against WOCs? This discourse is simplistic, and ignores the spacial mechanisms at play. Women like Aoki who suffer from chronic PTSD depend on these spaces to feel safe (Japan Broadcasting Corporation, 2022), even if that safety is burdensome, constraining, and essentializing. In buying into a discourse that focuses on the efficacy of WOCs, I merely reproduce a hyper-fixation that overlooks the complexity of the lived experiences of women like Aoki. The question of whether one is for or against WOCs subverts the notion that there might be a solution outside normative protection. In this sense, this paper does not provide an answer.

Yet what I have sought to and hopefully succeeded in providing is a path forward. The debate around WOCs as a policy is not as black-and-white as East Asian scholarship frames it to be. In engaging feminist geographers and urban planning scholars this paper has revealed the way the WOC interacts with gender. First, WOC are constituted by assumptions of inherent female vulnerability in public spaces. Second, because this space is maintained by evaluating gender performances, to gain spacial belongingness women have to conform to the feminine identity encoded by the space. These performances are a reproduction of encoded gender. Finally, the identities of its occupants

WOCs are overwritten as “assaultable” subjects because the space is constituted by female vulnerability. It is significant, now more than ever, that East Asian studies scholars—and particularly scholars in Japan—who write about WOCs are put in conversation with feminist geographers to make explicit the ways in which gender and space interact with one another to construct and then reproduce gender.

In demonstrating the way the WOC’s physical arrangement interacts with gender, my hope is that we recognize the self-defeating nature of a discourse whose only objective seems to be determining whether WOCs are effective or not. Shifting mainstream discourse to look at WOCs as a *gendered space* allows us to at least begin to recognize that the woman commuter should not exclusively be tasked with her own redressal.

Acknowledgements

I would like to thank Professor Alexander K. Davis who has tirelessly supported me throughout every iteration of this paper, encouraged me to zealously pursue my academic passions, and helped me discover my academic voice at Princeton. Without him, this paper would not have been possible.

To Ms. Yuko Yukawa for her continued support of my academic endeavors. To my peers and friends, Marina Ninomiya, Tomoka Matsushima, Navani Rachumallu, Carson He, and Elie Belkin for their valuable support and feedback. To my parents, Sarah Ann Wittenbrink and Yukimi Ogawa for their continued support in my education.

References

- Aju. (2023, February 15). 日記女性専用車両 ["Diary": Women-Only Carriages] 日記. <https://artist-aju.com/2023/02/15/seiginooobacyan/>
- Anti-Cooperative Riding Channel. (2018, May 18). 千代田線遅延の真相〈女性専用車 任意確認乗車〉 [The Truth Behind the Chiyoda Line Delay <Women-Only Carriage Anti-Cooperative Riding>] [Video]. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=tjsJjH7z7Xs>
- Bell, D. A. (1980). Brown v. Board of Education and the Interest Convergence Dilemma. *Harvard Law Review*, 93(3), 518–533. <https://doi.org/10.2307/1340546>
- Butler, J. (1999). *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge.
- Buzzfeed Japan. (2019, January 21). 女性の7割が電車や道路でハラスメントを経験。「実態調査」でわかったこと [70% of Women Experience Harassment on Trains and Roads: What a Survey Investigation Reveals]. Line News. <https://news.line.me/detail/oa-buzzfeed/a128699e21d7>
- Cahill, S. E., Distler, W., Lachowetz, C., Meaney, A., Tarallo, R., & Willard, T. (1985). Meanwhile Backstage — Public Bathrooms and the Interaction Order. *Urban Life*, 14(1), 33-58. <https://doi.org/10.1177/0098303985014001002>
- Connell, C. (2011). The Politics of the Stall: Transgender and Genderqueer Workers Negotiating “the Bathroom Question.” In C. Bobel & S. Kwan (Eds.), *Embodied Resistance: Challenging the Norms, Breaking the Rules* (pp. 175-185). Vanderbilt University Press. <https://doi-org.ezproxy.princeton.edu/10.2307/j.ctv16757rr.24>
- Davis, A. K. (2020). *Bathroom Battlegrounds: How Public Restrooms Shape the Gender Order*. University of California Press.
- Davis, H. F. (2017). Why the “transgender” bathroom controversy should make us rethink sex-segregated public bathrooms. *Politics, Groups, and Identities*, 6(2), 199-216. <https://doi-org.ezproxy.princeton.edu/10.1080/21565503.2017.1338971>
- Day, K. (2001). Constructing Masculinity and Women’s Fear in Public Space in Irvine, California. *Gender, Place & Culture*, 8(2), 109-127. <https://doi.org/10.1080/09663690120050742>
- Hayden, D. (2022). What Would a Non-Sexist City Be Like? Speculations on Housing, Urban Design, and Human Work. *Signs*, 5(3), S170-S187. <http://www.jstor.org/stable/3173814>
- Herman, J. L. (2013). Gendered Restrooms and Minority Stress: The Public Regulation of Gender and Its Impact on Transgender People’s Lives. *Journal of Public Management & Social Policy*, 19(1), 65-80. <https://login.ezproxy.princeton.edu/login?url=https://www.proquest.com/scholarly-journals/gendered-restrooms-minority-stress-public/docview/1439085659/se-2?accountid=13314>
- Horii, M., & Burgess, A. (2012). Constructing sexual risk: ‘Chikan’, collapsing male authority and the emergence of women-only train carriages in Japan. *Health, Risk & Society*, 14(1), 41-55. <https://doi.org/10.1080/13698575.2011.641523>
- Japan Broadcasting Corporation. (2022, September 1). まさか私が… 弁護士が性犯罪の被害者になって気づいたこと [Not Me... an Attorney's Realizations after Becoming the Victim of a Sex Crime]. NHK 事件記者取材 Note. www3.nhk.or.jp/news/special/jiken_kisha/

- shougen/shougen49/
- Japan Private Railway Association. (n.d.). 女性専用車両 [Women-only Carriages]. In 鉄道用語辞典. Retrieved April 2, 2023, from www.mintetsu.or.jp/knowledge/term/16394.html
- Kato, M., & Sleeboom-Faulkner, M. (2012). Ova collection in Japan – making visible women’s experience in male spaces. *Gender, Place and Culture*, 20(6), 737-753. <http://dx.doi.org/10.1080/0966369X.2012.709829>
- Kogan, T. S. (2007). Sex-Separation in Public Restrooms: Law, Architecture, and Gender. *Michigan Journal of Gender and Law*, 14(1), 1-57. <https://repository.law.umich.edu/mjgl/vol14/iss1/1>
- Massey, D. (1994). *Space, Place and Gender* (NED-New edition). University of Minnesota Press.
- Massey, D. (2005). *For Space*. SAGE Publications Ltd.
- Mathers, L. A. B. (2017). Bathrooms, Boundaries, and Emotional Burdens: Cisgendering Interactions Through the Interpretation of Transgender Experience. *Symbolic Interaction*, 40(3), 295-316. <https://www.jstor.org/stable/90011686>
- McDowell, L. (1993). Space, place and gender relations: Part II. Identity, difference, feminist geometries and geographies. *Progress in Human Geography*, 17(3), 305-318. <https://doi-org.ezproxy.princeton.edu/10.1177/030913259301700301>
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (2023, March 30). 痴漢撲滅に向けた政策パッケージ [Policy Package to Eradicate Groping]. Cabinet Office. https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/jakunengekkan/pdf/chikan_bokumetsu_seisaku.pdf
- Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. (2003a, November). 全国における女性専用車両の導入状況 [Status of the National Implementation of Women-only Carriages]. Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. <https://www.mlit.go.jp/kisha/kisha03/15/151209/01.pdf>
- Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. (2003b, December 9). 「女性専用車両 路線拡大モデル調査」報告書の概要について [Summary of the Report on “The Study of Expanding Implementation of the Women-only Carriage Model”]. Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. https://www.mlit.go.jp/kisha/kisha03/15/151209_.html
- Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. (2018, March). 公共交通政策：大都市交通センサス [Public Transportation Policy: Metropolitan Transportation Census]. Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. <https://www.mlit.go.jp/common/001259111.pdf>
- Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. (2023, March 30). 輸送機関別旅客輸送量（全国輸送量）[Passenger Traffic by Transportation Type (National Traffic)]. Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. https://www.mlit.go.jp/k-toukei/kamoturyokakutiikiiryuudoutyousa_kekkagaiyou.html
- moonshiney. (2021, September 7). 女性専用車両を増やしてほしい×多様化社会とは [Women-only Carriages Should Be Increased x What is a Diversified Society?]. Note. <https://note>.

- com/kinaze/n/n58209c8eea30
- Nakano, L., & Ronald, R. (2012). Single women and housing choices in urban Japan. *Gender, Place and Culture*, 20(4), 451-469. <http://dx.doi.org/10.1080/0966369X.2012.694357>
- Nichi-tele News. (2023, January 14). #痴漢祭り共通テスト狙う卑劣行為…“対策”アプリも周囲の人ができることは…【“#GropingFestival” Heinous Act Targeting the National Entrance Exam… “Preventative” Apps What Can Bystanders Do?】. *Yahoo! Japan News*. <https://news.yahoo.co.jp/articles/4187690153e36e71c7a90c911ba4ed6a6473c868>
- Omori, T. (2021, July 9). 女性専用車、将来は「多目的車」に？ [Women-Only Carriages, Could They Be “Multipurpose Carriages” in the Future?]. *The Sankei News*. www.sankei.com/article/20210709-PWYF5RWD4JLQ3BRT23QSUWBXYE/
- Osaka Metro. (n.d.). 女性専用車両は性別による差別ではないのですか？ | よくあるご質問 [Are Women-Only Carriages Not Gender Discriminatory? | Frequently Asked Questions]. <https://contact.osakametro.co.jp/faq/detail/81>
- Osaka Metro. (n.d.). 女性専用車両の車両位置はどのように決めたのですか？ | よくあるご質問 [How Did You Decide the Location of Women-Only Carriages? | Frequently Asked Questions]. <https://contact.osakametro.co.jp/faq/detail/82>
- Plaskow, J. (2008). Embodiment, Elimination, and the Role of Toilets in Struggles for Social Justice. *CrossCurrents*, 58(1), 51-64. <https://doi.org/10.1111/j.1939-3881.2008.00004.x>
- Platt, L. F., & Milam, S. R. B. (2018). Public Discomfort with Gender Appearance-Inconsistent Bathroom Use: The Oppressive Bind of Bathroom Laws for Transgender Individuals. *Gender Issues*, 35(3), 181-201. <https://doi-org.ezproxy.princeton.edu/10.1007/s12147-017-9197-6>
- Roen, K. (2002). “Either/Or” and “Both/Neither”: Discursive Tensions in Transgender Politics. *Signs*, 27(2), 501-522. <https://doi.org/10.1086/495695>
- Roy, S., Jahangir, S., Bailey, A., & Noorloos, F. V. (2022). Visibility matters: Constructing safe passages on the streets of Kolkata. *Journal of Urban Affairs*, 1-22. <https://doi.org/10.1080/07352166.2022.2105224>
- Saito, A., & Takeda, S. (2019, March 2). 男同士が語る どうしたら痴漢をなくせるか [Men in Discourse How to Eliminate Groping on Trains] [Public Lecture]. Saitama Prefectural Center for Promotion of Gender Equality. <https://www.pref.saitama.lg.jp/withyou/event/report/h30/0302mens.html>
- Sakura. (2018, February 27). 女性専用車両って [Women-Only Carriages Are]. つぶやきノート. <https://www.dclg.jp/en/8126746/571779775>
- Shibata, S. (2020a, January 27). Are Women-Only Cars (WOC) a Solution to Groping? A Survey among College Students in Tokyo/Kanagawa, Japan. *International Journal of Comparative and Applied Criminal Justice*, 44(4), 293-305. <https://doi.org/10.1080/01924036.2020.1719533>
- Shibata, S. (2020b, July 15). Transit Safety Among College Students in Tokyo-Kanagawa, Japan. In V. Ceccato & M. Nalla (Eds.), *Crime and Fear in Public Places: Towards Safe, Inclusive and Sustainable Cities* (pp. 160-175). Routledge. <https://doi.org/10.4324/9780429352775-11>

- Silvey, R. (2004). Power, difference and mobility: feminist advances in migration studies. *Progress in Human Geography*, 28(4), 490-506. <https://doi-org.ezproxy.princeton.edu/10.1191/0309132504ph490oa>
- Spain, D. (2000). *Gendered Spaces*. University of North Carolina Press.
- Staeheli, L. A., Kofman, E., & Peake, L. J. (Eds.). (2004). *Mapping Women, Making Politics: Feminist Perspectives on Political Geography*. Routledge.
- Steger, B. (2013). Negotiating Gendered Space on Japanese Commuter Trains. *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*, 13(3). <http://www.japanesestudies.org.uk/ejcs/vol13/iss3/steger.html>
- sumisumicoco. (2022, January 14). 「試験当日は痴漢祭り」が今年も話題に→女性専用車両のない日を狙う悪質な犯行/自衛のために制服を着ないようという提案も [“The Groping Festival” Has Become a Hot Topic→Malicious Crimes Targetting the Day When Women-Only Carriages Don’t Operate/Some Suggest Students Shouldn’t Wear Uniforms as a Preventative Measure] [Tweet]. Together. [together.com/li/1830706](https://twitter.com/li/1830706)
- The Sankei News. (2017, August 17). 女性専用車両肝心の痴漢対策に効果なし? [“Women-Only Carriages” No Effect on Mitigating Groping Incidents?]. *The Sankei News*. <https://www.sankei.com/article/20170824-5VDUKJF5SNJ2NLVFXAXYAAYQDM/3/>
- Valentine, G. (1989). The geography of women’s fear. *Area*, 21(4), 385-390. <https://www.jstor.org/stable/20000063>
- Valentine, G. (1993). (Hetero)Sexing Space: Lesbian Perceptions and Experiences of Everyday Spaces. *Environment and Planning D: Society and Space*, 11(4), 375-499. <https://doi-org.ezproxy.princeton.edu/10.1068/d110395>
- Weblio. (n.d.). 自意識過剰 [Jishikikajou]. In *Weblio Thesaurus*. Retrieved July 16, 2023 from <https://thesaurus.weblio.jp/content/%E8%87%AA%E6%84%8F%E8%AD%98%E9%81%8E%E5%89%B0%E3%81%AE>
- Women Against Sexual Violence. (1988, December 17). 要望書 [Written Requests] [Supplemental Material]. 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要. <https://gssc.dld.nihon-u.ac.jp/wp-content/uploads/journal/pdf18/18-047-057-Yamamoto.pdf>
- Women Against Sexual Violence. (1990). 女が視た「地下鉄御堂筋線事件」 [‘The Midosuji Incident’ from a Woman’s Perspective] [Brochure].
- Women Against Sexual Violence. (n.d.). 「地下鉄御堂筋線事件」について [Regarding the “Midosuji Subway Incident”]. <https://no-seiboryoku.jimdofree.com/%E7%A7%81%E3%81%9F%E3%81%A1%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6/%E5%9C%B0%E4%B8%8B%E9%89%84%E5%BE%A1%E5%A0%82%E7%AD%8B%E4%BA%8B%E4%BB%B6%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6/>
- Yamamoto, N. (2017). 女性専用車両、設置の経緯と考察 一性暴力被害防止の視点から— [Train/Subway Cars Dedicated for Women and Girls: Background and Discussion —To prevent sexual assaults—] (Publication No. 18, 047-057) [Doctoral dissertation, Nihon University]. 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要. <https://gssc.dld.nihon-u.ac.jp/wp-content/uploads/journal/pdf18/18-047-057-Yamamoto.pdf>
- Yavuz, N., & Welch, E. W. (2010). Addressing Fear of Crime in Public Space: Gender

Differences in Reaction to Safety Measures in Train Transit. *Urban Studies*, 47(12), 2491-2515. <https://doi.org/10.1177/0042098009359033>

Yoshida, Y. (2019). Gender geography in Japan: the trajectory, fruits of research and future challenges. *Gender, Place and Culture*, 26(7-9), 1149-1158. <https://doi-org.ezproxy.princeton.edu/10.1080/0966369X.2018.1552929>

Abstract

女性専用車両：保護空間におけるジェンダー構築

小川幸姫

現在の東アジア学や日本メディアは、主に女性専用車両が効果的であるかどうかを疑問視している。しかし、女性専用車両がどのように女性像を構築しているかについての研究はほとんど存在しない。東アジア学は概して公共空間における女性像は被害者意識によって構成されることを前提としている。それではジェンダー学はどうだろうか。空間形成のジェンダー化における研究は、主に住まいや職場といった主要な空間を研究の対象としている。しかし、交通機関である以上女性専用車両は主要な空間と同じように機能していない。つまり、これらの学問分野は女性専用車両における女性像のマイノリティ化の要因を説明するのには不十分である。

この論文は、公衆トイレに関するジェンダー学の研究を活用することで「女性保護」の根底にある規範的保護を説明する。女性乗客の日常を記録した投稿と女性専用車両の非協力乗車動画の分析を通してジェンダー化された空間がどのように女性像を構築しているかを考察する。

女性専用車両は女性を保護するものと称しているにも関わらず、鉄道会社は一般乗客の利便性に配慮している。専用車両が女性を隔離しているのであれば「一般乗客」に含意されるのは男性である。つまり、女性の安全確保は男性乗客に不便でない領域内で行われている。更に女性専用車両はその構造によって痴漢対策の責任を女性のみにならせ、女性の安全を社会問題ではなく女性問題として扱っている。従って一般車両に乗車することが痴漢行為を誘うことと混同されることを可能にしている。この論文は女性像がどのように被害者意識と連動するのかを考察することで女性像を定義し、束縛し、制度化する女性専用車両のメカニズムについて更なる探求を呼びかけている。

キーワード:

空間形成のジェンダー化、女性専用車両、ジェンダー構築、ノーマティブプロテクション（規範的保護）、公共交通機関

2022年度ジェンダー・セクシュアリティ研究 レインボー賞受賞論文について

オリビエ・アムール＝マヤール

(2022年度選考委員長)

生駒夏美

(推薦コメント)

カレン・ベヴァリー F. M.

(推薦コメント)

「ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞」は、ジェンダー研究センターの設立に尽力され、2014年にご退官された田中かず子教授により創設されました。賞の目的は、本学に提出された学士・修士または博士学位論文の中で、優れたジェンダー・セクシュアリティ関連研究を表彰し、そしてジェンダー・セクシュアリティ研究の一層の発展を期待するものです。2022年度は、優秀な論文が複数推薦され、小野彩水さんの学士論文『『ノンバイナリーがわかる本』翻訳を通じた日本へのノンバイナリー概念の導入』と、中島遙さんの修士論文「理想の人形——「型」として描かれる女性身体」に決定しました。

小野さんの受賞論文は、エリック・ヤングの *They/Them/Their: A Guide to Nonbinary & Genderqueer Identities* (2019) の日本語訳を扱い、テキストの変化や日本での出版による社会的効果、訳書の読書と分析研究が個人に及ぼす影響について検証しています。訳者と編集者への調査によって、ジェンダー関連書の翻訳がもたらす様々な社会的・個人的影響を考察している点の独創性が認められました。

中島さんの受賞論文は、日本文学に登場する人形の表象に着目し、ジェンダー・人種・ナショナリズムの観点から分析しています。女性身体の表象に顕れる性規範や、その時代の地政学と女性差別や人種差別の関わりを丁寧にテキスト分析している点が評価されました。

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies in AY 2022

Olivier AMMOUR-MAYEUR

(AY2022 Selection Committee Chair)

Natsumi IKOMA

(Recommender's Comments)

Beverley F. M. CURRAN

(Recommender's Comments)

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies was established by Professor Kazuko Tanaka, who founded the Center for Gender Studies (CGS). The award's purpose is to recognize outstanding gender and sexuality-related research in B.A., M.A., or Ph.D. dissertations submitted to the ICU and encourage further development of gender and sexuality studies. Several outstanding papers were nominated for the academic year 2022, from which, Ayami Ono's senior thesis, "*They/Them/Their: The Introduction of the Concept of Nonbinary in Japan through Translation*" and Haruka Nakajima's Master thesis, "*An Ideal Doll: Female Body as a Mold,*" were selected.

Ono-san's award-winning senior thesis traces the trajectory of Eric Young's *They/Them/Their: A Guide to Nonbinary & Genderqueer Identities* (2019) in Japanese translation and explores the textual changes; the social implications of its publication in Japan; as well as reflecting on the impact of reading and researching the book's translation on the student's own identity. This senior thesis is marked with originality for its engagement with translator and editor, revealing how this gender-related text circulated in translation with anticipated and unexpected personal and public effects.

Nakajima-san's award-winning Master thesis focuses on the motif of a doll in Japanese literature, and analyze the stories and films from the perspectives

of gender, race, and nationalism. It was highly evaluated that the gender norms behind the doll metaphors and the relationship between geopolitical contexts and gender/racial discriminations were examined in close analyses.

『ノンバイナリーがわかる本』翻訳を通じた 日本へのノンバイナリー概念の導入

小野彩水

男性にも女性にも所属しない性自認、「ノンバイナリー」は、インターネットの普及と共に世界的に認知が広まった。2019年、英国の出版社より、ノンバイナリーアイデンティティについての単行本*They/Them/Their*が出版されると、同書は2021年、明石書店より『ノンバイナリーがわかる本』という邦題にて、日本語訳が出版された。これは、日本における初のノンバイナリーアイデンティティの概説書となった。本稿の目的は、ノンバイナリーという概念が、*They/Them/Their*の翻訳を通じて日本社会の空間・時間・意味の網目にどのようにその基礎を築いたか、を明らかにすることである。

本稿の論展開は以下の通りである。まず導入として、ジュディス・バトラーの理論を紹介し、本稿におけるジェンダーアイデンティティの枠組みと、その有用性について述べる。第一章では、原著*They/Them/Their*における、ノンバイナリー表現の実践を四つの観点から考察する。四つの観点とは具体的に、(1)筆者・執筆の動機・目的について、(2)パラテキストの仕様、(3)本の構成・ノンバイナリー概念の導入方法、(4)筆者の経験の記述方法、である。第二章では、前述の四つの観点に基づき、翻訳本『ノンバイナリーがわかる本』における、ノンバイナリー表現の実践を検討する。この検討においては、ミクロ、マクロの二つの視点からアプローチを行う。ミクロな視点は、緻密な翻訳の取り組みに着目する分析視点である。本の構成や単語の選択に着目し、その選択がもたらした内容の変化や、その変化がもたらす読者への影響について考察する。マクロな視点は、翻訳の意図や出版の戦略から翻訳の特色を明らかにする分析視点である。本稿では、『ノンバイナリーがわかる本』の翻訳者である上田勢子氏、またノンバイナリー当事者であり編集に携わった辛島悠氏にインタビューを行った。翻訳の過程や、出版の背景・目的について、両インタビューを通じて得られた知見を基に考察を行う。第三章では、第一章・第二章を通じて述べられた内容を総括し、バトラーの理論を再度参照することで、改めて翻訳のもたらす意味と影響に

ついて検討する。加えて、器械的翻訳と解釈学的翻訳という二つの翻訳モデルの方法論を通じて、翻訳理論の観点からも『ノンバイナリーがわかる本』の意義や日本社会への影響、今後の展開について考察する。最後に、以上の全てを踏まえ、本稿では取り扱うことのできなかった議論や、将来に渡った継続的な研究の必要性、そして今後のノンバイナリー表現に必要な表象の多様性についても示唆する。

本稿の知見として、『ノンバイナリーがわかる本』は、原著におけるノンバイナリーの言語実践を日本語において再構築すると共に、日本文化に固有の社会規範に挑戦し、攪拌する可能性をも有していることが明らかになった。本稿は、段階を踏んだ詳細な議論を通じて、ノンバイナリーという存在が日本語においてどのように表象され、日本社会に導入されたかについて明らかにした。ノンバイナリーという概念は、その表象のみならず、学術的な議論の場においても未だに研究の余地を多く残している。本稿は、ノンバイナリーの表象を考える第一歩であるとともに、ノンバイナリーについてのさらなる研究への礎となる、という点で意義があると考えられる。

They/Them/Their: The Introduction of the Concept of Nonbinary in Japan through Translation

Ayami ONO

They/Them/Their: A guide to Nonbinary & Genderqueer Identities by Eris Young was published in September 2019. It discusses nonbinary identities based on the author's experience, surveys, studies, and interviews. The author, Young, is an American queer nonbinary trans writer with degrees in linguistics from the University of California, Los Angeles, and the University of Edinburgh. *They/Them/Their* was translated in Japanese by Seiko Uyeda, and published in 2021, as *Nonbinary ga wakaru hon*. It is the first overview book about nonbinary in Japan. The translator, Seiko Uyeda, is a translator living in the United States since 1979, who had translated many books regarding social minorities including LGBTQ+. The editor of this book is Yu Karashima, who recognises themselves as a nonbinary person.

This paper aims to reveal how the nonbinary concept in Japan has created its foundation in space, time, and the webs of significance, through the Japanese translation of *They/Them/Their*. It includes the interview with the book's translator, Seiko Uyeda, and editor Yu Karashima, as part of a detailed analysis of the translation's effectiveness, cogency, and social impact. In short, the overview of *They/Them/Their* will be in Chapter One; the comparison and analysis of translation with interviews will be found in Chapter Two; and an analysis of translation theories and a consideration of further possibilities of nonbinary representation will comprise Chapter Three.

In detail, the thesis starts by assembling and organising the relationship between language and gender identities including the introduction of the discussion of nonbinary, as it shows the importance of a book about nonbinary in the first place. It clarifies the significance of *They/Them/Their* and its Japanese

translation.

Next, a close look and analysis of the original book through four perspectives: 1) the author, motivation, and purpose; 2) the paratext; 3) the structure of the book and introduction of the concepts; and 4) the representation of the nonbinary experience, will show concrete examples of the practices of nonbinary representation in the book. Using the same four perspectives, a close look and analysis of the translated book follow. This will include the two interviews with translator, Seiko Uyeda, and editor Yu Karashima. The interview with Uyeda will provide more profound insights into the translation process, which shows both the possibility and limitations of the translated book. The interview with Karashima will show the background process regarding the publication and its publication significance.

Then, it will summarise the discussion and develop further discussions on the meaning and influence of the translation. The translation will be examined through two translation models: the instrumental and hermeneutic models. As the instrumental model, skopos theory introduces the idea of aim-based translation as an act. The hermeneutic perspective, with its idea of translation as interpretation, critically shows the position of the translation through its cultural background and insisted on its limitation, significance, and further possibility. With these examinations, the thesis concludes how the nonbinary concept in Japan has created its foundation in space, time, and the webs of significance, through the Japanese translation of *They/Them/Their*. The thesis then discusses its limitation, which is the lack of an argument regarding the body. Finally, the thesis mentions the potential for disturbance or subversion of the gender binary in Japan through the representation of nonbinary, as well as suggesting the necessity of continual research on the nonbinary representation.

As a whole, the thesis provides the idea of nonbinary representation, and creates the foundation of nonbinary research for the future.

理想の人形——「型」として描かれる女性身体

中島遙

本研究のテーマは日本文学における「人形として描かれた女性」の表象分析である。小説『青塚氏の話』（谷崎潤一郎、1926）『眠れる美女』（川端康成、1960-1）及び映画『空気人形』（是枝裕和、2009）の3作品における女性身体表象について、ジェンダー、人種、ナショナリズムの観点から分析をおこなっている。これにより、女性身体表象の変遷と女性身体に反映された性規範、男性中心性、人種主義を見ることを目的としている。

日本には、なぜ「女性」の姿形をしたロボットや人形、アンドロイドが多いのだろうか。本研究はこの疑問から始まった。ロボットなどの製造技術は年々発達し、精巧なつくりの「人間に似た」ものが増えてきている。そうしたロボットは「若く美しい女性」であることが多い。だが、ロボットを「女性らしく」造型し、駅や公共施設に設置することは「当たり前」として受け止められてよいのだろうか。これは「サポート」といった「女性」に期待されやすい性役割を反映しているのではないか。この点を追究するため、本研究は「人形」として描かれる女性が登場する文学／映像作品を選び、時代ごとの特徴や共通点を考察している。

分析にあたってはテキストに加え、時代背景や作品が発表された時代の文化表象を考察した。また、ジェンダー、レイシズム、ナショナリズムといった複数の視点から分析することを重要視した。それぞれは独立した問題ではなく、繋がっており、表象にも反映されているからだ。

1 『青塚氏の話』

第1章では1926年に書かれた谷崎潤一郎による小説『青塚氏の話』を分析している。男性映画監督がファンの男性と出会い、彼の映画女優への執着に恐怖を感じつつ引き込まれていくというストーリーだ。最後には男性が映画女優そっくりの人形を作っていたことが判明する。その女優「由良子」は男性同士の会話に出てくるばかりで、登場場面は少ない。そこで、本研究では由良子の描写に注目し「女優としての由良子」「人形として描かれる由良子」の2点から分析している。

「女優としての由良子」は「アメリカ女優」のような美しさをもった存在として描かれており、当時の日本/日本映画産業の「アメリカ」への憧れをみることができる。また、蠟人形に関する先行研究をもとに、なぜ「由良子人形」が必要であったのかを考察している。

2 『眠れる美女』

第1章をふまえ、第2章では川端康成の小説『眠れる美女』（1960-1）について分析している。本作の舞台は娼館「眠れる美女」だ。ここでは少女たちが薬で眠らされている。主人公は初老の男性であり、彼の視点から宿と「眠れる美女」たちについて語られる。本研究では、山崎明子の論を参照し、「眠れる美女」たちに投影されている理想化された女性像を分析している。また、眠れる美女の一人である「黒い娘」の表象から戦後日本のレイシズムについて考察をおこなう。そして、こうした「眠れる美女」たちが望まれる背景にある男性性についても分析する。

3 『空気人形』

最後に、2009年の是枝裕和監督による映画『空気人形』の分析をおこなう。ラブドールを主人公とする『空気人形』はこれまでの2作と比べさらにあどけなく幼さを強調した外見と仕草をしている。1990年代からの、アイドルやラブドール産業を始めとした「少女」の流行から「少女」と性的対象化について考察する。また、韓国の俳優ベ・ドゥナが空気人形を演じていることから、日本におけるオリエンタリズムについても言及する。

以上の考察から、女性が時代ごとに理想像を投影されており、より「若い」「人形化」した女性像が作りだされているといえる。また、その背景には「日本人男性」中心の社会構造があると考えられる。

An Ideal Doll: Female Body as a Mold

Haruka NAKAJIMA

This thesis analyzes female representation in Japanese literature and film; *Aozukashi no Hanashi* (Tanizaki Junichiro, 1926), *Nemureru Bijo* (Kawabata Yasunari, 1960-1), and *Air Doll* (directed by Kore-eda Hirokazu, 2009). In all three works, female characters are represented as a “doll.” This thesis focuses on how and why the female body has been represented as a doll and idealized in Japanese culture.

I have been wondering why many robots or dolls in Japan are created as women. As the technologies develop, more and more “human-like” robots are produced, and they are at the station or office to guide and support people. Many of them are gendered as female. Although this situation is accepted as “normal,” it is questionable why robots are characterized as a certain gender. Therefore, I chose to analyze representation in culture to understand this phenomenon more thoroughly.

To analyze the text, this thesis examines the historical and cultural background of each novel or film. Also, I focus on several aspects such as gender, race, and nationalism. Each issue is not independent but related to each other, and I believe it is important to examine the topic from an intersectional aspect.

1 *Aozukashi no Hanashi*

The first chapter analyzes *Aozukashi no Hanashi*, written by Tanizaki Junichiro in 1926. This story is narrated as a note a film director left to his wife. His wife Yurako works as an actress and has been featured in his films. In the letter, he confessed that he met a man, who is a big fan of Yurako. The man was obsessed with Yurako and collected films and remembered Yurako’s body in detail. In the end, it is revealed that he created dolls, which look exactly like

Yurako.

This thesis focuses on the representation of Yurako from two aspects: Yurako as an actress and Yurako as a doll. The depiction of Yurako as an actress shows the influence of American film in Japan. Tanizaki describes her beauty as a (white) American actress. It shows that American films influenced the beauty standard in Japan. Also, former research such as Laura Mulvey points out, women have been described as objects to be gazed by men. Therefore, Yurako is shown as a woman who has an “ideal” attractive body.

Moreover, Yurako is represented as a doll at the end of the story. By introducing Aramata Hiroshi’s research of dolls such as wax figures, I argue that Yurako is portrayed as “attractive” not only because she is an actress but also because she is a “doll.”

2 *Nemureru Bijo*

In the second chapter, I analyzed Kawabata’s *Nemureru Bijo*. “*Nemureru Bijo* (Sleeping Beauty)” is the name of the brothel the protagonist visits. In the brothel, young and beautiful women are narcotized by medicine. Eguchi, the protagonist, visits the brothel and sleeps beside them.

This thesis examines the story by focusing on gender and race. Based on Yamasaki Akiko’s analysis of female representation in culture, I analyzed how “sleeping beauties” are portrayed as “ideal” women to the protagonist. On the other hand, it is important to consider who and why these women are desired. By examining historical and cultural background, I also discuss masculinity in Japanese culture.

3 *Air Doll*

In the last chapter, I analyzed a film, *Air Doll* (directed by Kore-eda Hirokazu). In this film, the protagonist is a sex doll which is called “Air Doll.” One day she suddenly became able to talk and behave like a human, and she started working at a video rental shop.

Air Doll's appearance and behavior looks like an innocent child. I consider Air Doll reflects "Shoujo culture" in Japan, which became popular around 1990s. In subculture and media, young women(shoujo) tend to be portrayed as innocent and sexual.

Moreover, I discuss Orientalism in this film. The film features Bae Doona, Korean actress, as Air Doll, and she plays a similar role in a Hollywood film after *Air Doll*. This thesis criticizes Orientalism in Japanese culture, which portrays other Asian women as Others and "idealized" figure.

This thesis criticizes representation of women in Japanese literature and culture by focusing on "women portrayed as dolls." This perspective shows how "ideal women" has been constructed and represented.

イベント報告

強制的（異）性愛に抗う： Aセクシュアルの視点から

コーディネーター：羽生有希

(CGS研究員)

学術イベントの報告書としては奇妙に思われるかもしれないが、個人的な思い出を語ることから始めたい。

数年前ジェンダー研究センター（CGS）にて研究所助手（RIA）として勤務していたとき、しばしば学生から「Aセクシュアルについての文献はありますか」と問われた。Aセクシュアリティ研究をテーマとした数冊の英語の本や数少ない日本語の学術記事を紹介した後で、私はいつも気まずさを感じた。Aセクシュアルについて書かれた日本語論文は少なく、Aセクシュアルの視点から文化的な分析を行う論文はさらに少ないという事実、学生のみならず私自身も直面する羽目になるからだ。私はいつも、Aセクシュアルの視点がありうるというよりは、それが実際に存在して、さらにはフェミニズムやクィアの研究を豊かにするものだということを示したかった。フェミニズムやクィアの研究と同様に、Aセクシュアリティ研究が私たちの世界への一つのユニークな視座であることを示したかった。2023年10月7日に行われたイベント「強制的（異）性愛に抗う：Aセクシュアルの視点から」はそれゆえ、当時の学生に向けた一つの大幅に遅れた返答でもある。

イベントは4つのセッションから構成した。それぞれのセッションに発表者とコメンテーターを一人ずつお招きした。

第一セッション「Aセクシュアル・コミュニティとAセクシュアルの経験」では、日本のAセクシュアル・コミュニティに関する統計学的調査を行った三宅大二郎さんが発表を行った。「Aセクシュアル」や「Aロマンティック」などの研究のキーワードを概説した上で、三宅さんは「Aro/Ace調査」をもとに、日本のAro/Aceの人々が経験した困難の事例を示し、そのような困難を生み出す社会が

いかに強制的性愛に基づいているかを説明した。三宅さんと As Loop (Aro/Ace に関する情報提供や研究活動を行っている団体) において共に活動しているコメンテーターの中村健さんは、自身の経験や他のエースとの交流から得た知見をもって、統計的なデータを肉付けしてくれた。

第二セッション「エース・スタディーズ?——Aセクシュアルの視点から社会を見る」は、Aセクシュアリティ・スタディーズもしくはエース・スタディーズの「理論」がいかにして可能かを考察した。架空のキャラクターの愛好者であるフィクトセクシュアルについての研究からAセクシュアリティ・スタディーズにアプローチする松浦優さんは、ジュディス・バトラーにおける身体の「字義どおり化」の概念を批判的に援用しながら、異性愛規範に還元されえない強制的性愛や対人性愛主義の作用を指摘した。フェミニズム／クィア・スタディーズと哲学を専門とするコメンテーターの藤高和輝さんは、ベル・フックスを引きながら、規範的社会によって傷ついた人々を癒し世界を異化する実践として「理論」を定式化し、松浦さんの対人性愛主義に関する議論をそのような「理論」の一つとして高く評価した。

第三セッション「Aセクシュアリティと障害——相互否定を超えて」の発表者は、セクシュアリティの／と病理化を研究する長島史織さんだ。長島さんは AVEN タスクフォースの報告書が DSM-5 でのいわゆる Aセクシュアル例外規定の追加に果たした役割について論じた。「報告書は精神疾患とAセクシュアリティの両方に対するスティグマに異議を唱えるのではなく、Aセクシュアリティから精神疾患のスティグマを取り除こうとしている」というクリスティナ・グプタ (2013) による批判がある一方で、長島さんによれば、報告書はAセクシュアリティが性的指向であるとしつつもあえてAセクシュアリティを定義しなかったことにより、セクシュアリティの意味合いを拡張したという。医療とセクシュアリティに関する倫理的探究をしてきたコメンテーターの高井ゆと里さんは、何がセクシュアリティかを問うことは重要である一方で、そもそもなぜあるものをセクシュアリティと呼ぶ必要があるのかという問いもセクシュアリティの影響から逃れるためには必要だと指摘し、アイデンティティ・ポリティクスとは別の形でAセクシュアリティについて語る必要があると主張した。

最後のセッション「(シスヘテロ) セクシズムの中のAセクシュアリティとノ

ンバイナリー」では、ジェンダーとセクシュアリティに関する質的分析を専門とする佐川魅恵さんが発表を行った。（シスヘテロ）セクシズムによって構成される時間規範性をノンバイナリーでありAセクシュアルである人々がいかに経験するのか、また、そのような（異）性愛化、ジェンダー化された時間と意図的にせよそうでないにせよ同期しないことで、これらの人々がどのような身体を得るのか。ノンバイナリーでありAセクシュアルである個人らの語りを分析しながら、佐川さんはそのような問いに取り組んでいたように思われる。トランスジェンダー・スタディーズを専門とする葛原千景さんは、時間性についての議論を引き継ぎながら、いわゆるクィアな時間とは若干異なる形でエース／トランスの時間が概念化されうるという興味深い指摘をしてくれた。

四つのセッションの後は、パネル・ディスカッションとフロア・ディスカッションを行った。パネル・ディスカッションには、フェミニズム／クィア理論とフェミニスト・アートを専門とするCGS助教の浜崎史菜さんにも加わっていた。浜崎さんはセックスの定義の政治性という点で、フェミニスト／クィア・スタディーズとAセクシュアリティ・スタディーズを結びつけてくれた。

フロア・ディスカッション終了後はネットワーク・ビルディングの時間を設けた。Aセクシュアリティ・スタディーズに関心を持つ来場者同士で語り合い、自身の課題を共有する時間である。アカデミックな議論の場だけでなく、広義のエース・コミュニティの場をも提供したこと。これは本イベントに関して特筆すべきことの一つと思われる。イベント終了後、オーディエンスからは多くの好意的なフィードバックを頂いた。これもやはり特筆すべきことだろう。強制的性愛を批判する視点を示すだけでなく、それをフェミニスト／クィア・スタディーズに関心を持つ人々とともに実際に共有することができたことを光栄に感じる。

Event Report

Against Compulsory (Hetero)Sexuality: From Asexual Perspectives

Coordinator: Yuki HANYU

(Research fellow at CGS)

Though it may sound strange as the beginning of a report of an academic event, let me start with personal recollections.

When I was working as a Research Institute Assistant(RIA) at Center for Gender Studies(CGS) a few years ago, I was often asked by students whether there were any books or articles about asexuality. After recommending a few books in English and only a few articles in Japanese to them, I always felt a bit awkward since we always ended up confronting the fact that there were few Japanese articles about asexuality and fewer articles engaging in cultural analysis from the perspective of asexuals. I always wanted to show that the perspective of asexuals is not only possible, or rather it does exist, and that it will enrich feminist and queer studies. I also wanted to show that asexuality studies, as well as feminist and queer studies, is a unique perspective on our world. The event "Against Compulsory (Hetero)Sexuality: From Asexual Perspectives," held on October 7th, 2023, was, then, a kind of an answer to those students that was long overdue.

The event consisted of four sessions, and CGS invited a presenter and a commentator for each session.

In the first session, "Asexual Communities and Experiences of Asexuals," Miyake Daijiro-san, who has conducted statistical surveys concerning Japanese asexual communities, delivered a presentation. After a brief explanation of keywords in asexuality studies such as "asexuals" and "aromantics," Miyake-san introduced to us several difficulties that aro/ace people in Japan often

experience and explained the way the society that causes such difficulties is based on compulsory sexuality. The commentator Nakamura Ken-san, who collaborates with Miyake-san at As Loop (the organization that provides information about and conducts research on aro/ace people), fleshed out those statistical data with their own experiences and the insights gained from their interaction with other aces.

The second session, “Ace Studies?: Looking at the Society from the Perspectives of Asexuals,” considered the possibility of the “theory” of asexuality studies or ace studies. Matsuura Yuu-san, who approaches asexuality studies with the background of research on fictosexuals (those who are attracted to fictional characters), pointed out the effects of compulsory sexuality or human-oriented sexualism, which are irreducible to compulsory heterosexuality, critically alluding to the concept of “literalization” of bodies in Judith Butler. Citing the argument by bell hooks, Fujitaka Kazuki-san, who specializes in feminist/queer studies and philosophy, formulated the “theory” as a practice of healing those who get hurt by a normative society and of defamiliarizing the world and then highly appreciated Matsuura-san’s discussion about human-oriented sexualism as an example of such “theory.”

The presenter of the third session, “Asexuality and Disability: Beyond Mutual Negation,” was Nagashima Shiori-san, who studies pathologization of/and sexuality. Nagashima-san discussed the role of a report by the AVEN DSM task force in adding the so-called asexual exception to DSM-5. According to Nagashima-san, while Kristina Gupta (2013) criticizes the report in that “[r]ather than challenging stigma against both mental illness and asexuality, it seeks instead to rid asexuality of the stigma of mental illness,” the report contributes to extend the possible meaning of sexuality by claiming asexuality as a sexual orientation and yet avoiding the definition of asexuality per se. The commentator Takai Yutori-san, who has engaged in ethical explorations into medicine and sexuality, pointed out that while it is important to ask what could be sexuality, it is necessary to ask why we have to define something as sexuality

in the first place in order to get out of the empire of sexuality. Takai-san then claimed that we needed to talk about asexuality in a way different from identity politics.

In the last session, “Asexuality and Nonbinary in (Cis-hetero) Sexism,” Sagawa Misato-san, an expert in qualitative research on gender and sexuality, delivered a presentation. While analyzing the personal narratives of nonbinary and asexual individuals, Sagawa-san seemed to tackle relevant questions: how do those people experience chrononormativity consisting of (cis-hetero) sexism, and what kind of bodies do they acquire as they are, intentionally or not, unsynchronized with such (hetero)sexualized and gendered time? Continuing such discussion of temporality, Kuzuhara Chikage-san, whose specialization is transgender studies, tellingly pointed out that ace/trans time could be conceptualized in a bit different way from queer time.

After these four sessions, we had a panel and floor discussion. We had Hamasaki Fumina-san, Assistant Professor at CGS specializing in feminist/queer theory and feminist art, join the panel discussion. Hamasaki-san connected feminist/queer studies with asexuality studies in terms of the political nature of the definition of sex. After the floor discussion, we had time for network building so that the participants interested in asexuality studies could talk with each other and share their own projects. It is noteworthy that we provided a place for academic discussion and ace communities in a broad sense. After the event, we received a lot of positive feedback from the audience; this is another notable point. We are honored that we not only provided a critical viewpoint on compulsory sexuality but also shared it with those interested in feminist/queer studies.

Reference:

Gupta, K. (2013, October 24). *Happy asexual meets DSM*. Social Text online. https://socialtextjournal.org/periscope_article/happy-asexual-meets-dsm/. Accessed 12 Jan 2023.

2023年度CGS活動報告

春学期

4月3日(月) | 「できることガイド in ICU：性別や身体に違和のある人のためのガイド Vol. 02」(2023年) 発行・配布開始

2023年度版改訂責任者：葛原千景 (CGS 研究所助手)

2023年度版改訂協力：加美山紗里 (ICU 学生)

坂本奈々美 (ICU 学生)

英語訳：浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)

葛原千景 (CGS 研究所助手)

英語ブルーリード：Beverley Curran (CGS 運営委員、編集委員)

デザイン：葛原千景 (CGS 研究所助手)

4月27日(木) | CGS 春の交流会 2023

場所：本館前の芝生

5月24日(水) | Samuel Vernet 教授公開レクチャー「An Ambivalent Support: When Opposing Homophobia Strengthen the Heteronormative Order」

場所：アラムナイハウス

コーディネーター：オリヴィエ・アムール＝マヤール (CGS センター長、CGS 運営委員、編集委員)

5月30日(月)～6月15日(木) | 第11回「R-Weeks」イベント週間

第11回 R-weeks 企画・運営：

浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)

葛原千景 (CGS 研究所助手)

岡俊一郎 (CGS 研究所助手、編集委員)

文可依 (CGS 研究所助手)

5/30(月)～6/30(金) | ふわりんパネル展示とR-weeks イベント関連書籍紹介

場所：図書館 1F

コーディネーター：岡俊一郎 (CGS 研究所助手、編集委員)

5/30 (火) | 「ICUと子育て」

場所：CGS (ERB-301)

コーディネーター：生駒夏美 (CGS運営委員、編集委員)

5/30 (火) | 特別講演「投影する／される運動とアート」

登壇者：Akita Sho (ノーマルスクリーン)

コーディネーター：浜崎史菜 (CGS研究所特任助教、CGS運営委員、編集委員)

*GSS科目「ジェンダー・セクシュアリティ研究へのアプローチ」内での講演

6/1 (木) | 特別講演「性のありように関わらない性暴力サバイバーサポートに向けて」

登壇者：岡田実穂 (Broken Rainbow-Japan代表、Rape Crisis Network 主宰)

コーディネーター：浜崎史菜 (CGS研究所特任助教、CGS運営委員、編集委員)

*GSS科目「ジェンダー・セクシュアリティ研究へのアプローチ」内での講演

6/3 (土) | 「ICU性別表記・通称名への取り組み 20周年記念イベント

—多様な性が守られる大学・社会を作るために」

登壇者：田中かず子 (CGS顧問、三鷹ダイバーシティセンター共同代表)

エキナカ (大学院生)

akatsuki

加藤恵津子 (CGS副センター長、CGS運営委員、編集委員)

葛原千景 (CGS研究所助手)

場所：H-116、オンライン

企画・運営：葛原千景 (CGS研究所助手)

浜崎史菜 (CGS研究所特任助教、CGS運営委員、編集委員)

協力：岡俊一郎 (CGS研究所助手、編集委員)

文可依 (CGS研究所助手)

6/5 (月) | 「Aセクシャルって何？」から一歩進んで—「ACE」翻訳者とのトーク

登壇者：羽生有希 (CGS研究員)

コメントーター：葛原千景 (CGS研究所助手)

場所：ERB-347

6/6 (火) | 特別講演「『日本は性に寛容だった』言説に抗う」

登壇者：高島 (杉浦) 鈴 (ライター・アナークフェミニスト)

コーディネーター：浜崎史菜 (CGS研究所特任助教、CGS運営委員、編集委員)

*GSS科目「ジェンダー・セクシュアリティ研究へのアプローチ」内での講演

6/10 (土) | 「オルタナティブなプラットフォームとしてのフェミニズムZINEの可能性

—トーク&ZINEワークショップ」

登壇者 & ワークショップファシリテーター：

宮越里子 (デザイナー・フェミニストアクティヴィスト)

場所：ERB-347

コーディネーター：浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)

協力：葛原千景 (CGS 研究所助手)

岡俊一郎 (CGS 研究所助手、編集委員)

文可依 (CGS 研究所助手)

6/12 (月) | 「フェミニズム／ウィア+キリスト教？」

登壇者：工藤万里江

場所：Zoom

コーディネーター：岡俊一郎 (CGS 研究所助手、編集委員)

6/14 (水) | 『怒りを力に—ACT UPの歴史』(2012) 上映会

(監督：ジム・ハバード 日本語字幕：FAV 連連影展)

場所：H-213

プレゼンテーション：岡俊一郎 (CGS 研究所助手、編集委員)

コーディネーター：岡俊一郎 (CGS 研究所助手、編集委員)

浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)

協力：文可依 (CGS 研究所助手)

6月16日 (金) | 「LGBT理解増進法」について声明発表

場所：CGS ウェブサイト

ジェンダー研究センター有志

6月19日 (月) | 学生団体GeNuine企画・主催 ディスカッションイベント

～核兵器とジェンダー不平等を“解体”する～

登壇者：徳田悠希 (上智大学学生)

加美山紗里 (ICU 学生)

高松香奈 (CGS 運営委員、編集委員)

場所：国際基督教大学 (ICU) 縦寮・楓寮1階セミナールーム1

主催：学生団体GeNuine

共催：CGS

6月25日 (日) | 春学期 学生主導読書会

対象図書：飯野由里子・星加良司・西倉実季『「社会」を扱う新たなモード—「障害の社会モデル」の使いかた』(生活書院、2022年)

担当者：林田祐季 (ICU 学生)

場所：オンライン

7月10日(月) | 第68回ふわカフェ「日常におけるケア」

場所：CGS

世話人：葛原千景 (CGS 研究所助手)、文可依 (CGS 研究所助手)

秋学期

9月14日(木) | CGS 秋の交流会

場所：CGS

10月7日(土) | 「強制的(異)性愛に抗うーAセクシュアルの視点から」

場所：国際会議室

登壇者：三宅大二郎 (大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程)

中村健 (As Loop、アロマンティック・アセクシュアル当事者)

松浦優 (九州大学大学院 人間環境学府 博士後期課程)

藤高和輝 (京都産業大学准教授)

長島史織 (立命館大学大学院先端総合学術研究科)

高井ゆと里 (群馬大学准教授)

佐川魅恵 (東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

葛原千景 (東京大学大学院)

司会：羽生有希 (CGS 研究員)

パネルディスカッションコメンテーター：

浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)

主催：CGS

共催：国際基督教大学キリスト教と文化研究所 (ICC)

企画・運営：羽生有希 (CGS 研究員)

葛原千景 (CGS 研究所助手)

浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)

協力：文可依 (CGS 研究所助手)

岡俊一郎 (CGS 研究所助手、編集委員)

小西優実 (CGS 研究所助手、編集委員)

10月14日(土) | Rainbow Reunion 2023

場所：アラムナイハウス

コーディネーター：浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)

岡俊一郎 (CGS 研究所助手、編集委員)
文可依 (CGS 研究所助手)
小西優実 (CGS 研究所助手、編集委員)

冬学期

12月15日 (金) | 冬学期学生主導読書会

対象図書：サラ・アーメッド (著)、飯田麻結 (訳)『フェミニスト・キルジョイーフエミニズム
を生きるということ』(人文書院、2022年)
担当者：林田祐季 (ICU 学生)、中村桃子 (ICU 学生)
日時：12月15日 (金) ~ (毎週開催)
場所：CGS、オンライン

12月21日 (木) | CGS 研究所助手歓迎交流会

場所：CGS

2024年1月18日 (木) | 【「人間」を脱植民地する】第1回勉強会

場所：CGS
プレゼンテーション：浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)
運営・企画：浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)

1月29日 (月) | 特別講義「中東研究とジェンダー・オリエンタリズム」

登壇者：嶺崎寛子准教授 (成蹊大学)
企画・運営：加藤恵津子 (CGS 副センター長、CGS 運営委員、編集委員)
* ANT201「文化人類学とジェンダー研究」内での講演

2月8日 (木) | 【「人間」を脱植民地化する】第2回勉強会

場所：CGS
プレゼンテーション：浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)
運営・企画：浜崎史菜 (CGS 研究所特任助教、CGS 運営委員、編集委員)

2月12日 (月) | 【「人間」を脱植民地する】特別講演「同時代の、またべつのジェノサイ ダルな「日常」を生きながら」

登壇者：Janis Cherry (フェミニズムとレズビアン・アートの会 (FLA) / 「フツアのLGBTをク
ィアする」)

場所：Zoom

運営・企画：浜崎史菜（CGS研究所特任助教、CGS運営委員、編集委員）

2月24日（土） | 公開講演「アクティビズムを多様化する一障害や病をかかえる有色のひとびとによるベッド・アクティビズム」

登壇者：西田明美（イリノイ大学シカゴ校准教授、Disability & Human Development and Gender & Women's Studies）

場所：Zoom

主催：CGS

共催：国際基督教大学平和研究所（PRI）

運営・企画：浜崎史菜（CGS研究所特任助教、CGS運営委員、編集委員）

葛原千景（CGS研究所助手）

文可依（CGS研究所助手）

2月29日（木） | GSSメジャー卒論発表会・レインボー賞発表

場所：国際会議室

3月9日（土） | 【「人間」を脱植民地する】特別講演「動物をめぐる政治と植民地主義の結節点：イスラエルの事例から考える」

登壇者：保井啓志（筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局助教）

場所：Zoom

運営・企画：浜崎史菜（CGS研究所特任助教、CGS運営委員、編集委員）

CGS公式ウェブサイト「CGS Online」、ツイッター（X）公式アカウント、facebookでは随時、情報を更新しています。また、CGSジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』も「CGS Online」からダウンロードできます。

AY2023 CGS Activity Report

Spring Term

April 3rd 2023 | Publication and Distribution of “ICU Possibilities Guide: Gender Dysphoria and Campus Life vol. 2” (2023)

Editor in chief and writer for the AY2023 revised version:

Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Cooperation by students for the AY2023 revised version:

Sari Kamiyama (ICU Student)

Nanami Sakamoto (ICU Student)

English translation for the AY2023 revised version:

Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

English Proofreader: Beverly Curran (Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Design: Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

April 27th | CGS Spring Gathering 2023

Venue: Lawn Area in front of Honkan

May 24th | CGS Public Lecture by Professor Samuel Vernet:

“An Ambivalent Support: When Opposing Homophobia Strengthen the Heteronormative Order”

Venue: Alumni House

Coordinator: Olivier Ammour-Mayeur (Director, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

May 30th – June 15th | The 11th Annual R-Weeks

The 11th R-weeks were planned and organised by

Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

Chloe Wen (Research Institute Assistant, CGS)

May 30th – June 30th | **The Fuwarin Panel Exhibition and Introduction of the Books related to R-weeks events**

Venue: Library

Coordinator: Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

May 30th | **ICU and Parenting**

Venue: CGS (ERB-301)

Coordinator: Natsumi Ikoma (Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

May 30th | **Special Lecture “Activism and Art to Project / be Projected”**

Speaker: Sho Akita (normal screen)

Coordinator: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

*Part of GSS101 Approaches to Gender and Sexuality Studies

June 1st | **Special Lecture “Towards Support of Sexual Violence Survivors Regardless of Gender and Sexuality”**

Speaker: Miho Okada (Broken Rainbow-Japan, Rape Crisis Network)

Coordinator: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

*Part of GSS101 Approaches to Gender and Sexuality Studies

June 3rd | **“For Making Gender Affirmative University and Society”**

Speaker: Kazuko Tanaka (CGS Advisor, Co-representative of Mitaka Diversity Centre), Ekinaka (Graduate School Student)

akatsuki

Etsuko Kato (Vice Director, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Venue: Honkan & Online

Organiser: Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

With the help of

Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

Chloe Wen (Research Institute Assistant, CGS)

June 5th | **Going Beyond "What is Asexual?": A Conversation with the Translator of ACE**

Speaker: Yuki Hanyu (Research Fellow, CGS)

Commentator: Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Venue: ERB-347

June 6th | **"Against the Discourse of 'Japan used to be generous about gender/sex'"**

Speaker: Rin Takashima (Sugiura) (Writer, Anarcha-Feminist)

Coordinator: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

*Part of GSS101 Approaches to Gender and Sexuality Studies

June 10th | **"Possibilities of Feminist ZINEs as Alternative Platforms" Lecture and ZINE-making Workshop**

Speaker and Workshop Facilitator: Satoko Miyakoshi (Designer, Feminist Activist)

Venue: ERB-347

Coordinator: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

With the help of

Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

Chloe Wen (Research Institute Assistant, CGS)

June 12th | **Feminism/Queer + Christianity?**

Speaker: Marie Kudo

Venue: Zoom

Coordinator: Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

June 12th | **Film Screening of "United in Anger: A History of ACT UP" (2012, dir. Jim Hubbard, DVD with Japanese subtitles: Feminist Active documentary Video festa FAV連連影展)**

Venue: H-213

Presentation: Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

Coordinator: Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

With the help of Chloe Wen (Research Institute Assistant, CGS)

June 16th | Publication of Statement “On the Government Law to “Promote Understanding of LGBT””

Venue: CGS website

Written by interested members of CGS

June 19th | Discussion Event by A Student-led Group GeNuine “Dismantling Nuclear Weapons and Gender Inequality”

Speaker: Yuki Tokuda (Sophia University student), Sari Kamiyama (ICU student),
Kana Takamatsu (Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Venue: Seminar Room 1, Momi House & Maple House, ICU

Organiser: GeNuine (Student-led group)

Co-organiser: CGS

June 25th | Spring Term Student-led Reading Group

Text: Iino Yuriko, Hoshika Ryoji, Nishikura Miki, “Shakai” o atsukau aratana mōdo:
“shōgai no shakai moderu” no tsukaikata (Seikatsu Shoin, 2022)

Organiser: Yuki Hayashida (ICU student)

Venue: Online

July 10th | The 68th Fuwa Café “Care in Everyday Life”

Venue: CGS

Coordinator: Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Chloe Wen (Research Institute Assistant, CGS)

Autumn Term

September 14th | CGS Autumn Gathering

Venue: CGS

October 7th | Against Compulsory (Hetero-)Sexuality: From Asexual Perspectives

Venue: International Conference Room

Speaker: Daijiro MIYAKE (Ph.D. Student, Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

Ken NAKAMURA (As Loop, Aromantic · Asexual person)

Yuu MATSUURA (Ph.D. student, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University)

Kazuki FUJITAKA (Associate Professor, Kyoto Sangyo University)

Shiori NAGASHIMA (Ritsumeikan University Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences)

Yutori TAKAI (Associate Professor, Gunma University)

Misato SAGAWA (Ph.D. Student, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo)

Chikage KUZUHARA (Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo)

Facilitator: Yuki Hanyu (Research Fellow, CGS)

Panel Discussion Commentator:

Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Hosted by CGS

Co-hosted by ICC (Institute for the Study of Christianity and Culture, ICU)

Organiser: Yuki Hanyu (Research Fellow, CGS)

Kuzuhara Chikage (Research Institute Assistant, CGS)

Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

With the help of

Chloe Wen (Research Institute Assistant, CGS)

Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

Yuumi Konishi (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

October 14th | Rainbow Reunion 2023

Venue: Alumni House

Coordinator: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

Chloe Wen (Research Institute Assistant, CGS)

Yuumi Konishi (Research Institute Assistant, Editorial Board Member, CGS)

Winter Term

December 15th | **Start of Winter Term Student-led Reading Group (every week)**

Text: Sara Ahmed, *Feminisuto kirujoi: feminizumu o ikiru to iu koto* (Jinbun shoin, 2022), translated by Mayu Iida

Organiser: Yuki Hayashida (ICU student)
Toko Nakamura (ICU student)

Date: December 15th (every Friday)

Venue: CGS & Online

December 21st | **CGS Gathering to Welcome the CGS Research Institute Assistants**

Venue: CGS

January 18th 2024 | **【Decolonising the “Human”】 First Study Group Session**

Venue: CGS

Presentation: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Organiser: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

January 29th | **Special Lecture “Middle Eastern Studies and Gendered Orientalism”**

Speaker: Hiroko Minesaki (Associate Professor, Seikei University)

Organiser: Etsuko Kato (Vice Director, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

*Part of ANT201 Anthropology and Gender Studies

February 8th | **【Decolonising the “Human”】 Second Study Group Session**

Venue: CGS

Presentation: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Organiser: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

February 12th | **【Decolonising the “Human”】 Special Lecture “Living Coetaneous and Yet Different Genocidal “Every Day””**

Speaker: Janis Cherry (Feminism and Lesbian Art working group (FLA) / “Queering Futsu-no-LGBT”)

Venue: Zoom

Organiser: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

February 24th | **Public Lecture “Diversifying Activism: Bed Activism by Disabled and Sick People of Color”**

Speaker: Akemi Nishida (Associate Professor, Disability & Human Development and Gender & Women’s Studies, University of Illinois Chicago)

Venue: Zoom

Hosted by CGS

Co-hosted by PRI (Peace Research Institute, ICU)

Organiser: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Kuzuhara Chikage (Research Institute Assistant, CGS)

Chloe Wen (Research Institute Assistant, CGS)

February 29th | **GSS Major Thesis Presentation Day • Announcement of Rainbow Awards**

Venue: International Conference Room

March 9th | **【Decolonising the “Human”】 Special Lecture “The Politics of Intersections between Animals and Colonialism: A Consideration of Cases from Israel”**

Speaker: Hiroshi Yasui (Assistant Professor, Bureau of Human Empowerment, University of Tsukuba)

Venue: Zoom

Organiser: Fumina Hamasaki (Assistant Professor by Special Appointment, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

執筆者紹介 Author Profile

小口藍子 | お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科博士後期課程

専門：社会学、ジェンダー研究、男性／男性性研究

Aiko OGUCHI | Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Sciences,
Ochanomizu University

Specialization: Sociology, Gender Studies, Men and Masculinity Studies

白井望人 | 神戸大学大学院国際文化科学研究科修士課程

専門：社会学、ゲイ・スタディーズ

Mito SHIRAI | Master's Student, Graduate School of Intercultural Studies,
Kobe University

Specialization: Sociology, Gay Studies

欧陽珊珊 | 立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程・日本学術振興会特別研究員 (DC1)

専門：社会学、クィア・スタディーズ

OUYANG Shanshan | Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences,
Ritsumeikan University / Research Fellow for Young Scientists (DC1) of JSPS

Specialization: Sociology, Queer Studies

古怒田望人 | 大阪大学人間科学研究科博士課程

専門：クィア理論、トランスジェンダー研究

Asahi KONUTA | Graduate School of Human Science in Osaka University

Specialization: Queer Theory, Transgender Studies

小川幸姫 | プリンストン大学

専門：社会学専攻候補。また、ジェンダーセクシュアリティ学、及びアジア系アメリカ学において副専攻候補。

Koki OGAWA | Princeton University

Specialization: A.B. candidate in the Sociology Department. Expected minors in Gender and Sexuality Studies and Asian American Studies.

国際基督教大学ジェンダー研究センター (CGS) 所員 Members of the Center for Gender Studies, ICU

2024年3月現在
as of March, 2024

オリビエ・アムール＝マヤール (センター長、運営委員) *
Olivier AMMOUR-MAYEUR (Center Director, Steering Committee Member)*
Women's Studies, French Literature, Film Theory

新垣修
Osamu ARAKAKI
International Law

クリストファー・ボンディー
Christopher BONDY
Sociology

ベヴァリー・カレン (運営委員) *
Beverley F. M. CURRAN (Steering Committee Member) *
Interlingual Translation, Cultural Translation, Media Translation, Translation Studies

レベッカ・エクハウス
Rebekka ECKHAUS
Bi/multilingualism, Learner Autonomy, Blended Learning

ロバート・エスキルドセン
Robert ESKILDSEN
Modern Japanese History

マット・ギラン
Matthew A. GILLAN
Music, Ethnomusicology

生駒夏美 (運営委員) *
Natsumi IKOMA (Steering Committee Member) *
Contemporary English Literature, Representation of the Body in British and Japanese Literature

伊藤亜紀

Aki ITO

Storia dell'Arte Italiana, Storia del Costume Italiano

上遠岳彦

Takehiko KAMITO

Biology

加藤恵津子 (副センター長、運営委員) *

Etsuko KATO (Vice Director, Steering Committee Member) *

Cultural Anthropology, Mobility Studies

菊池秀明

Hideaki KIKUCHI

The Social History of China in the 17th-19th Centuries

アレン・キム

Allen KIM

Sociology

マーク・W・ランガガー

Mark W. LANGAGER

Education, Comparative and International Education

松村朝雄

Tomoo MATSUMURA

Mathematics

峰島知芳 (運営委員)

Chika MINEJIMA (Steering Committee Member)

Atmospheric Chemistry, Environmental Dynamic Analysis

森木美恵

Yoshie MORIKI

Cultural Anthropology, Demography

羅一等

Ildeung NA

Sociology

那須敬

Kei NASU

History of Religion, Culture and Politics in Early Modern England

西村幹子

Mikiko NISHIMURA

Sociology of Education, International Cooperation in Educational Development

大森佐和

Sawa OMORI

International Public Policy, International Political Economy

クリストファー・サイモンズ

Christopher E. J. SIMONS

English Literature

アダム・スミス

Adam SMITH

Psychology

園山千里 (運営委員)

SONOYAMA, Senri (Steering Committee Member)

Classical Japanese Literature, Japanese Studies in Poland and Other European Countries

高松香奈 (運営委員) *

Kana TAKAMATSU (Steering Committee Member) *

Politics, International Relations

椿田有希子

Yukiko TSUBAKIDA

Japanese History

山本妙子

Taeko YAMAMOTO

European History (French History, Early Modern France, Social History, Urban History, Christianity)

浜崎史菜 (運営委員) *

Fumina HAMASAKI (Steering Committee Member) *

Feminist & Queer Theory, Feminist Philosophy, Feminist Art and Literature

* 編集委員

Editorial Board Members

ICUジェンダー研究所ジャーナル 『ジェンダー&セクシュアリティ』 第20号投稿規程

2024年3月現在

1) ジャーナル概要

『ジェンダー&セクシュアリティ』は、国際基督教大学ジェンダー研究センターが年一回発行するジェンダー・セクシュアリティ研究分野の学術誌である。研究部門では、ジェンダー・セクシュアリティ研究における実証的研究や理論的考察に関する論文（綿密な学術的研究と、独創的な考察から成る、学術界に広く貢献しうる論考）、研究ノート（学術的研究・考察の途上にあつて、学術界に広く貢献しうる論考）を掲載する。フィールド部門では、活動家によるケーススタディ、組織・国内・国際レベルにおけるジェンダー関連活動に関するフィールドレポート（様々な領域の専門家、および研究者が、日々の実践の中から現状の側面を報告するもの）を掲載する。書評部門では、ジェンダー・セクシュアリティに関連する近刊書の書評を掲載する。

2) 第20号発行日：2025年3月

3) 第20号論文投稿締切：2024年7月31日

4) 原稿提出先

Eメール：cgs@icu.ac.jp

5) 応募要綱

a) 原稿

- ・本誌に投稿される原稿は、全文あるいは主要部分において未発表であり、他誌へ投稿されていないものとする。
- ・使用言語は日本語または英語に限る。
- ・原稿の様式は、Publication Manual of the American Psychological Association（2020年発行第7版）の様式に従うこと。様式が異なる場合は、内容の如何に関わらず受理しない場合がある。
- ・第一言語でない言語を使用して論文および要旨を執筆する場合は、投稿前に必ずネイティブ・チェックを通すこと。書かれた論文および要旨に文法的な問題が見られるなど不備が目立つ場合は、その理由により不採用になる場合がある。
- ・姓名・所属・専門分野・Eメール・住所・電話は別紙に記載する（姓名・所属・専門分野は、日本語と英語で記載すること）。審査過程における匿名性を守るため、原稿および原稿ファイル名には執筆者が特定できる形で氏名を記載しないこと。
- ・原稿料の支払い、掲載料の徴収は行なわない。

- ・本誌が国際的に発表される学術誌であることを踏まえたうえで原稿を執筆すること。
- ・本規定に沿わない原稿は、改訂を求めて返却されることがある。

a-1) 研究部門（研究論文・研究ノート）

- ・研究論文は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で16,000 – 20,000字、英語の場合は6,500 – 8,500 wordsの長さとする。
- ・研究ノートは、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字以内、英語で5,000 words以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語/英語両言語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。
- ・研究論文として投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、研究ノートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は研究論文に準ずる。

a-2) フィールド部門（フィールドレポート）

- ・原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字、英語で5,000 words以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語/英語両言語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。
- ・研究論文・研究ノートとして投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、フィールドレポートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は、研究論文・研究ノートに準ずる。

b) 図表および図版

- ・図表は別紙で添付し、本文内に取り込まないこと。
- ・図版は直接印刷に耐える画質のものを添付すること。
- ・本文中における図表・図版のおおよその位置を原稿上に示すこと。
- ・画像やイラスト、図表など著作権が著者にはないものについては、署名された掲載使用の許可書を同時に提出すること。

c) 提出原稿

- ・原稿は、電子ファイルでEメール (cgs@icu.ac.jp) に添付して提出する。
- ・電子ファイルの保存形式
 - できる限りMicrosoft Word形式（ファイル名.doc、ファイル名.docx）で作成したものを提出すること。
 - Microsoft Word形式でのファイル保存が困難である場合は、Rich Text形式（ファイル名.rtf）、またはプレーンテキスト形式（ファイル名.txt）で保存したものを提出すること。

- 上記以外の形式、特に紙媒体から読み込んだ画像データによる本文及び要旨の提出は認めない。

6) 校正

校正用原稿が執筆者に送付された場合、校正のうえ提出期限内に返送すること。その後、文法、句読法などの形式に関する微修正を、編集委員会の権限で行うことがある。

7) 審査過程

投稿原稿は編集委員会が指名する審査者によって審査される。審査では独自性、学術性、論旨の明快さ、重要性および主題のジェンダー・セクシュアリティ研究に対する貢献度が考慮される。原稿の改稿が求められる場合、審査意見および編集コメントが執筆者に伝えられる。投稿の受理・不受理の最終判断は編集委員会が下すものとする。

8) 著作権

投稿を受理された論文の著作権は、他の取り決めが特別になされない限り、国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会が保有するものとする。自己の論文および資料の複製権および使用権に関して、執筆者に対する制限は一切なされないものとする。

9) 原稿の複写

原稿が掲載された執筆者には3冊（執筆者が複数いる場合は5冊まで）の該当誌を贈呈する。なお、それ以上の部数については別途ジェンダー研究センターに注文することができる。

当規定は予告なく改定されることがある。

The Journal of the Center for Gender Studies, ICU

Gender and Sexuality

Journal Regulations for Vol. 20

as of March, 2024

1) Journal Overview

Gender and Sexuality is an academic journal on the study of gender and sexuality, published by the Center for Gender Studies at the International Christian University. The journal's research section shall consist of research papers on empirical investigations, theoretical discussions on gender and sexuality studies ⁽¹⁾, and research notes ⁽²⁾. The field section shall feature case studies by activists, and field reports ⁽³⁾ concerning gender-related activities at institutional, domestic, and international levels. The final book review section shall contain reviews on upcoming books pertaining to gender and sexuality.

*¹ Research papers should be based on thorough academic research, contain original and creative viewpoints, and contribute to a wider academic field.

*² Research notes should contain discussions that are still in progress but show their potential to contribute to a wider academic field.

*³ Field reports should report on the author's daily practice, focusing on one aspect of the field being studied.

2) Publication Date of Volume 20: March, 2025

3) Manuscript Submission Deadline for Volume 20: July 31, 2024

4) E-mail Address for Manuscript Submissions: cgs@icu.ac.jp

5) Rules for Application

a) Manuscripts

- Manuscripts submitted to this journal must be previously unpublished, in full or in part.
- Only Japanese or English manuscripts shall be accepted.
- Manuscript format must be in accordance with the Publication Manual of the American Psychological Association (7th Edition, 2020). Manuscripts submitted in other formats may be rejected regardless of their contents and their scholarly worth.
- Manuscripts (papers or summaries) that are not in the author's native language must be proofread by a native speaker of that language. Manuscripts with

obvious inadequacies such as grammatical errors shall be rejected.

- The author's name, affiliation, specialization, e-mail address, postal address and telephone number should be written on a separate title page. Name, affiliation and specialization should be indicated in both English and Japanese. To ensure anonymity during the screening process, the author's name should not appear in the text or document file names.
- There shall be no payment involved for manuscripts or for insertion.
- Manuscripts should be written in a style appropriate for an internationally-circulated academic journal.
- Manuscripts that do not conform to these guidelines may be returned with a request for revision.

a-1) Research Section

- Research papers should be between 16,000 to 20,000 Japanese characters or 6,500 to 8,500 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Research notes should be less than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Titles should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
- Two abstracts, one in English (no more than 500 words) and one in Japanese (no more than 800 Japanese characters), should be attached on separate sheets with a list of five keywords in both English and Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper may be accepted as a research note, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers.

a-2) Field Section

- Manuscripts should be no longer than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- The title should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
- Two abstracts, one in English (no more than 500 words) and one in Japanese (no more than 800 Japanese characters), should be attached on separate sheets with a list of five keywords in both English and Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper or research note may be accepted as a field report, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers

or research notes.

b) Figures and Graphic Images

- Figures should be attached on a separate sheet. Do not include them in the text.
- Graphic images should also be attached on a separate sheet, and should be of a quality high enough to resist degradation during printing.
- The approximate position of the figure/image in the document should be indicated.

c) Manuscript Submission

- Manuscripts should be submitted as an e-mail file attachment to cgs@icu.ac.jp.
- The digital copy should preferably be submitted in MSWord (filename .doc, filename.docx) format. Files may also be submitted in Rich Text format (filename.rtf) or Plain Text format (filename.txt).
- Files in formats other than those listed above or scanned copies of images or text, shall not be accepted.

6) Revisions

If a manuscript is returned to the author for revision, the manuscript should be revised and sent back by the specified date. Note that slight modifications (grammar, spelling, phrasing) may be carried out at the discretion of the editorial committee.

7) Screening Process

Submitted manuscripts shall be screened and chosen by reviewers designated by the editorial committee. Factors for selection include originality, scholarlyness, clarity of argument, importance, and the degree of contribution that the manuscript offers for the study of gender and sexuality. In the event that a revision of the manuscript is required, opinions and comments by the editorial committee shall be sent to the author. The final decision for accepting or rejecting an application rests in the hands of the editorial committee.

8) Copyright

Unless a special prior arrangement has been made, the copyright of an accepted manuscript shall belong to the Editorial Committee of the ICU Center for Gender Studies. No restrictions shall be placed upon the author regarding reproduction rights or usage rights of the author's own manuscript.

9) Journal Copies

Three copies of the completed journal (or five in the case of multiple authors) shall be sent to the author of the accepted manuscript. Additional copies may be ordered separately.

Note that these guidelines may be revised without prior notice.

編集後記

ベヴァリー・カレン（編集長）

ここに第19号をお届けできることを嬉しく存じます。年を追うごとに、より多くの論文・研究ノートのご応募があり、編集委員一同感激しております。読者の皆様に、本年度の記事が洞察に富み、示唆に富み、社会におけるジェンダーとセクシュアリティについての理解を深め、楽しんでいただけるものと信じております。本号の編集・発行に携わったCGSの関係者の皆様に感謝いたします。

Postscript from the Editor in Chief

Beverley CURRAN

It is a great pleasure to present Volume 19 of *Gender and Sexuality*. We appreciate those that submitted contributions to the issue, as well as those who provided peer review. We trust that you will find this year's articles insightful, thought-provoking, and extend your understanding of gender and sexuality in society. Thank you to all those at CGS who have been involved in the editing and publication of this volume.



Gender and Sexuality Vol.19
Journal of the Center for Gender Studies, International Christian University

Printed and Published on March 31, 2024

Editor International Christian University
Center for Gender Studies Editorial Committee (in alphabetical order: Olivier Ammour-Mayeur, Beverly CURRAN, Natsumi IKOMA, Etsuko KATO, Kana TAKAMATSU), Fumina HAMASAKI (Assistant Professor by Special Appointment, CGS), Yuumi KONISHI (Research Institute Assistant, CGS), Shunichiro OKA (Research Institute Assistant, CGS)

Publisher Center for Gender Studies
International Christian University
ERB 301, 3-10-2 Osawa, Mitaka city, Tokyo 181-8585 JAPAN
Email: cgs@icu.ac.jp
Website: <https://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

Printing Hakuhousha Co.,Ltd.

© 2005 by Center for Gender Studies, Japan.
All rights reserved.

国際基督教大学ジェンダー研究センタージャーナル
『ジェンダー&セクシュアリティ』第19号

2024年3月31日 印刷・発行

編集 国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会 (五十音順: オリヴィエ・アムール=マヤール、生駒夏美、加藤恵津子、ベヴァリー・カレン、高松香奈、岡俊一郎 (CGS研究所助手)、小西優実 (CGS研究所助手)、浜崎史菜 (CGS特任助教)

発行 国際基督教大学ジェンダー研究センター
〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2 ERB 301
Email: cgs@icu.ac.jp
Website: <https://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

印刷 株式会社 白峰社

著作権は論文執筆者および当研究センターに所属し、著作権法上の例外を除き、許可のない転載はできません。